

法政大学 国際日本学研究所

Hosei University Research Center
for International Japanese Studies

The Newsletter



No.18 Nov.2013



C O N T E N T S

評価報告	3
シンポジウム報告	5
ワークショップ報告	15
研究会報告	20
東アジア文化研究会報告	31
勉強会報告	46
新刊案内	52

2012年11月17日(土)

国際シンポジウム

「ヨーロッパの博物館・美術館保管の

日本仏教美術コレクションと日本観の形成」

(法政大学市ヶ谷キャンパス

ボアソナード・タワー 26階A会議室)

ご報告

法政大学国際日本学研究所 所長
安孫子 信

2002年に本学の＜日本発信の国際日本学の構築＞プログラムが文部科学省 21世紀 COE 事業に採択されて以来、国際日本学研究所、野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所、大学院国際日本学インスティテュートという四つの研究・教育機関の連携をはかり、国際日本学研究所の事業全体を統括してきた「国際日本学研究所センター」が、所期の設置目的を果たしたということで、2013年3月31日をもって廃止となりました。いまや、四つの機関は独自に活動しつつ、他方で互いに連携していくことが自ずと実現されており、協働のために上位機関を置いておく必要はないと判断された次第です。こうして、国際日本学研究所も今後は独自の力で他の三機関との連携を図り、国際日本学研究所を推進してまいります。今後とも変わらぬご理解、ご支援を賜りますればまことに幸いです。なお、当研究所はこれまでセンターの事務部門に事務作業の大半を依存してやってまいりましたが、今般独自の事務組織を立ち上げ、支障なく事務作業も引き継がれておりますことを一言申し添えさせていただきます。

Announcement

Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies
ABIKO Shin

Since our university's "Declaration of International Japanese Studies" program was selected as the MEXT 21st Century COE project in 2002, the "Center for International Japanese Studies" has formed links between four research/educational institutes: Research Center for International Japanese Studies, The Nogami Memorial Noh Theater Research Institute, Institute of Okinawan Studies, and Graduate School Institute of International Japanese Studies, and has led general projects in international Japanese studies. Having achieved the purpose for which it was created, the Center was closed down on 31st March 2013. It was deemed no longer necessary for any one institute to oversee collaboration, and now the four institutes continue to carry out activities independently with the ability to foster ties between themselves. Thus, from now on, the Research Center for International Japanese Studies will also seek cooperation with the other three institutes in order to promote research in international Japanese studies. We sincerely hope for continuing understanding and support in the future from all those involved. The Research Center has relied heavily on the Center's administrative section for its overall administration, and we hope very much for a smooth transition to an independent administrative organisation.

報告

法政大学国際日本学研究所 所長
安孫子 信

自2002年本大学の「日本伝達の国際日本学の構築」項目被文部科学省21世紀COE所採用以来、由国際日本学研究所、野上記念法政大学能楽研究所、沖縄文化研究所、大学院国際日本学学院四个研究・教育機関聯合促办，统筹国际日本学整体研究事业的“国际日本学研究中心”，于其设置目标达成的2013年3月31日被正式废止。现在，四个机关继续独立活动，相互间的合作自然而然地实现，没有必要为了协调而设置上级机关。因此，国际日本学研究所今后也将依靠自身力量与其他三个机关共同合作，推进国际日本学研究所的发展。希望今后也能得到大家一如既往的理解和支持。由于到目前为止研究所的事务工作很大程度上依存于研究中心的事务部门，为了建立起独立的事务组织、并顺利完成事务工作的交接，特此敬上一言。

알림

호세이(法政)대학교 국제일본학연구소 소장
아비코 신 (安孫子 信)

2002년 본교의 <일본 발신 국제일본학 구축> 프로그램이 문부과학성 21세기 COE 사업에 채택된 이후, 국제일본학연구소, 노가미(野上)기념노가쿠(能楽)연구소, 오키나와(沖縄)문화연구소, 대학원 국제일본학인스티튜트 등 네 곳의 연구·교육기관의 연계를 도모하고 국제일본학 연구사업 전체를 총괄해 온 ‘국제일본학연구센터’가 소기의 설치 목적을 달성해 2013년 3월 31일 자로 폐지하게 되었습니다.

현재 네 기관은 독자적으로 활동하면서도 자연스럽게 연계하고 있어, 각 기관의 협력을 위해 상위기관을 둘 필요가 없다는 판단에 이르렀습니다. 국제일본학연구소도 향후 독자적인 힘으로 다른 세 기관과의 연계를 도모하고, 국제일본학 연구를 추진해 나가도록 하겠습니다. 앞으로도 변함없는 이해와 성원을 부탁드립니다.

또한, 지금까지 당 연구소는 사무업무 대부분을 센터의 사무부문에 의존해 왔으나, 이번에 자체적인 사무조직을 구성해 차질없이 업무를 진행하고 있음을 덧붙여 말씀드리는 바입니다.

文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」無事終了 「A」評価を獲得

法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授
ヨーゼフ・クライナー

文部科学省「国際共同に基づく日本研究推進事業」の採択を受けた「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」が平成 25 年（2013 年）3 月 31 日をもってその事業を終了し、最終結果として「A」評価（事業の目的に照らして、十分な成果があった）をいただきました。

この研究推進事業は平成 22 年から 3 年間にわたって、欧州で保管されている日本仏教美術の悉皆調査及び研究を推進してきました。ヨーロッパ（ウラル山脈までのロシア及びイスラエルとトルコを含む）においては、60 万点以上の膨大な数の日本コレクションが 300 余りの博物館・美術館に保管されています。名前を知られている大英博物館、ギメなどの国立博物館のものは既に日本側からの調査・研究（特に浮世絵）が進められていましたが、本学では、今まで注目されてこなかった仏教美術を、また地方レベルの博物館や美術館を対象に調査・研究することにしました。

この調査にあたり、チューリッヒ大学日本学科と連携協定を結び、客員所員 1 名を担当者にしましたことは、この研究プロジェクトの成功に大きな意義がありました。その所員は、31 カ国の 114 カ所の博物館・美術館と連絡を取り、そのうち 91 カ所と契約を結んで、資料を提供していただき、うち 31 カ所は現地での調査に至りました。なお、ここでいう仏教美術とは、彫刻、絵画、法具、書、お札のことをいいます。この研究のまとめとして、昨年 6 月初め、ポズナン大学の協力を得て、ポーランドにおいて国際シンポジウムを開催し、その成果を 1 冊の英文報告書 *Japanese Collections in European Museums IV: Buddhist Art* にしました。さらに、集積した約 3,000 点の資料をデータベース化して一般公開しています。

法政大学は今年度において、本事業を重点事業として引き続き継続しており、データベースの更新を行っております。

A Successful Conclusion to the “MEXT/ JSPS Joint International Project” “A” Grade Awarded

Staff Member, Hosei University Research Center for
International Japanese Studies;
Professor and Special Adviser, Planning
and Strategy Division
Josef KREINER

“Comprehensive Research of Japanese Buddhist Objects in European Museums and their Impact on the European Image of Japan”, selected as a MEXT/JSPS Joint International Project, came to an end on 31 March 2013, and as a result was awarded grade “A” (results sufficiently fulfilled the aims of the project).

The research project spanned three years from 2010, and undertook comprehensive research of Japanese Buddhist objects in European museums. Europe (including Russia as far as the Ural Mountains, Israel and Turkey) is in possession of a vast Japanese collection of over 600,000 artefacts housed in around 300 museums and galleries. Research of the collections (particularly Ukiyo-e) of well-known National Museums such as The British Museum

and the Guimet Museum had already been conducted by other projects in Japan. Hosei University, then, decided to focus upon hitherto uninvestigated Buddhist art, and to conduct research at museums and galleries also on a regional level.

We worked in cooperation with the Department of Japanese studies at the University of Zurich, and one visiting staff member was placed there in charge of overseeing the survey. This greatly determined the success of the research project. This staff member contacted 114 museums and galleries in 31 countries. Agreements were drawn up with 91 of them, and material was kindly submitted by them. 31 of these permitted research on location. Buddhist art in these cases referred to sculpture, paintings, ritual articles, calligraphy and talismans. The research results were brought together in an International Symposium held in Poland with the cooperation of Poznan University, and this resulted in a one-volume publication in English: *Japanese Collections in European Museums IV: Buddhist Art*. Furthermore, information gathered on approximately 3,000 objects has been entered into a database which is open to the public.

In the coming year, Hosei University will continue to address important issues that have emanated from this project, and to update the database.

文部科学省“国际合作推进 日本研究项目”顺利结束 获得“A”的评价

法政大学国际日本学研究所兼任所员、
国际战略机构特别教授
Josef Kreiner

被文部科学省“国际合作推进日本研究项目”所采用的“欧洲博物馆・美术馆保管的日本佛教美术作品及对日认识的形成”的这一课题于平成25年（2013年）3月31日顺利结束，并最终获得了“A”的评价（依照项目之目的，取得了充分成果）。

此研究项目从平成22年开始历时3年，推动了在欧洲所保管的日本佛教美术品的调查研究的发展。在欧洲（包括到乌拉尔山脉为止的俄罗斯和以色列、土耳其），有超过60万件以上的日本藏品被保管在300多所博物馆和美术

馆里。对于大英博物馆、吉美博物馆等有名的博物馆中的藏品日本方面已经有了调查研究（特别是关于浮世绘），因而我们的调查研究对象是至今还没有被关注的，或者是地方的博物馆和美术馆的佛教美术品。

在调查的过程中，与苏黎世大学日本学科签订合作协议并聘任一名客座所员，对此项目的成功有着极大的意义。通过此所员，我们与31个国家的114所博物馆・美术馆取得了联系，与其中的91所签订协议并取得资料，还对其中的31所进行了现场调查。要补充一点的是，在此所提到的佛教美术指的是雕刻、绘画、法器、书和纸币。作为此课题的总结，于去年6月初在波兹南大学的配合下，在波兰举行了国际研讨会，其成果集成为《*Japanese Collections in European Museums IV: Buddhist Art*》这篇英文报告。此外，还将收集到的约3000多件资料整理为数据库并公开。

法政大学在今年将会继续以本课题作为重点课题，对数据库进行进一步的更新。

문부과학성 ‘국제공동연구에 입각한 일본연구 추진사업’ 무사 종료 평가성적 ‘A’ 획득

호세이대학교 국제일본학연구소 겸담 연구수원·
국제전략기구 특별 교수
요셉 클라이너

문부과학성 ‘국제공동연구에 입각한 일본연구 추진사업’에 채택된 ‘유럽의 박물관 미술관에서 보관하고 있는 일본 불교미술 자료 총 조사와 그에 따른 일본 및 일본관 연구’가, 2013년 3월 31일자로 사업을 종료하고 최종 결과로 평가성적 ‘A’ (사업목적에 비추어 볼때 충분한 성과가 있었다)를 받았습니다.

이 연구추진사업은 2010년부터 3년간에 걸쳐 유럽에서 보관하고 있는 일본 불교미술 전체를 대상으로 조사와 연구를 추진해 왔습니다. 유럽(우랄산맥까지의 러시아 및 이스라엘과 터키 포함)에는 60만점이 넘는 방대한 수의 일본 컬렉션이 300여 곳의 박물관·미술관에 보관돼 있으며, 유명한 대영박물관, 기메이 등 국립박물관

에 있는 작품에 대해서는 이미 일본 측의 조사·연구(특히 우키요에(浮世繪))가 진행된 상황이었으나, 우리 대학은 지방의 박물관과 미술관을 대상으로 지금까지 주목받지 못했던 불교미술의 조사·연구를 했습니다.

여기서 말하는 불교미술이란, 조각, 그림, 법구, 서예, 부적을 가리키는 것으로, 이 조사를 위해 취리히대학교 일본학과와 연대협정을 맺고, 객원연구소원 한 명을 담당자로 기용한 것은 이 연구 프로젝트의 성공에 큰 의의가 있었다고 할 수 있습니다. 이 연구원이 31개국의 114개의 박물관·미술관과 연락을 취해 이 중 91개소와 계약을 맺어 자료를 제공받을 수 있었고, 이 중 31곳에서는 현지조사도 가능하게 되었습니다.

이 연구를 총정리하는 의미로 작년 6월 초에 포즈난대학교의 협력을 받아 폴란드에서 국제심포지엄을 개최했고, 그 성과로 한 권의 영문보고서《*Japanese Collections in European Museums IV: Buddhist Art*》를 발간했습니다. 또한, 수집한 약 3,000점의 자료를 데이터베이스화해 일반에 공개하고 있습니다.

호세이대학교는 금년도에 본 사업을 중점사업으로서 계속 추진하고 있으며, 데이터베이스를 갱신하고 있습니다.

文部科学省国際共同に基づく日本研究推進事業「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料の悉皆調査とそれによる日本及び日本観の研究」プロジェクト

国際シンポジウム報告会

ヨーロッパの博物館・美術館保管の 日本仏教美術コレクションと日本観の形成

● 日 時：2012年11月17日（土）10：00～18：00

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー26階A会議室

法政大学国際日本学研究所は、文部科学省の「国際共同に基づく日本研究推進事業」の採択を受け、2010年度以来、ヨーロッパの博物館・美術館に保管されている日本仏教美術資料の「悉皆調査」と「それによる日本及び日本観の研究」を、ヨーロッパの90か所以上の博物館・美術館との協力で推進してきた。そして、去る2012年6月4～6日には、ポーランド、ワルシャワ郊外のパラツ・ウォホフで、これまでの研究活動成果を検証する国際シンポジウムを実施した。本報告会は、そのシンポジウムの模様を紹介し、改めて研究の成果と意義を語る報告会として開催した。また、本年度はプロジェクトの最終年度にあたり、全体を総括する意味も込めておこなわれた。報告は13名がデータベース作成や現地調査の成果を盛り込んで、それぞれの研究分野についておこなった。ポーランドの国際シンポジウムに参加できなかった研究協力者の方々にも、積極的に参加していただき、より充実した報告会となった。

まず、福田好朗（法政大学常務理事）より開会の挨拶があった。続いて本プロジェクトの意義を「海外における日本仏教美術コレクション研究の一つの意義」と題して安孫子信（法政大学文学部教授、同国際日本学研究所所長）が、総括的な目的と研究方法について「欧州の博物館等保管の日本仏教美術資料に関する国際共同研究の目的と方法」と題して小口雅史（法政大学文学部教授）が報告した。次に、成果の大きな柱となるヨーロッパの博物館・美術館保管の美術作品のデータベースについて、田口昌弘（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）が「JBAE データベースの作成と操作」と題して概要を説明した。

ヨーロッパにおける日本美術コレクションの成立の歴史を広い視野から集めたヨーゼフ・クライナーの報告「ヨーロッパにおける日本美術のコレクションの歴史と現状」、17～19世紀のヨーロッパ社会において日本の仏教美術が与えた影響を考察したジョセフ・キブルツ（フランス国立科学研究センター教授）の報告「17世紀から19世紀にいたるヨーロッパにおける仏のイメージ」が続いた。

昼食をはさみ午後からはより専門的な美術史分野の報告となった。島谷弘幸（東京国立博物館副館長）は、「ヨーロッパにおける仏教書蹟」と題して、ポーランドでのシンポジウムの模様やヨーロッパにおける日本美術研究の現状について述べたうえで、ヨーロッパに所在する仏教書蹟作品を概観した。書蹟は、本プロジェクトにおいて最も作品数の割合が少なかったが、今回のプロジェクトには含まれない各国の図書館が多く所蔵していることを述べ、画賛などにも注目すべき書蹟があることを指摘した。続く丸山士郎（東京国立

博物館博物館教育課教育講座室室長）は、「ヨーロッパにおける仏教彫刻」と題してヨーロッパにおける仏教美術作品について述べ、ヨーロッパには少なからず仏像彫刻の優品も所蔵されていることを指摘し、模造や贋作についても重要な提言をおこなった。澤田和人（国立歴史民俗博物館准教授）は、「トリノ市立東洋美術館の袈裟コレクションについて」としてイタリア・トリノ市立東洋美術館でおこなった袈裟コレクションの現地調査の報告をおこなった。高橋悠介（神奈川県立金沢文庫学芸員）も、「プラハ国立美術館本『釈迦の本地』について」と題してチェコ・プラハ国立美術館に所蔵される絵巻『釈迦の本地』の調査報告をおこなった。口井知子（法政大学国際日本学研究所客員所員、多摩美術大学非常勤講師）は、「調査報告—ヨーロッパの日本仏教絵画コレクションについて—」と題して、現在までに収集した作品のなかから、重要な仏教絵画作品を取り上げ、概要を説明した。神野祐太（法政大学国際日本学研究センター客員研究員）は、「ドイツ・ミュンヘン民族学博物館所蔵の伎楽面について」と題してミュンヘン州立民族学博物館での現地調査の際に見いだした伎楽面について報告した。河合正朝（慶應義塾大学名誉教授、千葉市美術館館長）は、「ヨーロッパの個人コレクションとしての仏教絵画—ランゲン夫妻とグレゴリオス・マノスの蒐集を中心に—」と題してランゲン夫妻とグレゴリオス・マノスの蒐集した日本仏教作品について概観して報告するとともに、ヨーロッパにおける日本美術を展示する建築や環境についても言及した。

なお、当日ヘレナ・ホンクーポヴァ（プラハ・ナショナルギャラリー元館長）の参加が決まり、「大光山厨子のなぞ」と題してプラハ・ナショナルギャラリーと同館所蔵の日本美術コレクションの概要を報告した。この報告によって、ヨーロッパの博物館・美術館関係者の日本美術への積極的な姿勢を直接知ることができたのは貴重な成果であった。ホンクーポヴァは、ワルシャワでの国際シンポジウムでも重要な役割を果たした人物であり、国際シンポジウムの雰囲気までも本報告会で伝えることができた。

最後に、ヨーゼフ・クライナーによる報告「思わぬところで日本仏教美術にであう」がおこなわれた。日本の仏教美術は、大英博物館やギメ美術館のような各国の代表的な博物館・美術館に保管されるだけでなく、リトアニア、ラトビア、アルバニアなどの日本との関係が希薄と思われるような国々にも多数存在することが紹介され、日本美術の裾野が日本人の想像以上に広がっている現状が報告された。

総括では、今後の本プロジェクトの方向性について議論がおこなわれた。その結果、ヨーロッパの博物館・

シンポジウム報告

美術館関係者の日本美術への関心は高いが、ヨーロッパでは専門知識を得られないという現状がわかり、本プロジェクトをどのような形であれ継続することでヨーロッパのニーズに答えていくことが重要であると再確認された。

会場には日本人をはじめ諸外国の一般参加の方々が多数出席し、本プロジェクトへの関心の高さがうか

がえた。このような研究プロジェクトが継続することで、ヨーロッパだけでなく、日本の文化財行政のさらなる発展にも寄与することが期待できるといえよう。

【記事執筆：神野 祐太

(法政大学国際日本学研究センター客員研究員)】



ジョセフ・キブルツ氏
(フランス国立科学研究センター教授) による発表



島谷 弘幸氏 (東京国立博物館副館長) による発表



丸山 士郎氏 (東京国立博物館博物館教育課教育講座室室長)
による発表



高橋 悠介氏 (神奈川県立金沢文庫学芸員)
による発表



神野 祐太氏 (国際日本学研究センター客員研究員)
による発表

MEXT/JSPS Joint International Project “Comprehensive Research of Japanese Buddhist Objects in European Museums and their Impact on the European Image of Japan”

Debrief Session of the International Symposium “Japanese Buddhist Objects in European Collections and Their Impact on the European Image of Japan”

Date: Saturday, 17 November, 10:00-18:00
Venue: Hosei University Ichigaya Campus, Boissonnade Tower 26F Conference Room A

This debrief session introduced the results of the international symposium held at Palac Łochow, Poland, from 4-6 June 2012, with the purpose of investigating those research results and their significance. Because the current year sees the end of the project, a summarization of the whole project was also held during this debrief session. 13 participants reflected on the results of research during

the project to date whilst giving their reports. There was also strong attendance from those cooperating with our research who could not participate in the international symposium in Poland, which made the debrief session even more meaningful. During the concluding debate held at the end of the session, discussion arose concerning future directions that this project might provide. We now knew that although interest in Japanese art was great among European museums, we were unable to gain specialist knowledge in Europe. The importance was reconfirmed of answering to the needs of the Europe side in deciding in what form to continue with the project. The hall was filled with general participants from Japan and other countries, suggesting the height of the interest in this project. It is hoped that continuation of a similar project would contribute to further development in the management of cultural assets in Japan as well as in Europe.

Report by: JINNO Yuta (Visiting Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

国际合作推进日本研究项目 “欧洲博物馆等所藏日本佛教美术资料全面调查，及以此展开的日本、日本观研究”

国际学术研讨会

欧洲博物馆・美术馆保管的 日本佛教美术作品及对日认识的形成

时 间：2012年11月17日（星期六）10:00-18:00
会 场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦26层 A 会议室

本次报告会的主要目的在于介绍2012年在波兰的 Palac Łochow 所举行的国际学术研讨会的情况，并探寻其研究成果和意义。另外，由于今年是此项目的最后一年，在报告会上对此项目的总体情况进行了汇总。会上，13人

对到目前为止的研究成果作了报告，没有能够参加在波兰的研讨会的研究协助人员也积极地参与，使报告会显得更为充实。在最后的总结上，对本项目今后的方向性进行了讨论，其结果是，欧洲博物馆・美术馆的相关人员对日本美术的关心度很高，但在欧洲得不到相关的专业知识。此外，本项目以怎样的形式继续并响应欧洲方面的必要性这一重要问题得到了再次确认。除日本人外，还有来自各个国家的普通参加者出席了本次会议，显现出对本项目关心度的高涨。此类研究项目的继续，不仅是对欧洲，也期待其其对日本文化财产的进一步发展做出贡献

【执笔者：神野 祐太

（法政大学国际日本学研究中心客座研究员）】

문부과학성 국제공동연구에 입각한 일본연구 추진사업 “유럽의 박물관 등이 보관하고 있는 일본 불교미술 자료 총 조사와 이에 따른 일본 및 일본관 연구” 프로젝트

국제심포지엄 보고회

유럽 박물관·미술관에서 보관하는 일 본 불교미술 컬렉션과 일본관의 형성 형성

일 시: 2012년 11월 17일(토) 10:00~18:00
장 소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 보아소 나드 타워 26층 A회의실

본 보고회는 2012년 6월 4~6일 폴란드 팔락 로푸프(Palac Łochow)에서 열린 국제심포지엄의 상황을 소개하고 연구성과와 의의를 고찰하기 위해 실시됐다. 보고회에서는 지금까지 본 프로젝트의 연구성과를 반영한 13명의 보고가 있었다. 프로젝트 마지막 연도이기도

한 올해(2012)는 프로젝트 전체를 총괄하는 자리도 마련됐다. 또한 폴란드 국제심포지엄에 참석하지 못한 연구 협력자도 적극 참여해 더욱 알찬 자리가 됐다.

보고회의 마지막에 있었던 총괄 토의에서는 향후, 본 프로젝트의 방향성에 대한 논의가 이뤄졌다. 그 결과, 유럽의 박물관·미술관 관계자의 일본 미술에 대한 관심은 높지만, 유럽에서는 전문 지식을 얻을 수 없다는 현 상황을 알게 됐다. 그리고 본 프로젝트를 어떤 형태로든 지속함으로써 유럽 측의 필요에 부응하는 것이 중요하다는 것을 재확인했다. 회장에는 일본인을 비롯해 여러 나라의 일반 참가자가 다수 참석해, 본 프로젝트에 대한 높은 관심을 엿볼 수 있었다. 이러한 연구 프로젝트가 계속됨으로써 유럽뿐만 아니라 일본의 문화재 행정 발전에도 한층 더 기여할 것으로 기대된다.

【기사집필: 진노 유타

（神野祐太, 호세이대학교 국제일본학연구센터 객원연구원）】

シンポジウム報告

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量ー未来へ」

2012 年アルザスシンポジウム

国家アイデンティティと宗教

- 日 時：2012 年 11 月 2 日（金）～11 月 4 日（日）
- 共 催：法政大学国際日本学研究所 (Hosei University Research Center for International Japanese Studies: HIJAS)、フランス国立科学センター東アジア文明研究所 (Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale, Centre National de la recherche Scientifique)、ストラスブール・マルク・ブロック大学人文科学部日本学科、アルザス欧州日本学研究所 (Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA)
- 会 場：アルザス欧州日本学研究所 (CEEJA)

1. シンポジウム全体の概要

2005 年パリで「日本学とは何かーヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究」と題したシンポジウムを行って以来、法政大学国際日本学研究所 (HIJAS) は、ヨーロッパの日本学チーム（とくに現在のフランス東アジア文明研究センター (CRCAO)）との共同開催で、年に 1 回、国際日本学シンポジウムを開催してきている。2012 年も「国家アイデンティティと宗教」と題されたシンポジウムを、2007 年以來の会場であるアルザス欧州日本学研究所 (CEEJA) で、11 月 2 日から 4 日まで実施した。

今回の主題「国家アイデンティティと宗教」は、

HIJAS の 2010 年以來 5 カ年の研究課題「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」（文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業採択）によるものであり、この主題の下で、日本内外の視点から、歴史、文化、思想、社会、政治などの諸層を通して、日本の国家アイデンティティを宗教がどのように規定してきたのかを徹底して検討する作業が行われた。

今回のシンポジウムでの報告者は、日本側から 9 名、欧州側から 7 名の、合計 16 名であった。各報告者の論題は以下 Table 1 の通りである。

Table 1 Detail of Symposium

Date	Name	Affiliations and Country	Theme	Language
2nd November 2012	Min Wang	Hosei University (Japan)	Two Examples of Cultural Compositness in Japanese Folk Culture: the Silk Road and the Cult of Yu the Great	Japanese
	Josef Kyburz	CNRS, UMR 8155 CRCAO (France)	The Lotus and the Chrysanthemum--Japan in a Flower	English
	Maciej Kanert	Adam Mickiewicz University, Poznan (Poland)	Neither Nation, Nor Identity, Nor Religion--Japan in the 8th Century	English
	Yusuke Takahashi	Kanagawa Prefectural Museum Kanazawa-bunko (Japan)	The Concept of the National Land, and the Syncretism of Kami Worship and Buddhism	English
	Mark Teeuwen	University of Oslo (Norway)	Nation, Religion and Identity according to a Late-Edo Samurai	English
	Frédéric Girard	EFEQ (France)	Le besoin d'un nouveau type de monastère pour le Bakufu de Kamakura	Japanese
3rd November 2012	Jean-Pierre Berthon	CNRS, EHESS Centre de recherche sur le Japon (France)	Les nouvelles religions au prisme de l'identité nationale	Japanese
	Hidetoshi Uchiyama	Hosei University (Japan)	Utaki Religion in Yaeyama Islands: Focusing on the Case of the Sakishima Tsunami	Japanese
	Josef Kreiner	Hosei University (Japan)	The Religious Organization of the Ryukyu Kingdom	Japanese
	Frédéric Lesigne	University of Lyon (France)	Que dit l'ethno-folklorique japonaise de l'identité? Le Cas du village de Nagoshi In the dép. de Shiga	Japanese
	Masaru Sakamoto	Hosei University (Japan)	Views on Nature in Ancient Japanese Mythology	Japanese
	Junzo Kawada	Kanagawa University / Hosei University (Japan)	Définition des êtres humains au Japon: un motif pour penser l'identité japonaise	Japanese
	Yusuke Suzumura	Hosei University (Japan)	Kiyozawa Manshi and His Criticism toward the Twofold Truth Theory	English
	Didier Davin	CRCAO (France)	De la marotte à la définition de soi: petite histoire de la place du Zen au Japon	Japanese
4th November 2012	Shin Abiko	Hosei University (Japan)	Etat moderne et religion-- Nishi Amane et sa réflexion sur la religion	Japanese
	Tsutomu Hoshino	Hosei University (Japan)	Mujo (Impremance, Transience, Mutability): On Climate and the Religious Consciousness in Japan	Japanese

2. 各発表の概要

今回の 16 人による報告の概要は以下の通りである。

- (1) 王敏（法政大学 [日本]）／日本の民間信仰における混成性：シルクロードと禹王信仰を事例として
日本の民間信仰の中に見られる中国文化の影響を、日本全国約 50 か所で確認されている、中国の夏王朝の創始者とされる禹を讃える禹王

碑の事例、また、『西遊記』や『アラビアンナイト』に親しみ、作品の中でもそれらに言及している宮沢賢治の事例を通じて検討し、日本人の民間信仰が混成的で、他国の伝承にも開かれたものであることを示した。なお、この報告は遠隔を利用し、法政大学市ヶ谷キャンパスから行われた。

- (2) ジョセフ・キブルツ（国立科学研究学院 [フランス]）／蓮華と菊・花と日本

- 国家と宗教とが結びついた決定的歴史的事例として、752年の東大寺の建立と1889年の大日本帝国憲法の発布とを、「蓮華」と「菊」というそれぞれのシンボルにも触れて取り上げ、日本における宗教の政治的役割を分析した。前者では聖武天皇によって、仏教による国家の統一が目指され、また後者では明治天皇によって、告文で皇道のあり方が示されたのである。
- (3) マチエイ・カーネルト（アダム・ミツケヴィチ大学 [ポーランド]）／無国家、無アイデンティティ、無宗教—8世紀の日本
「8世紀の日本における国家アイデンティティとは何か？」と「8世紀の日本における宗教の規制は日本独特の現象か？」という問いを、マイケル・マンの社会に関する分析の枠組みを用いながら考察し、「8世紀にはstateは存在したがnationは存在しなかった」と「国家による宗教の規制は日本独自のものではなかった」という結論を導いた。
- (4) 高橋悠介（神奈川県立金沢文庫 [日本]）／国土観と神仏習合
1370年に描かれ、2004年に発見された日本図を手掛かりに、当初は仏教者によって「辺境の小国」として認識されていた日本が、本地垂迹説により、「仏が神の姿を借りて治める偉大な国」として認識される過程が、資料に基づき検討された。
- (5) マーク・トゥーエン（オスロ大学 [ノルウェー]）／江戸後期の武士による宗教と国家
明治時代に起きた廃仏毀釈運動の理論的な背景をなした江戸時代後半の書物『世事見聞録』（武陽隠士、1816年）を中心に、江戸時代における僧侶の社会的地位と、求められたあるべき姿がどのようなものであったかが考察された。
- (6) フレデリック・ジラル（フランス国立極東学院 [フランス]）／鎌倉幕府の為に、新しい寺院の模範が要求された
曹洞宗で根強く支持された玄奘三蔵崇拝と鎌倉幕府の第三代将軍源実朝が見た自らの前世に関する夢の逸話を手掛かりに、13世紀になって日本で流行した禅宗が、中国の禅宗の伽藍の配置を手本に寺院の構造を決定するなど、「新しい時代の新しい宗教のあり方」を示すものであったことが確認された。
- (7) ジャン＝ピエール・ベルトン（社会科学高等研究院日本研究所 [フランス]）／ナショナル・アイデンティティを通して見た新宗教
「疑似宗教」、「淫祠邪教」と見なされやすい日本の新宗教あるいは新新宗教を対象に、当初は反政府、あるいは反文明として出発しながら、日本の文明や伝統の保持を掲げる保守的な傾向へと変化している現状、他方で、「日本的なもの」を含んでいるにもかかわらず一部の新宗教や新新宗教が外国でも受け入れられている現状が、それぞれ分析された。
- (8) 内原英聡（法政大学 [日本]）／八重山の御嶽信仰—近世琉球・先島大津波の前後を事例として
1771年に起きた先島大津波を対象に、琉球王府による民間信仰への対応が規制から解放へと至る過程が検証され、さらに、沖縄における民間信仰の重要な形態である御嶽進行を事例とし、信仰と祭祀の関係、すなわち信仰における「かたち」と「ところ」の関係が吟味され、「かたち」が変化すれば、祭祀を取り巻く人間の生活そのものが変化し、「ところ」も変化していくことが示された。
- (9) ヨーゼフ・クライナー（法政大学 [日本]）／琉球王国の宗教体制
沖縄における民間信仰と琉球王府における正統的な信仰のあり方とが、女司祭であるノロの位置付けやニライカナイ、オボツカグラの概念を手掛かりに検討され、村における信仰の実際と王国における信仰の形態とが対比的に明らかにされた。これに加えて、現代の沖縄における信仰の様式も考察された。
- (10) フレデリック・ルシーニュ（リヨン大学 [フランス]）／民俗学は日本のアイデンティティについて何を語るか—名越町のオコナイ行事を事例に
滋賀県長浜市名越町の伝統行事である行内に関する調査結果が紹介され、そこでは、宗教的心性が地域の習俗、家の伝統、個人の信仰の各レベルで別々に、しかもからみ合って存在していることが示された。加えて、日本の民俗学、とりわけ柳田民俗学についての研究のフランスにおける蓄積や動向が紹介された。
- (11) 坂本勝（法政大学 [日本]）／記紀神話の自然観
『古事記』及び『日本書紀』を対象に、上代語における「もの」の概念と、そこに現れた、天孫降臨以前には「荒ぶる自然」の象徴となり、天孫降臨以降には「都市と国家を襲う霊威」として考えられた「もの」のざわめきのあり方が、日本人の宗教的心性の起源にあるものとして、実証的に検討された。
- (12) 川田順造（神奈川大学／法政大学 [日本]）／人を神に祀る風習：日本のアイデンティティを考える手がかりとして
東南アジアや欧州の一部にも類似する習慣があるものの、日本ではその数が著しく多い「人を神として祀る」という風習が多々の実例に即して検討された。加えて、明治時代までは天皇家と仏教の結びつきが強かったことが確認された。
- (13) 鈴木裕輔（法政大学 [日本]）／清沢満之の真俗二諦論批判
真宗大谷派の僧侶で哲学者であった清沢満之が、教団内で主流となっていた、現世での価値基準に従う俗諦と信仰上の価値基準である真諦とを区別する「真俗二諦論」に対して行った批判を検討し、清沢にとっては、俗諦と真諦とは並行的に存在するのではなく、俗諦が終わったところが真諦の出発点となることが示された。
- (14) ディディエ・デーヴァン（国立科学研究学院東アジア文明研究所 [フランス]）／趣味から自己定義へ：日本に於ける禅の位置の考察
欧米において日本の信仰の代表例として考えられている禅について、禅宗の発祥の地である中国では宗教であった禅が、日本では宗教というより生活実践として広まったこと、そして、

欧米が受け入れた禅も、宗教としてというより、生き方の指針を得る方法としての日本の禅であったことが示された。

(15) 安孫子信（法政大学〔日本〕）／近代国家と宗教—西周（1829-97）の宗教観

「哲学」という言葉を生み出した西周を対象に、オーギュスト・コントの哲学に依拠して自らの学問の体系を築き挙げた西が宗教をどのように捉えていたかを検討し、信教の自由と法への服従を要求するとともに、天皇制を擁護しつつも神権的な政治体制を批判していたことが明らかにされた。

(16) 星野勉（法政大学〔日本〕）／無常—日本の風土と宗教意識—

「無常」という概念を手掛かりに、風土と国民性、風土と宗教の関係を検討し、「詠嘆的な無常感が道元によって抽象的な面が捨象され、さらに世俗化することで茶の湯や剣術などが「道」へと展開する契機をなす」という、仏教における無常の概念の日本化の過程が確認された。

以上の各発表の後には質疑応答が続き、また各日も、全発表終了後には全体討議が行われて、いずれにおいても活発な議論が交わされた。とくに全体討議では以下のような問題が新たに提出された。「外来の宗教の土着化の過程」、「日本の宗教」や「日本人の宗教」が外国でも受け入れられる背景、「宗教における心と国家との関係」、「アジアやアフリカで一般現象である、西洋が進出した19世紀後半以降の新興宗教の多発生の理由」、「仏教が伝来する以前にも認められうる日本人の『はかなさ』の感情の起源」、「伝来時の仏教が日本人の内面に与えた影響」、「日本における『人を祀る』と『ものを祀る』との関係」、「日本本土と沖縄における死者に対する時間的な感覚の相違の問題」、「地理的な国土と宗教のあり方の関係」。これら事項は、今後検討すべき課題となろう。

3. シンポジウムの成果と意義

日本の国家アイデンティティと宗教の問題が、こうして、哲学、歴史学、文学、人類学、社会学、政治学

などの多様な観点から、しかも日本の内外の立場から考察されたことは、意義深いことであった。しばしば日本における宗教と政治をめぐる議論が、「国家神道と戦争」や「靖国問題」といった点に限定されがちであることに鑑みるなら、分析の手法の多様性と議論の多層性という点で、問題自身の客観化に、今回のシンポジウムは多大な意義を持つものであったと言えるであろう。その上で今回のシンポジウムが指し示す、日本における、そして、日本人における宗教の一般像を敢えて描き出すとすれば、一方で、精緻に体系化され国家や政治の制度と固く結びついていくということもなく、また他方で、個の心や内面性に絶対的に位置づくということもなく、習合現象に見られるように、社会習俗的な場所に絶えず向かっていく傾向にある、といったことになるであろう。こうして、日本で宗教は政治的存在ではない。しかし、そうではないとしても、それはきわめて社会的な存在である。その限りで宗教は、日本のアイデンティティと分かちがたく結ばれたものと言い得るのである。ただ、さらに付言すれば、この宗教的習俗の場所は混成的で、外国からのものもそこには多く流れ込んできているのである。宗教から見た日本のアイデンティティは、こうしてまた、閉じたアイデンティティでもないのである。

以上、学術的成果について一言申し述べたが、これに加えて、昨年からはまったスTRASブール大学の日本学専攻の大学院生による聴講が、今回は学部生にも拡大され、3日間の会期中に延べ20人以上の学生が会場を訪れたことも付言しておきたい。学部生の段階から、自らが専攻する日本研究という分野の最新の学問動向に触れることで、学ぶことに対する意欲形成が促進されることは有意義なことである。さらに、今回も現地に在住する、研究者ではない一般の方々からも、聴講参加者を得た。国際日本学シンポジウムは研究促進だけでなく、こうして研究活動の社会への還元という面でも、一定の役割を果たしているのである。

【記事執筆】

安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長・教授）、
鈴村 裕輔（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）



主な参加者による集合写真



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided)
Project for Private Universities (2010-2014)
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

“National Identity and Religion”

Date: Friday, 2 November- Sunday, 4 November 2012
Sponsors: Hosei University Research Center for International Japanese Studies: HIJAS, Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale, Centre National de la recherche Scientifique, Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA
Venue: Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA

The heading of this symposium was “National Identity and Religion”, and it examined how religion has prescribed Japanese national identity, through the range of history, culture, thought, society and politics from the viewpoint inside and outside Japan. The results showed that, in Japan, religion is finely organized and is not

strongly tied to state or political systems, nor does it have a definite place in the individual mind or internally, and we confirmed its tendency to head constantly towards locations of social customs, as can be seen by the syncretistic fusion of Shinto and Buddhism. Also, religion in Japan has an extremely social existence, and in that meaning we are able to say that it is inextricably linked to Japanese identity. Furthermore, religious customs are hybrid, and include many elements from other countries. It was also clear that Japanese identity seen from religion is not closed to the outside. This symposium was attended by students of Strasbourg University and members of the general public. In this respect the symposium was not just a means of presenting research by speakers, but carried out the role of circulating our research activities in society.

Report by: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor); SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④“对日认识”的三角测量——面向未来

2012 年阿尔萨斯研讨会

国家认同感与宗教

日 期：2012年11月2日(星期五)~11月4日(星期日)
共同举办：法政大学国际日本学研究所(Hosei University Research Center for International Japanese Studies: HIJAS)、法国国立科学中心东亚文明研究所(Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale, Centre National de la recherche Scientifique)、斯特拉斯堡大学人文科学部日本学科、阿尔萨斯欧洲日本学研究所(Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA)
会 场：阿尔萨斯欧洲日本学研究所(Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA)

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)
국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래
연구④<일본의식>의 삼각측량-미래를 향해

2012년 알자스 심포지엄

국가 아이덴티티와 종교

일 시：2012년 11월 2일(금) ~ 11월 4일(일)
공 동 개 최：호세이대학교 국제일본학연구소(Hosei University Research Center for International Japanese Studies: HIJAS), 프랑스 국립과학센터 동아시아문명연구소(Centre de Recherche sur les Civilisations de l'Asie Orientale, Centre National de la recherche Scientifique), 스트라스부르 마르크블로흐대학교 인문과학부 일본학과, 알자스 유럽 일본학연구소(Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace: CEEJA)

장 소：알자스 유럽 일본학연구소(CEEJA)

이번 심포지엄의 주제는 “국가 아이덴티티와 종교”로,

此次研讨会的主题是“国家认同感与宗教”，从日本内外的角度出发，通过对历史、文化、思想、社会、政治等的分析，研究了宗教是如何规定日本的国家认同感这一问题的。其结果是，日本的宗教并没有细致地与系统化国家及政治制度牢固结合在一起，也没有在个体的心灵及内部性层面进行绝对的定位，从神佛折中这一现象中可以看到，它有着不断地面向社会习俗性场所发展的倾向。其次，日本的宗教是极为社会性的存在，从此意义上说，宗教与日本认同感是密切不可分的。再者，由于宗教性习俗是混合性的，流入了很多从外国而来的要素，因而从宗教中看到的日本认同感并不是对外部封闭的认同感。另外，此次研讨会除了斯特拉斯堡大学的学生外，普通的与会者也参加了旁听，从此点上说这次国际日本学研讨会不仅是报告者的研究发表，在研究活动的社会还原方面也起到一定的作用。

【执笔者：

安孙子 信(法政大学国际日本学研究所所长·教授)，

铃村 裕辅(法政大学国际日本学研究所客员学术研究员)】

일본 내외의 시점에서 역사, 문화, 사상, 사회, 정치 등을 통해, 종교가 일본의 국가 아이덴티티를 어떻게 규정해 왔는지를 검토했다. 그 결과, 일본에서의 종교는 정밀하게 체계화돼, 국가 및 정치제도와 밀접하게 결부되지도, 개인의 마음과 내면에 절대적인 위치를 차지하지도 않았다. 다만 신불습합(神仏習合)에서 볼 수 있듯이 끊임없이 사회의 습속(習俗)적인 곳을 향하는 경향을 띠는 것이 확인됐다.

또한, 일본에 있어 종교는 지극히 사회적인 존재로, 그런 의미에서 일본의 아이덴티티와 따로 떼어 생각할 수 없다는 것이 지적됐다. 그리고 일본의 종교적 풍습은 외국적 요소도 많이 유입돼 혼합적인 성격을 띠고 있어, 종교를 통해 본 일본의 아이덴티티는 외부에 대해 폐쇄적이지도 않다는 것이 밝혀졌다.

이번 심포지엄에도 스트라스부르 대학의 학생과 일반인들도 참석했다. 이런 점에서, 국제일본학 심포지엄은 보고자의 연구발표뿐만 아니라 연구활동의 사회 환원이라는 면에서도 일정한 역할을 하고 있다고 할 수 있다.

【보고자：

아비코 신(호세이대학교 국제일본학연구소 소장·교수),

스즈무라 유스케(鈴村 裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討—〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ①「〈日本意識〉の変遷—古代から近世へ」

シンポジウム

江戸人の考えた日本の姿—世界の中の自分たち—

- 日 時：2013 年 3 月 16 日（土）・3 月 17 日（日）
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 4 階 S406 教室
- 司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）

- ◆ 2013 年 3 月 16 日（土）13：30～17：00
延廣 眞治（東京大学名誉教授）「本居宣長と舌耕文芸」
長島 弘明（東京大学教授）「上田秋成の異国」
川添 裕（横浜国立大学教授）「舶来動物からみえる異国・自国」
- ◆ 2013 年 3 月 17 日（日）
安村 敏信（板橋区立美術館館長）「中国を透かして見る江戸の軽みの正体」
板坂 則子（専修大学教授）「曲亭馬琴ワールドの異国と異界」
横山 泰子（法政大学教授）「怪物ではないく日本の私」
小林 ふみ子（法政大学准教授）「展示より／伝南畝『琉球年代記』刊行事情にみる日本と琉球」
- ◆ 同時開催展覧会
法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 14 階 博物館展示室
開催期間：2013 年 3 月 13 日（水）～2013 年 4 月 19 日（金）
開室時間：10：00～18：00

このシンポジウムは、研究アプローチ① 2013 年度研究の集大成としておこなわれた。本シンポジウムの特徴は展覧会との同時開催である。

3 月 16 日（土）は、延廣眞治「本居宣長と舌耕文芸」で幕を開けた。延廣眞治氏は落語研究の第一人者である。講演では本居宣長の『在京日記』を取り上げた。宣長は京都で、落語の祖と言われる米沢彦八の噺を頻繁に聞いていた。四条河原で彦八が役者物真似をしたり、五～六歳の少年が江戸万歳や軽業をするのを、宣長は見ている。また宣長は『新話録』で、後に落語に導入される多くの咄を記録している。これらは、『古今和歌集』の俗語訳である『古今集遠鏡』に生かされた。「大和心」は「漢意（からごころ）」に対する「真情（まごころ）」の意味であったが、宣長の考えの背後にはこのような、日本の俗語の世界があったのではないか、という問題提起である。

長島弘明「上田秋成の異国」は、その宣長と論争を展開した上田秋成に話が広がった。『胆大小心録』には朝鮮通信使のことが記録されている。『霊語通』では、朝鮮人が話す日本語が書かれている。実母の姉妹の連れ合いである樋口道与が、寛延元年の通信使の火薬事故のけがを治し、『韓客治験』という詳細な記録を残した。本居宣長と上田秋成の論争において、日本語の音は純正で外国語は不正な音だという宣長に対し、「発音上の自然」という立場から秋成は反論した。また『呵刈葺』「日神論争」では、秋成は日神は日本の神話として考えればよい、と主張するのに対し、宣長は、世界の日神は日本で生まれたと主張した。この論争は、現代のグローバル化とインターナショナル化の違いに通じる普遍的な議論であったことがわかった。

川添裕「舶来動物からみえる異国・自国」は、「男女和合」が日本のキーワードであったことに言及し

た。幕末の見世物には「物珍しさ」や「驚き」「わかりやすさ」が求められていたので、多くの人々が共有していたポピュラーな文化表象が発見でき、異国や自国についての伝承も見いだせる。たとえば「攘夷」「神風」「神国」「除魔」「和合」などがそれであった。「イザナキ、イザナミの生人形」では、足下にセキレイがいる。これは「和合」の象徴であった。「和合」は明治以降の国家神道からは排除された。

この日の最後に、法政大学の渡辺浩教授をまじえてディスカッションがおこなわれた。渡辺浩氏によって「夫婦別あり」という儒教の教えが日本では理解されず、「夫婦相和し」となったことが述べられた。日本では神道、儒教など異なる「家」観念を軸とした生活の価値観が柱になっていたからだと思われる。「和合」問題の重要性が指摘された。また、秋成と宣長の論争のなかで、「江戸時代に文化相対主義があったのか」が議論された。

3 月 17 日（日）は、安村敏信「中国を透かして見る江戸の軽みの正体」で始まった。中国南宋の牧谿が長谷川等伯、俵屋宗達に取り入れられ、宗達が牧谿の罔両画を達成し、没骨法を完成した。また、狩野永徳による巨木表現を、探幽は軽いものに変えてしまった。それらのなかから、日本独特の余白のある画面が成立した。清の沈南蘋の絵画も広く日本で受け容れられたが、南蘋派の日本人画家たちの絵画は平板で軽く柔らかいものになった。ヨーロッパの遠近法、陰影法を取り入れた中国絵画を導入しても、日本絵画は「深さ」とは無縁であった。この「軽さ」に、日本の特徴があるのではないかと提起された。

板坂則子「曲亭馬琴ワールドの異国と異界」においては、曲亭馬琴の『椿説弓張月』が取り上げられた。この物語は、源為朝と白縫とのあいだに生まれた舜天

丸が琉球を治めるという話だが、琉球は魔物が跋扈する国として描かれた。一方『南総里見八犬伝』では、江戸を取り囲む山中が異国ではなく異界として描かれた。『国姓爺合戦』『風流志道軒伝』『夢想兵衛胡蝶物語』など、江戸時代には遍歴譚によって諸国の像が作られていったことが述べられた。

横山泰子「怪物ではない＜日本の私＞」は、情報が日本の中に入り、図鑑、地図、地理書などが導入されたとき、その中には正確な情報もあったが怪物情報はとりわけ廃れなかったことに注目した。「怪物がいなくてよかった」「周辺諸国にも怪物はいない」という安心感を醸成していた可能性がある。

小林ふみ子「展示より／伝南畝『琉球年代記』刊行事情にみる日本と琉球」は、同時開催された展覧会に基づく問題提起であった。日本における空間概念は中華、近隣諸国、外夷に分かれていた。また「武の国」「和の国」「神の国」という複数の日本像に分かれていることが指摘された。

最後のディスカッションは、これまでの研究とこれからの研究について報告および展望が話し合われた。田中優子よりこれまでの研究が紹介された。大

木康東京大学東洋文化研究所教授を中心に、「中華思想」「華夷秩序」について活発な議論があった。漢心（からごころ）批判や中国無視など、日本では常に中国が強く意識される。日本は外国を考えながら自己を定義している。中国は他との関係を考えずに自己完結的である。中華思想は、永遠に「夷」なるものを作り出すシステムで、地理的にフレキシブルである。「華」も中身が入れ替わる。日本にとっての「華」は中国から西欧、米国に変化した。「華」にいる者は自己完結的となり、「夷」にいるものは関係の中でしか自己を規程できない。日本を考えたとき、中華思想的な枠組みからいかに抜け出すか、という問題が突きつけられている。最後に、「裏と表」の研究が必要であることが板坂則子教授より提起された。

ディスカッションの結論としては、華夷秩序の構造研究とともに、草紙類や春画春本類に見られる華夷のあいだをほぐす裏の文化、笑いの文化、そして「和の国」イメージなどが、さらに研究すべき問題として浮かび上がってきた。

【記事執筆：田中 優子（法政大学社会学部教授）】



延廣 眞治氏（東京大学名誉教授）



長島 弘明氏（東京大学教授）



川添 裕氏（横浜国立大学教授）



安村 敏信氏（板橋区立美術館館長）

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

Symposium

“Figures of Nippon Thought by the People of the Edo Era: Selves in the World”

Date: Saturday, 16-Sunday, 17 March 2013
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus, Sotobori Schools 4F, Classroom S406
 Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

This symposium was held over 2 days and marked a large-scale gathering of the research being conducted in Approach 1 for the year 2012. The special feature of the symposium was the simultaneously-run exhibition, “Figures of Nippon Thought by the People of the Edo Era:

Selves in the World”. On Saturday, 16 March, Professor Emeritus Nobuhiro Shinji (University of Tokyo), Professor Nagashima Hiroaki (University of Tokyo) and Professor Kawazoe Yu (Yokohama National University) gave presentations, followed by discussion with Professor Watanabe Hiroshi (Hosei University). Sunday, 17 March saw reports from Mr. Yasumura Toshinobu (Director, Itabashi Art Museum), Professor Itasaka Noriko (Senshu University), Professor Yokoyama Yasuko (Hosei University) and Associate Professor Kobayashi Fumiko (Hosei University). During discussion afterwards, Professor Tanaka Yuko (Hosei University) introduced the research findings so far, and a lively debate ensued led by Professor Oki Yasushi (University of Tokyo) on “Chinese Thought” and “Chinese Hegemony”. As a result, issues emerged that merit further research, such as the hidden culture found in chap books and erotic art/books that relaxed Chinese hegemony, the culture of comedy, and the image of “Wanokuni (Land of Harmony)”, in addition to research into the structure of Chinese hegemony.

Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法① “‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

研讨会

江戸人所思考の日本の姿 —世界中的自己—

日 期: 2013年3月16日(星期六) - 17日(星期日)
 会 場: 法政大学市谷校区 外濠校区4层 S406教室
 主 持: 田中 优子(法政大学社会学部教授)

本次研讨会为期两天, 是2012年度研究方法①的集大成之会。本次研讨会的特点是, 与题为“江戸人所思考の日本の姿—世界中的自己—”的展览会同时举行。3月

16日(星期六), 延广真治(东京大学)、长岛弘明(东京大学)、川添裕(横浜国立大学)分别作了发表, 之后加上渡边浩(法政大学)一起作了共同讨论。3月17日(星期日), 首先由安村敏信(板桥区立美术馆)、板坂则子(专修大学)、横山泰子(法政大学)、小林芙美子(法政大学)作了报告, 接着进行了相关议论。田中优子(法政大学)将到目前为止的研究成果作了介绍, 并以大木康(东京大学)为中心, 对“中华思想”、“华夷秩序”等进行了热烈的讨论。其结果是, 与华夷秩序的构造研究相同, 能够理清华夷之间关系的草纸类和春画春本中的潜文化、笑文化、以及“和国”的印象等都是此后应该致力研究的问题。

【执笔者: 田中 优子(法政大学社会学部教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)
 국제일본학 연구방법에 입각한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래
 연구① <일본의식>의 변천-고대에서 근대로
 심포지엄

에도인이 생각한 일본의 모습 —세계 속의 우리—

일 시: 2013년 3월 16일(토)·3월 17일(일)
 장 소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 소토보리 교사 4층 S406교실
 사 회: 다나카 유코(田中 優子, 호세이대학교 교수)

이번 심포지엄은 연구①의 2012년도 연구결과의 집대성으로 이틀에 걸쳐 진행됐다. 이와 동시에 전람회 “에도인이 생각한 일본의 모습—세계 속의 우리—”가 개최됐다는 점이 이번 심포지엄의 특징이다.

3월 16일(토)은 노부히로 신지(延廣眞治, 도쿄대학교)

교수, 나가시마 히로아키(長島弘明, 도쿄대학교) 교수, 가와조에 유(川添裕, 요코하마국립대학교) 교수가 발표하고, 그 후 와타나베 히로시(渡辺浩, 호세이대학교) 교수가 참가해 토론을 벌였다.

3월 17일(일)은 먼저 야스무라 도시노부(安村敏信, 이타바시(板橋)구립미술관) 씨, 이타자카 노리코(板坂則子, 센슈(専修)대학교), 호세이대학교의 요코야마 야스코(横山泰子) 교수와 고바야시 후미코(小林ふみ子) 교수가 보고를 하고, 토론이 이어졌다. 그 후 다나카 유코 교수가 지금까지의 연구성과를 소개했고, 오키 야스시(大木康, 도쿄대학교) 교수를 중심으로 ‘중화사상’, ‘화이질서’(華夷秩序)에 대한 활발한 논의가 이뤄졌다. 그 결과 화이질서의 구조 연구와 더불어, 소우시(草紙, 에도시대 삽화가 들어있는 대중소설)와 춘화춘본(春畵春本)에 나타난, 화이(華夷) 관계를 완화시키는 서브컬처(裏の文化), 웃음 문화, 그리고 ‘화(和)의 나라’ 이미지 등이 앞으로의 연구 과제로 드러났다.

【기사집필: 다나카 유코(호세이대학교 사회학부 교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討ー「日本意識」の過去・現在・未来」
研究アプローチ①「日本意識」の変遷ー古代から近世へ」

第 1 回みちのくワークショップ

東北文学と日本意識（近世篇）

● 報告者：横山 泰子（法政大学理工学部教授）
小林ふみ子（法政大学文学部准教授）
田中 優子（法政大学社会学部教授）

● 日 時：2012 年 9 月 21 日（金）17:00～20:00

● 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室

1. 「只野真葛と平尾魯仙」報告者 横山泰子

東北在住の文人の例として、只野真葛と平尾魯仙をとりあげた。

真葛は江戸出身だが仙台に嫁し、故郷を思いながら『奥州ばなし』や『独考』を書いた。前者には、江戸では聞かれないものとして東北の奇談を集めようとする著者の視点が感じられる。『独考』には、我国人という著者の帰属意識が明らかに認められる。『独考』は個性の強い知識人の著作であるが、近世社会における女性の日本意識の一例として位置づけることができる。「女性の日本意識」という問題も、今後の課題として挙げられよう。

魯仙は弘前の国学者・画人で、江戸に憧れながら故郷にとどまり、北辺で大局を見ようとした人物である。開港直後の箱館に渡って異国人の風俗を絵と文章で記した『洋夷茗話』や、地元の奇談集『谷の響』などの著作がある。異国人に接した魯仙は、率直に自他の違いを書き記している。箱館の経験が彼の皇国意識を高め、平田国学へ傾倒する契機になったと思われる。

真葛も魯仙も、東北で日本と外国との関係を考え、強いナショナル・アイデンティティを持っていた。両者とも国としての日本を考えつつ、地元の伝承というネイティブな物語を収集した点で、柳田民俗学に通じる面がある。

2. 「近世の蝦夷イメージ」報告者 田中優子

まず建部綾足『本朝水滸伝』（1773）をめぐって、犯罪者同盟たる『水滸伝』の構造を借りながら、蝦夷をどのように描いたかを述べた。この作品は古代を借りて中央政権側と亡命者側に分け、さらに外側に位置づけられる「まつろわぬ者たち」を描いたものである。さらにそれから時を経て、恋川春町の黄表紙『悦最眞蝦夷押領（よろこんぶひいきのえぞおし）』（1788）が刊行される。これは義経伝説に基づいているが、同時に田沼時代のロシア（赤蝦夷）を含む蝦夷調査の実態を反映している。ここでは、「蝦夷」が中国人、ロシア人を中心とする外国人イメージの集積場になっている。さらに、作者不明の『織出蝦夷錦（おりだしえにしき）』を取り上げた。この作品では実際の蝦夷一揆や島原一揆が描かれ、辺境の一揆に加担する平賀源内が、義経伝説の新たな系譜として書かれた。さらに、菅江真澄のアイヌ記録、『もののけ姫』のアイヌイメージに言及しながら、近世の東北を、蝦夷領域の移動との関係で言及した。近世の蝦夷はすでに北限として北海道から満州、ロシアまで含む

ものであり、東北は蝦夷の途中経過だったのである。さらに、金時徳『異国征伐戦記の世界』（笠間書院）所収の年表を開示することで、蝦夷問題が朝鮮、琉球への侵略問題と同時に語られるべきことであると指摘した。

3. 「みちのくからみる狂歌・狂詩文」

報告者 小林ふみ子

狂歌や狂詩文の作品を題材に「みちのく」の文化的異質さは「日本」にとって多様なものか、他者性なのかという問題を考えてみた。奥州訛りは、歌舞伎・浄瑠璃などの世界で「他者」として滑稽さの演出の手段となり、現実世界で（なかば芸能者であった）飴売りが「奥州」「仙台」の出自と訛りを滑稽な芸として前面に出す現象を生み、それを「華人」「仙人」という他者として捉える狂詩文『飴売土平伝』の表現を作り出した。また流行が東北地方にも及んだ狂歌の世界では、当地の狂歌人が「みちのく人」としての自身のアイデンティティを狂名や狂歌に托して表現しようとし、伝統的な東北の歌枕やそれにちなんだ古歌を用いて狂歌を詠んだ。さらに伝統的な和歌の規範が飽きたらず、それへの違和感や新たな土地の風景を詠もうという試みも見られた。それは、他者として扱われがちで、実際に他者たらざるを得なかった「みちのく」の人々が、自らを他者化する規範としての「日本」に依拠しながらも、そこからの離脱を模索する姿としても捉えられるのではないかと論じた。

【討議】

討議では、まず津田真弓（慶応義塾大学）氏によって、3.11 以後の東北の状況と、芭蕉やセバスチアン・ビスカイノがたどったルートとを重ね合わせる報告が行われた。これによって、歴史的な東北と今の東北とが立体的に見えてきた。さらに大木康（東京大学）によって、危機の時代に出現する中国の華夷秩序、そのもととなる朱子学、そして『水滸伝』後半の体制への帰順が影響していることが、指摘された。華夷秩序から出て来る都鄙概念も指摘され、文化の様式と言語化が都中心に行われるため、そこでは鄙からの発信が抑圧されることも分かってきた。蝦夷概念も問題となった。華夷の「夷」である蝦夷領域は、もともと関東を含むものであり、古代から次第に東北に移動し、近世では北海道、千島列島、ロシアまで含むようになったことが明らかにされ、華夷秩序の空間的移動が日本意識を変化させていることが見

えてきた。

今回のワークショップをもとに、さらに「みちのくワークショップ古代篇、中世篇」を続けることが確認された。

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

1st Michinoku Workshop

Tohoku Literature and Japan-consciousness (Early-Modern Period)

Speakers: YOKOYAMA Yasuko (Professor, Faculty of Science and Engineering, Hosei University)
KOBAYASHI Fumiko (Associate Professor, Faculty of Literature, Hosei University)
TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)
Date: Friday, 21 September 2012, 17:00-20:00
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonnade Tower 25th Floor Conference Room B

Discussion was held based on three presentations: “Tadano Makuzu and Hirao Rosen” by Yokoyama Yasuko, “Image of Ezo (Hokkaido) in the Early Modern Period” by Tanaka Yuko, and “Michinoku (Northern Honshu) seen in

【記事執筆：横山 泰子（法政大学理工学部教授），
小林ふみ子（法政大学文学部准教授），
田中 優子（法政大学社会学部教授）】

Comic Verse and Poetry” by Kobayashi Fumiko. “Tadano Makuzu and Hirao Rosen” raised the examples of Tadano Makuzu and Hirao Rosen as literati living in Tohoku, discovered Japan-consciousness by women (Tadano Makuzu), as well as national identity from the region. “Image of Ezo (Hokkaido) in the Early Modern Period” picked out Ezo in tales and travel diaries, and dealt with the issue of the “Water Margin Structure”: the consciousness of a double social structure unique to the early modern period. “Michinoku (Northern Honshu) seen in Comic Verse and Poetry” put the question whether the cultural heterogeneity of Michinoku meant diversity or otherness for “Japan”, based on comic verse and poetry.

The debate progressed, and shed light on Neo-confucianist Chinese hegemony and Chinese-foreign consciousness in early modern period Japan. The possibility was indicated of its reach into present-day Japan.

Report by:

YOKOYAMA Yasuko (Professor, Faculty of Science and Engineering, Hosei University),
KOBAYASHI Fumiko (Associate Professor, Faculty of Literature, Hosei University),
TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法①“‘对日认识’の变迁——从古代到近代”

第1次陆奥研究会

东北文学与对日认识（近代篇）

報告者：横山 泰子（法政大学理工学部教授）
小林美美子（法政大学文学部准教授）
田中 優子（法政大学社会学部教授）
日 期：2012年9月21日（星期五）17:00-20:00
会 場：法政大学市谷校区 布瓦索纳德 大厦25层 B会议室

研究会以横山泰子の〈只野真葛与平尾鲁仙〉、田中優子の〈近代の蝦夷印象〉、小林美美子の〈以陆奥为视

角的狂歌・狂诗文〉3篇报告为基础进行了讨论。〈只野真葛与平尾鲁仙〉以居住在东北地区的文人只野真葛和平尾鲁仙为例，揭示了女性的日本意识及地域的国家认同感。〈近代的蝦夷印象〉列举了物语与纪行中的蝦夷，对近代特有的社会二重构造意识的“水滸傳构造”进行了评论。〈以陆奥为视角的狂歌 狂诗文〉提出了对于“日本”而言，“陆奥”的文化异质是多样性还是它样性的问题。

通过讨论，日本近代的朱子学式的华夷秩序和华夷意识变得明了，同时也指出了影响到当今日本的可能性。

【执笔者：横山 泰子（法政大学理工学部教授）、
小林美美子（法政大学文学部准教授）、
田中 優子（法政大学社会学部教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)
국제일본학 연구방법에 기초한<일본의식>의 재검토-〈일본의식>의 과거·현재·미래
연구① <일본의식>의 변천-고대에서 근세로

제1회 미치노쿠 워크숍

도호쿠 문학과 일본의식

보고자 : 요코야마 야스코(横山 泰子, 호세이대학교 이공학부 교수)
고바야시 후미코(小林 ふみ子, 호세이대학교 문학부 교수)
다나카 유코(田中 優子, 호세이대학교 사회학부 교수)
일 시 : 2012년 9월 21일(금) 17:00 ~ 20:00
장 소 : 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 보아소 나드타워 25층 B회의실

요코야마 야스코 ‘다다노 마쿠즈(只野真葛)와 히라오 로센(平尾魯仙)’, 다나카 유코 ‘근세의 에조(蝦夷) 이미지’, 고바야시 후미코 ‘미치노쿠(みちのく) 일본의 동

북지역)에서 본 광가(狂歌·일상의 잡다한 일을 소재로, 해학·익살·풍자 등을 담은 비속한 단가·광시문(狂詩文·익살스러운 내용을 담은 한시체의 시)’ 등 3명의 보고를 바탕으로 토의를 진행했다.

‘다다노 마쿠즈와 히라오 로센’은, 도호쿠(東北)에 거주하는 문인 다다노 마쿠즈와 히라오 로센을 예로 들어 여성의 일본의식과 지역에서의 내셔널 아이덴티티를 찾아냈다. ‘근세의 에조 이미지’는, 이야기와 기행에 나타난 에조를 들며 근세 특유의 사회 이중구조 의식인 ‘수호전 구조(水滸傳構造)’를 문제로 삼았다. ‘미치노쿠에서 본 광가·광시문’은, 광가 및 광시를 바탕으로 ‘미치노쿠’의 문화적 이질감이 ‘일본’에 있어 다양성인지 타자성 인지를 문제로 제기했다.

보고와 논의를 통해 일본 근세의 주자학적인 화이(華夷)질서와 화이의식이 밝혀졌고, 이것이 오늘날의 일본에까지 영향을 미치고 있다는 가능성을 지적할 수 있었다.

【기사집필:

요코야마 야스코, 고바야시 후미코, 다나카 유코】

第 2 回みちのくワークショップ

東北文学と日本意識（古代・中世篇）

- 報告者：小秋元 段（法政大学文学部教授）
小口 雅史（法政大学文学部教授）
- 司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）
- 日 時：2013 年 1 月 18 日（金）14：00 ～ 17：00
- 会 場：法政大学九段校舎 5 階 第二会議室

1. 「中世後期の文芸とみちのく」

報告者 小秋元段

室町時代を中心に制作された短編物語であるお伽草子は、市古貞次氏『中世小説の研究』（東京大学出版会、1955 年）にしたがい、通常、六種類に分類される。そのなかの武家物には「お家騒動物」「復讐譚」と呼ばれる一群があって、類似した物語展開をもつ複数の作品が存在する。地方の有力者である主人公が美しい妻を迎え、やがてその妻が国司や在地の別の有力者に横恋慕される。主人公は横恋慕した男と合戦して敗れるか、讒言にあうかして、回国修行をするか、流罪にあって苦難の旅に出る。それに応じて妻も夫を追って苦難の旅を経験し、やがて夫妻は再会して、帝の許しを得て本来の地位を回復するという筋立てである。『師門物語』『明石物語』『村松物語』『堀江物語』『はもち』などがその代表といえよう。

これらの作品は物語展開が似るだけでなく、細部のモチーフにも共通点をもつ。その一つとして注目したいのが、多くの作品で主人公とその妻が苦難の旅をする先が陸奥だということである。『明石物語』と『はもち』では主人公が陸奥に流され、妻がこれを追う、『村松物語』では人買いによって妻が陸奥に売られ、主人公がこれを探し出すという内容をもっている。だが、これらの作品は詳細な道行き文をもちつつも、陸奥の地理についてほとんど触れることはない。つまり、作者は陸奥に深い知識をもっていたわけではなく、「意匠」として陸奥を用いることを重視したらしいのだ。

幸若舞曲「信田」にも同様の展開が認められる。これらの作品では、主人公とその妻が陸奥で苦難を経験するとともに、全国的な流浪も経験する話がセットになっている。そして、全国的な流浪という点に注目すれば、説経がこの要素を不可欠のものとしていることもあけなくてはならない。全国的な放浪と陸奥への流離は、室町後期の文学・芸能における流行のモチーフであったと見て間違いなからう。その際、主人公の復活が、『師門物語』では善光寺、説経の諸作品では天王寺や熊野といった聖地でなされるのに対し、『明石物語』『村松物語』『はもち』『信田』では陸奥でなされていることに注意したい。すなわち、後者の作品群において陸奥が聖地と同様の扱いを受けていることは、興味深い現象といえるのではなからうか。

【記事執筆：小秋元 段（法政大学文学部教授）】

2. 「古代のみちのくと蝦夷（エミシ・エゾ）」

報告者 小口雅史

本報告では「みちのく」の住民であった「蝦夷」と中央から呼ばれた人々について、その呼称の由来・変遷と、その意味するところ、あるいは歴史的意義などについて、従来の研究史をもとに再整理してみた。

当初「エミシ」と呼ばれた北方（当時の方位観念では東方）世界の人々は、漢字では中国古典などに基づき「毛人」と表記されていた。八世紀から九世紀初めにかけて、「エミシ」は人名に盛んに使用されたが、それは東方の勇猛な人を意味する語句としてよく知られていたからである。

やがて「エミシ」を表す漢字は「蝦蟇」に変化する。「蝦」は髭の長いエビのことで、「蟇」は山に棲む虫や鳥をあらわす語である。斉明天皇 5 年の遣唐使は、エミシを帯同して、唐の皇帝に披露したが、その時の問答によれば、エミシは深山の木の根本に住むという。蝦という用字はその風貌や風俗をよく示す語として日本で創作された可能性が高い。

しかし白村江の敗戦後、急速なナショナリズムの高まりのなかで、新たに「蝦夷」表記が創作される。「夷」は中国の中華思想に基づく東方の野蛮人を指す語であり、同時に北方の未開民族を指す語である「狄」を用いた「蝦狄」という表記も創作された。このころから「蝦」に引き摺られる形で「エビス」という音が生じたらしい。

やがて 11 世紀になると、用字は「蝦夷」のまま、音が「エゾ」と変化する。その初見は、応徳三年「前陸奥守源頼俊款状」中の「衣曾別嶋」であるが、広く知られるようになるのは 12 世紀になって、歌枕として盛んに読まれるようになってからである。このころには本州最北までが郡郷制に編成され、津軽海峡の北にある夷嶋は、異民族（アイヌ）の住む地として明確に意識されていた。エゾは情緒のないものの代名詞として使用され、そこには強い異民族観が込められていた。

こうした異民族観が、中世北方世界の支配者として歴史に姿を現す津軽安藤氏にそのまま引き継がれた。津軽安藤氏が鎌倉幕府の蝦夷管領（蝦夷沙汰）を担当できたことの背後には、蝦夷系譜に連なるというその強烈な自己認識があったのである。

ところで以上のように、「蝦夷」表記は、いわば作られた差別として意識的に中央で創作されたものであって、実態とは何ら関係がないことについても留意する必要がある。

【記事執筆：小口 雅史（法政大学文学部教授）】

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

2nd Michinoku Workshop

Tohoku Literature and Japan-consciousness (Ancient and Medieval Periods)

Speakers: KOAKIMOTO Dan (Professor, Faculty of Literature, Hosei University)
OGUCHI Masashi (Professor, Faculty of Literature, Hosei University)

Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

Date: Friday, 18 January 2013, 14:00-17:00

Venue: Hosei University Kudan Schools 5th Floor Conference Room II

1. “Late Medieval Period Arts and Michinoku”

Speaker: KOAKIMOTO Dan

Of Otogizoshi tales, the group of works called “O-ie sodo mono (life dramas)” and “Fukushu monogatari (vendettas)” were produced in large numbers during the Late Muromachi Period. They follow the common pattern of a protagonist and wife who are forced to roam by the authorities, but eventually resume their old positions in life. There are many among them whose protagonists and wives roam into Michinoku (literally, the Interior Road: North-

ern Honshu), and this they also have in common with the Kowaka dance music, “Shida”. Furthermore, we can see similar tendencies in the numerous works of discourse on the sutras, suggesting that it was a fashion in literature and the arts of the Late Muromachi Period. Having made such indications in the presentation, we considered the meaning of Michinoku as it appears in the works in question.

Report by: KOAKIMOTO Dan

(Professor, Faculty of Literature, Hosei University)

2. “Michinoku and Emishi/Ezo of Ancient Times”

Speaker: OGUCHI Masashi

This presentation attempted a reorganization of the history of previous research into the people who lived in Michinoku, who were called by the central establishment, “Emishi” or “Ezo”. The characters used to write this changed from “hairy-people” to “shrimp-foreigners”. The word “Emishi” suggested some consciousness of discrimination based on Chinese thought. Yet once it came to be read “Ezo” and referred to the Ainu, it brought along a strong consciousness of discrimination. The Ando family of Tsugaru, who made their appearance in history as rulers of the Medieval Northern World, took advantage of this consciousness, to take in their charge the Kamakura Bakufu penal colony of Ezo (Ezo Sata).

Report by: OGUCHI Masashi

(Professor, Faculty of Literature, Hosei University)



小秋元 段 氏 (法政大学文学部教授)



小口 雅史 氏 (法政大学文学部教授)



司会: 田中 優子 氏 (法政大学社会学部教授)



会場の様子

战略研究基础形成支援项目 研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

第2次陆奥研究会

东北文学与对日认识(古代·中世篇)

报 告 者: 小秋元 段(法政大学文学部教授)

小口 雅史(法政大学文学部教授)

主 持: 田中 优子(法政大学社会学部教授)

日 期: 2013年1月18日(星期五) 14:00-17:00

会 场: 法政大学市谷校区 九段校舍5层 第二会议室

1. 〈中世后期的文艺和陆奥〉报告者 小秋元 段

御伽草子中, 在室町时代后期创作的被称为〈御家騒动物〉(復讐譚)的作品群里, 主人公和他的妻子受到有权势的人的压迫而流离并最终恢复地位是它们共通的情节。其中主人公和妻子的流离场所所以陆奥居多, 这和同时代的幸若舞曲(信田)是一样的。而且, 在佛教讲经说法的很多作品中也可以看到类似的趣向, 可以推测这是

室町时代后期文学·艺能的一种趋势。本次报告在指出这一问题的基础上, 对这些作品中出现的陆奥所包含的意义进行了考察。

【执笔者: 小秋元 段(法政大学文学部教授)】

2. 〈古代的陆奥与蝦夷(EMISI・EZ0)〉报告者 小口 雅史

本次报告以被中央称为“蝦夷”的“陆奥”住民的研究史为基础对此进行了再次整理。其表记经历了“毛人”→“蝦蟇”→“蝦夷”的变化。“蝦夷”=EMISI里包含了基于中华思想的差别意识。然而当其进入被读作“EZ0”的阶段时, 就有了阿依努的意味, 包含了更为强烈的差别意识。作为中世北方世界的支配者出现在历史中的津轻安藤, 利用这种意识进行了反驳并担任了镰仓幕府的蝦夷管领(蝦夷沙汰)之职。

【执笔者: 小口 雅史(法政大学文学部教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한〈일본의식〉의 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래

연구① 〈일본의식〉의 변천-고대에서 근세로

제2회 미치노쿠 워크숍

도호쿠 문학과 일본의식(고대·중세 편)

보 고 자1: 고아키토 단(小秋元 段, 호세이대학교 문학부 교수)

보 고 자2: 오구치 마사시(小口 雅史, 호세이대학교 문학부 교수)

사 회: 다나카 유코(田中 優子, 호세이대학교 사회학부 교수)

일 시: 2013년 1월 18일(금) 14:00 ~ 17:00

장 소: 호세이(法政)대학교 구단 교사 5층 제2회의실

1. 중세 후기의 문예와 미치노쿠

보고자: 고아키토 단(小秋元 段)

오토기조시(お伽草子) 중, 무로마치(室町)시대 후기에 복수 제작된 ‘오이에소도모노가타리’ (お家騒動物), ‘아다우치모노가타리’ (復讐譚)라는 작품군은 주인공과 그 아내가 유력자의 압력으로 유랑하게 되나, 결국은 본래의 지위를 되찾게 된다는 공통된 줄거리를 갖고 있다. 그중에서도 주인공과 아내가 유랑하는 곳이 주로 미치노쿠(陸奥) 지역인 경우가 많은데, 이는 동시대

의 고우와카마이교쿠(幸若舞曲) ‘시다(信田)’ 에도 나타난다. 또한, 셋쇼(説經)의 여러 작품에도 비슷한 경향이 나타나는 것으로 미루어볼 때, 이는 무로마치시대 후기의 문학·예능 부문에서 유행했던 것으로 추측된다. 본 발표에서는 이러한 내용을 언급하고 이들 작품에 나타난 미치노쿠의 의미를 고찰했다.

【기사집필: 고아키토 단 (호세이대학교 문학부 교수)】

2. 고대 미치노쿠와 에조(에미시·에조)

보고자: 오구치 마사시(小口 雅史)

본 보고에서는 ‘미치노쿠’의 주민이었던 ‘에조’(蝦夷)와 중앙에서 불러 온 사람들에 대해 기존 연구사를 바탕으로 다시 정리해 보았다. ‘에조’라는 표기는 ‘모인’(毛人)→‘하이’(蝦蟇)→‘에미시’(蝦夷)로 변화했다. ‘에미시’에는 중화사상을 바탕으로 한 차별 의식이 담겨 있다. 그러나 이것이 ‘에조’라고 불리게 된 단계에서는 아이누를 의미하는 것으로 더욱 심한 차별의식이 담겨 있다. 중세 북방 세계의 지배자로서 역사에 모습을 드러낸 쓰가루 안도(津輕安藤) 씨는 이 의식을 역이용해 가마쿠라 바쿠후(鎌倉幕府)의 에조칸레이(蝦夷管領), 에조사타=蝦夷沙汰를 담당하게 된다.

【기사집필: 오구치 마사시 (호세이대학교 문학부 교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「日本意識」の再検討ー「日本意識」の過去・現在・未来」
研究アプローチ①「日本意識」の変遷ー古代から近世へ」

第 2 回研究会

報告者 1：前島 志保（法政大学経営学部専任講師）

報告者 2：衣笠 正晃（法政大学国際文化学部教授）

●日 時：2012 年 9 月 22 日（土）13：30～17：00

●会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室

●司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）

前島志保

戦間期『主婦之友』における「家庭」と「日本／国家」

戦前の『主婦之友』は、「中流層における主婦の形成」や「戦時協力批判」の文脈で語られることが少なくなかった。しかし近年の調査では、同誌の読者は中流女性だけではなく、幅広い層の男女に渡っていたことが判明している。また、初期の同誌は国家／日本への言及が比較的少ない。そこで、本発表では、大正期から昭和初期にかけての『主婦之友』における家庭に関する言説を取り上げ、同誌の人気の理由の一端を内容面から再考するとともに、そこにおける「家庭」と「国家／日本」との結び付きがどのように変化していったのかを、歴史的・社会的な状況の変化や主宰者・石川武美の思想的背景にも留意しながら、考察した。

その結果、初期『主婦之友』は、石川の穏健な進歩的家庭観を基調としながらも、それに限定されることなく、かなり幅の広い家庭観を提示していたことが分かった。また、同誌の記事は、独身者や男性、中流以下の階層の人々など、従来の家庭論では軽視されがちであった人々をも対象としていた。このように様々な考えを持つ広範囲にわたる層の人々に訴えかける編集方針は、同時代、英国など他の地域の出版界においても用いられた手法であった。また、厳格な性別役割分担の見直しは、同時期の米国でも見られた傾向である。ただし、日本の家庭論は国家との結び付きが強いと言われてきた。

しかしながら、創刊当初数年間の『主婦之友』では国家と家庭を結び付ける傾向は希薄であった。そこではむしろ、人々に慰安を与える場としての近代的家庭像の提示に重点が置かれていた。また、石川自身の信仰やキリスト教関係雑誌で修業を積んだという経歴もあり、かなりキリスト教への言及が多かった。ところが 1920 年代半ばになるとキリスト教色は薄まり、逆に国家／日本と家庭の結び付きが強調されるようになっていく。これには様々な要因が考えられる。すなわち、1920 年代に入り消費文化や大衆文化が発展する中で同誌の編集方針が漸次的により総合的な情報・娯楽誌を志向する方向に変化していき、また、石川の混合主義的な宗教観もあって、キリスト教的な側面が後退した。その一方で、1923 年の関東大震災や 1924 年の皇太子成婚など様々な国家的事件（危機）やイベント（慶事）が重なり、国民としての団結の必要性が繰り返し意識化されていく中で、国家における家庭の役割の重要性が前景化されていったものと思われる。また、このことは、近代的家庭生活像がキリスト教をはじめとする西洋的イメージから切り離されていったことも示唆している。

衣笠正晃

1910～20 年代の国文学

国文学研究史において 1910 年代から 20 年代（大正期）は、国文学研究が制度的に完成した世紀転換期と、日本主義イデオロギーの基盤となった 15 年戦争期のあいだにあって、谷間の時期と捉えられてきた。こうした常識に対し本発表では、アカデミアの中心であった東京帝国大学を主な対象に大正期の国文学研究の動向を分析し、意義の再検討をおこなった。

最初に注目するのは、国文学研究における世界文学的な関心の高まりである。東京帝大文科大学のカリキュラム改革により、外国語（2 か国語以上）の試験合格と自由選択科目の履修が求められた結果、国文学専攻者も西洋文学から強く影響されるようになる。唯美主義的文学批評、人道主義的人生論が学生に流行し、松浦一ら若いスタッフの授業がその関心に応えた。世界文学への関心の高まりとともに、芳賀矢一以来の文献学としての国文学という基本理念が揺らぎ、文学研究における文献学と批評の方法論的対立が意識されるようになった。

また思想史というディシプリンの登場が国文学に影響を与えたことが考えられる。津田左右吉は一貫した構想に基づく日本文学史を完成し、村岡典嗣は『本居宣長』において芳賀文献学の後継者を自任した。また和辻哲郎は西洋文献学の観点から国文学者のテクスト校訂の問題点を指摘・批判した（『日本精神史研究』）。このような文献学の立場からの国文学批判は、昭和期に入ってから池田亀鑑を中心とする、より厳密な文献学的国文学の登場の呼び水となった。

方法論的な混迷の一方で、大正末に国文学アカデミアは新たな展開を見せる。芳賀退官のあと国文学研究室主任となった藤村作は、関東大震災での被災に危機感を強め、「国文学ラヂオ講座」や新潮社『日本文学講座』など、メディアを利用した積極的な国文学振興策を主導した。その背景には中等・高等教育の拡大、それに並行した「文検」（文部省教員検定試験）受験層の拡大という当時の状況があった。このような国文学の大衆化は、1930 年代以降における国民教化の方途を準備したといえる。

総括すれば、大正期国文学は 1930 年代、40 年代における国文学の隆盛の基礎を作ったと考えられる。文献学と鑑賞批評との方法論的対立、そのなかで文学への主体的アプローチの模索は、のちの「日本精神」「日本的なるもの」の抽出へとつながる。また大衆化のなかで国文学は西洋的・エリートの教養の代替物としての地位を得ることとなった。

【記事執筆：衣笠 正晃（法政大学国際文化学部教授）】

【記事執筆：前島 志保（法政大学経営学部専任講師）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

2nd Research Meeting

Speaker 1: MAESHIMA Shiho (Lecturer, Hosei University Faculty of Business Administration)

Speaker 2: KINUGASA Masaaki (Professor, Hosei University Faculty of Intercultural Communication)

Date: Saturday, 22 September 2012, 13:30-17:00

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2nd Floor Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

MAESHIMA Shiho “Home” and “Japan” Described in *Shufu no Tomo* in the Interwar Period

Early-period *Shufu no tomo* (Magazine: The Companion of Housewives) set its sights on those who thought lightly of previous household discourses, and presented a wide view of the “home”. This could be considered the reason for its attracting a diverse readership. Also, at the outset, there was little mention of the state, and Christian leanings were

strong. However, from the late 1920s, due to various reasons – changes in editing policy in accordance with developments in consumer and mass culture, the religious view of chief editor, Ishikawa Takemi, and a succession of national incidents, etc. – the Christian element was withdrawn, and the tie between state and home was emphasised.

Report by: MAESHIMA Shiho (Lecturer, Hosei University Faculty of Business Administration)

KINUGASA Masaaki Japanese Literature in the 1910s and 1920s

The history of research of Japanese literature has commonly considered the Taisho Period as one of stagnation. Here I examined methods of research of Japanese literature in the Taisho Period from the view of heightened interest in world literature, influence and stimulus from history of thought, and popularisation of media use - which proved a significant re-examination. The divide between bibliography and appreciative criticism, a sharpening of methodological consciousness, and education as a substitute for rank as a result of popularisation, are all things of the 1930s, and can be considered elements that prepared the role and place of Japanese literature in the 1940s.

Report by: KINUGASA Masaaki (Professor, Hosei University Faculty of Intercultural Communication)



前島 志保 氏 (法政大学経営学部専任講師)



衣笠 正晃 氏 (法政大学国際文化学部教授)



会場の様子

战略研究基础形成支援项目 研究方法①“‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

第2次研究会

报告者1: 前岛 志保 (法政大学经营学部专任讲师)

报告者2: 衣笠 正晃 (法政大学国际文化学部教授)

日 期: 2012年9月22日(星期六) 13:30-17:00

会 场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主 持: 田中 优子 (法政大学社会学部教授)

前岛 志保 战时《主妇之友》中的“家庭”与“日本/国家”

初期的《主妇之友》以在传统的家庭观中被轻视的人为对象, 提出了范围广泛的家庭观, 这被认为是吸引众多读者的主要因素。此外, 关于国家的言论很少, 有较强的基督教倾向也是当时的特点之一。但在1920年中期以后, 随着消费文化和大众文化的发展, 編集方针也起了变化。

由于主办者石川武美的宗教观以及国家事件的重叠等各种因素, 基督教色彩逐渐褪却, 国家和家庭的结合开始被强调。

【执笔者: 前岛 志保 (法政大学经营学部专任讲师)】

衣笠 正晃 1910 ~ 20年代的国文学

从研究史方面来说, 虽然大正时期通常被认为是停滞期, 但此次我们从对世界文学关心的提高、对邻接思想史的影响和刺激、利用媒体所实现的大众化的视点出发, 再次讨论了此时期的国文学研究的状况和意义。文献学和鉴赏批评的对立、方法论意识的激进化、国文学的代替性教养地位的取得, 这些都为30、40年代国文学的繁荣奠定了坚实的基础。

【执笔者: 衣笠 正晃 (法政大学国际文化学部教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업 (2010년 ~ 2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한<일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구①<일본의식>의 변천-고대에서 근세로

제2회 연구회

보고자1: 마에지마 시호(前島 志保, 호세이대학교 경영학부 전임강사)

보고자2: 기누가사 마사아키(衣笠 正晃, 호세이대학교 국제문화학부 교수)

일 시: 2012년 9월 22일(토) 13:30 ~ 17:00

장 소: 호세이(法政) 대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 다나카 유코(田中 優子, 호세이대학 사회학부 교수)

1. 전간기《주부지우》에서 본 ‘가정’ 과 ‘일본/국가’

보고자: 마에지마 시호(前島 志保)
초기《주부지우(主婦之友)》는 기존의 가정론에서 경시됐던 사람들도 그 대상에 포함시킴으로써 폭넓은 가정관을 제시했다. 이것이 다양한 독자를 사로잡은 요인이라고 생각된다. 또한, 초기에는 국가에 대한 언급은

드물었고, 기독교적인 경향이 강했다. 그러나 1920년대 중반 이후, 소비문화와 대중문화의 발전에 따른 편집 방침의 변화, 주재자 이시카와 다케요시(石川武美)의 종교관, 국가적 사건이 겹치는 등 다양한 요인에 의해 기독교적인 색깔이 퇴색되고 국가와 가정의 결속이 강조됐다.

【기사집필: 마에지마 시호, 호세이대학교 경영학부 전임강사】

2. 1910 ~ 20년대의 국문학

보고자: 기누가사 마사아키(衣笠 正晃)
국문학 연구사에서 보통 정체기로 간주되는 다이쇼기(1910 ~ 20) 국문학의 연구상황을, 세계문학적인 관심의 고조, 그 주변의 사상사(思想史)로부터의 영향과 자극, 미디어를 이용한 대중화라는 관점에서 검토하고 그 의의를 재검토했다. 문헌학과 감상비평의 대립과 방법론적 의식의 첩예화, 대중화의 결과로서의 대체적 교양이라는 지위를 획득한 것은 모두 1930년대, 40년대의 국문학의 역할과 위치를 마련한 것으로 볼 수 있다.

【기사집필: 기누가사 마사아키, 호세이대학교 국제문화학부 교수】

第 3 回研究会

イーハトーヴと賢治の日本・国際意識 ー浮世絵の観点からー

- 報告者：人見 千佐子（法政大学国際日本学研究所学術研究員）
- 日 時：2012 年 10 月 12 日（金）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）

宮澤賢治は国を問わず様々な言葉や地域、文化が混在したイーハトーヴという世界を創造した。その意味で日本と海外の間に境界線をひくということから一番遠い作家ではないだろうか。しかし近代化の波が東京から賢治の住む岩手県花巻に及ぶに従い、そして東京に執着し何度も上京を重ねるに従い、生身の賢治が何かしらの日本意識を持つに及んだことは想像される。例えば物語世界に反映されることはなくても、賢治が残したものの中からその手掛かりを探すことはできないだろうか。花巻は勿論のこと、仙台や東京で浮世絵を買い集め、その収集数は三千枚から四千枚とも言われている。上野で展覧会があると聞けば展示が入れ替わる度に会場に足を運ぶ、それだけ浮世絵に魅せられていたのである。

「浮世絵版画の話」

浮世絵に関する評論「浮世絵版画の話」には賢治の浮世絵観が色濃くうつしだされている。浮世絵の持つ単純性、韻律、神秘性、工芸美、そして安価であることが最も賢治をひきつけた。この視点の中には同時代の海外収集家達のものとも共通するものがある。例えば建築家のフランク・ロイド・ライトは日本の文化に触れるに従い、その精神性にひきつけられていくが、彼が最も称賛したものは「単純化」であった。そしてその単純化こそが（浮世絵）版画に見られた、と言っている。また、「ぜいたく品でないこと」という賢治の文言からは、芸術が人口の一角の富裕者しか享受できない、と嘆いたトルストイの影響が感じられる。浮世絵に関する海外の評論に触れること、そして国の境界を超えて芸術について考えることは、結果的に外側から見た日本の芸術という視点を賢治に与えたのである。

詩「浮世絵展覧会印象」

賢治の浮世絵観は詩「浮世絵展覧会印象」の中でも雄弁に語られている。とりわけ浮世絵の持つ物理的な性質、つまり楮でできている浮世絵は湿気や気温によって（体積が）増減するが、それは呼吸であるといった点や、展示室に掲げられた浮世絵の人物たちは神秘的な笑いを浮かべつつ観覧客に語りかけようとする、その様を描きだしている。このことは「浮世絵版画の話」の工芸美に関する文にも同様の記述が見られ、特に重視している点だという見方もできる。

同時代の作家たち

例えば永井荷風は『日和下駄』の中で東京の景色を北斎の名所絵と重ね、消えゆく江戸の情緒を惜しんだ。

彼はまた多くの海外の浮世絵研究者の論評を読み、当時日本よりだいぶ進んでいた浮世絵研究を紹介している。海外に散逸した浮世絵を嘆く点、春信の初期の色使いを好む点など、賢治との共通点は多い。

泉鏡花の描く異世界はイーハトーヴと性質上似ているところがある。「国貞翁がく」では浮世絵の世界とあの世とこの世が複雑に入り混じる。賢治のいう四次元とは三次元に時間、思索、永遠といったものが加えられたものであるが、それは勿論あの世との関わりも深く、特に妹トシの死によってその意義も深められていく傾向があった。

「国貞翁がく」の物語の人物と浮世絵に描かれた姉妹達との次元を超えた交信は、まさに賢治が「浮世絵展覧会印象」で描いた世界と同様のものである。

賢治と日本意識

童話作品中、形容の目的や、外国と並べて単なる一つの国として扱う以外は、賢治は「日本」という単語を使わなかった。しかし、浮世絵展覧会の為に上京した 1928 年、東京をモチーフにして書いた多くの詩には「日本」という単語が合計六回使われ、その多くが海外諸国に対する日本、国としての日本という意味を含んでいる。

賢治は童話を創作するうえで、日本と海外との境界線を明確にする事はなかったが、この浮世絵展覧会の為の上京のタイミングでそういった意識は一度に賢治の中に流れ込んできたのではないだろうか。つまり西欧由来の近代文明に流されつつあった東京の姿と、海外諸国によって新たにその価値を見出されていた、海外に誇れる日本芸術、浮世絵を同時に認識した時、日本という国の相対化がおこなわれたのである。

発表後の意見交換では、賢治の詩でとりあげた浮世絵についてさらに踏み込めないか、詩の中の伏字についてのさらなる検証が必要ではないか、また賢治が収集していた浮世絵の傾向を知る事はできないか、等の質問の他、賢治は浮世絵そのものに触れていた印象を受ける、他の童話作家の「日本」という言葉使用についての比較やナショナリズムとの兼ね合いも気になる、というコメントをいただいた。また、賢治自身の自然観や芸術観に関する立場といった大きな問題について活発な意見交換が行われた。発表者としては新たな視点も加わり、今後の課題もより明確となった。より一層の研究を重ねていきたい。

【記事執筆：人見 千佐子
（法政大学国際日本学研究所学術研究員）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

3rd Research Meeting

Ihatov and Miyazawa Kenji's Japanese / International Consciousness: From the View of Ukiyo-e

Speaker 1: HITOMI Chisako (Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Date: Friday, 12 October 2012, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2nd Floor Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

We do not sense any national boundaries in the make-

战略研究基础形成支援项目 研究方法① “‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

第3次研究会

Ihatov(贤治的理想国) 与贤治的日本・国际意识 —以浮世绘为观点—

报告者: 人见 千佐子(法政大学国际日本学研究所学术研究员)

日期: 2012年10月12日(星期五) 18:30-20:30

会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持: 田中 优子(法政大学社会学部教授) 在宫泽贤治的创作世界里感觉不到国境。对贤治而言

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업 (2010년 ~ 2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한<일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구①<일본의식>의 변천-고대에서 근세로

제3회 연구회

이하토브(IHATOV)와 미야자와 겐지의 일본・국제 의식 —우키요에의 관점에서—

보고자: 히토미 치사코(人見 千佐子, 호세이대학교 국제일본학연구소 학술연구원)

일시: 2012년 10월 12일(금) 18:30 ~ 20:30

장소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사회: 다나카 유코(田中 優子, 호세이대학 사회학부 교수)

미야자와 겐지(宮澤賢治)의 창조 세계에는 국경이 느껴지지 않는다. 겐지의 일본 의식, 국제 의식을 생각할 때 중요한 단서 중 하나로, 겐지가 오랫동안 관심을 두고 그 수집량도 수천 장에 이른다는 우키요에(浮世絵)를 들 수 있을 것이다. 우키요에는 당시 해외 연구가들에 의해 그 가치가 재인식되고 있었다. 예를 들어 건축가 프랭크 로이드 라이트가 우키요에의 단순함에 매료된 것과 같이, 일본 내에서의 발상과는 다른 부분에서 그 매력을 찾아냈다. 겐지가 유일하게 우키요에에 관해 분석한 <우키요에 관화 이야기>는 해외에서 바라보는 이러한 시점과 공통점이 많다.

believe world of Miyazawa Kenji. One important way of considering what Japan-consciousness and international consciousness meant for Kenji is perhaps by raising the example of Ukiyo-e, Floating World prints, in which he was interested over a long period, and that he collected in their thousands. Ukiyo-e, whose value was gradually being recognised at that time by foreign scholars, were found to possess charm in aspects different from the Japanese internal concept – for example, the architect Frank Lloyd Wright was fascinated by their simplicity. Kenji's sole analysis of Ukiyo-e, “About Ukiyo-e Prints”, has much in common with this foreign viewpoint. Also, a comparison with the Ukiyo-e-themed work of Nagai Kafu and Izumi Kyoka shows that whilst there are similarities in, for instance, their connections with Tokyo and communication with other dimensions, Kenji ultimately holds his own unique understanding of Ukiyo-e. Could the Western -originated modernisation pervading Tokyo, as well as the Ukiyo-e so prized overseas, have enabled Kenji to find within himself the means to relativise the country called Japan?

Report by: HITOMI Chisako (Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

考虑其日本意识和国际意识的重要线索之一，就是贤治长期保持兴趣、收藏数目达数千张的浮世绘。浮世绘在当时被国外研究人员对其价值进行了再认识，例如，建筑家弗兰克·劳埃德·赖特对其单纯性十分着迷，他发现了其与日本内部的构想所不同的魅力。在贤治唯一的分析浮世绘的作品《浮世绘版画的故事》中，与此类海外的观点有着很多的共通之处。其次，在与以浮世绘为题材的永井荷风、泉镜花等的作品的比较中，虽然在谈及和东京的关联、和异次元联络等方面时有共同点，但最终还是能感受到贤治对于浮世绘的独特认识。受西方影响的近代化东京、以及受海外称赞的浮世绘，可以被认为是贤治在内部将日本这一国家进行相对化的契机。

【执笔者: 人见 千佐子(法政大学国际日本学研究所学术研究员)】

또한, 우키요에를 소재로 한 나가이 가후(永井荷風)와 이즈미 교카(泉鏡花)의 작품과 비교했을 때, 각각 도교와의 관계, 다른 차원과의 교신이라는 공통점이 있으면서도 결국 겐지의 독자적인 우키요에 인식이 있다는 것을 알 수 있다. 서양에서 들어온 근대화가 진행되고 있던 도교와 해외에서 찬사를 받고 있던 우키요에는, 겐지 안에서 일본이라는 나라를 상대화시키는 계기가 됐을지도 모른다.

【기사집필: 히토미 치사코

(호세이대학교 국제일본학연구소 학술연구원)】



発表の様子: 人見 千佐子氏
(法政大学国際日本学研究所学術研究員)

第 4 回研究会

浦島説話の成立と展開

- 報告者：三舟 隆之（東京医療保健大学医療保健学部准教授）
- 日 時：2012 年 11 月 9 日（金）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：田中 優子（法政大学社会学部教授）

我々の知る「浦島太郎」は国定教科書の物語がベースとなっているが、これは巖谷小波の『日本昔噺』に基づいている。そして『日本昔噺』は室町時代に成立した『御伽草子』の影響が濃厚で、さらに『御伽草子』は、古代の浦島子伝承をベースにしていることが明らかになっている。

古代の浦島子伝承は、『日本書紀』雄略 22 年（478）7 月条に見え、その内容は、丹波国余社郡管川の人水江の浦島子が亀を釣ったところ、それが美女と化して結婚して蓬莱山に行き仙界を巡った、とある。詳細な内容を伝えるのは『丹後国風土記』の浦島子伝承で、そこでは丹後国与謝郡日置里筒川村の浦島子は日下部首らの先祖であるという氏族系譜として伝えられ、「いわゆる」というところから広く知られている説話であることが示されている。また同時に「伊預部連馬養記」と相違ないということが記されており、奈良時代ではすでに丹後地方を舞台としたいいくつかの伝承が成立していたと考えられる。

内容的には中国の神仙思想の影響が濃厚で、五色の亀は仙女であり、亀は『抱朴子』には長生の動物であると記され、さらに蓬莱山は中国東方の海上に浮かぶ仙人の住む三神山の一つとして知られ、秦の始皇帝が徐福を派遣したという伝説が存在する。重要なのは亀＝仙女との異類神婚伝承であり、玉匣を渡されて「絶対開けるな」と言われたのに開けてしまい、二度と会えないことを知る。この物語では後代と違って白髪の老人にはならず、むしろ中国の神仙小説にあるような、恋愛小説的な内容となっている。

一方、『万葉集』の浦島子伝承は、海神を祀る摂津国住吉大社付近が舞台と考えられ、ここでは浦島子は庶民として描かれている。亀は登場せず、海神の娘と偶然に出会って結婚するという神婚伝承である。また浦島子が向かったのは、古代日本では海の彼方にある不老不死の理想郷であった常世国という世界で、そこで結婚して幸せに暮らしていたのに故郷を思い出し、帰るにあたって「絶対開けるな」と言われた玉匣を開けてしまい、白髪の老人になって死ぬというストーリーは、丹後系の浦島子伝承とは異なっている。作者の高橋連虫麻呂は万葉歌人として有名で、下総真間の娘子伝承などの在地伝承を題材にしたものが多い。したがって『万葉集』の浦島子伝承は、丹後系の浦島子伝承が中国の神仙小説の影響が強いのに対し、日本的な浦島子伝承となっている。

しかし『万葉集』には、浦島子伝承の他に柘枝の仙女説話などの仙女との出会いの物語があり、神仙

思想は古代の貴族・庶民の憧れでもあった。すでに江戸時代に滝沢馬琴が『燕石雑誌』で指摘したように、浦島子伝承の源流は東アジアにあると思われる。中国では洞庭湖の竜女説話のような類似した説話が存在するが、口承伝承であるため成立時期は判明せず、浦島子伝承はむしろ『幽明録』や『捜神後記』などにある仙境滞留説話がモチーフとなった可能性が高い。同様に朝鮮半島でも、孫晋泰が『朝鮮民譚集』で採録した「放鯉得竜女」などの物語に共通性は見いだせるが、口承伝承であるために浦島子伝承の源流となると考えるのは難しい。

一方日本の記紀神話には「海幸彦山幸彦」の物語があり、海神の宮や海神の娘との結婚の物語が、『万葉集』の浦島子伝承に影響を与えた可能性もある。また『日本書紀』『丹後国風土記』の浦島子伝承は丹後地方を舞台とするが、丹後地方では弥生・古墳時代に大陸系の遺物が出土しており、古代において大陸との交易の可能性が指摘されている。そのような土壌の中で浦島子伝承が成立し、平安時代までに浦嶋神社（宇良神社）が成立したと思われる。

丹後地方には、浦島子伝承の他に羽衣伝承の原型となる天女伝説が『丹後国風土記』に残る。天女伝説も中国を中心とする東アジア圏に広く残る物語であるが、日本では浦島子伝承のように広く弘まって一般化することがなかった。浦島子伝承の場合は、平安時代に数々の「浦島子伝」が成立し、それがやがて室町時代の『御伽草子』に発展し、仏教的な報恩と放生の論理の中で、我々の知る浦島物語の「浦島太郎」「竜宮城」「乙姫」「玉手箱」などの語が登場し、近世に入って庶民文化の隆盛と共にパロディー化してなじみ深い物語となっていく。浦島説話は古代に成立し近現代に至るまで、それぞれの時代の影響を受け続けて発展してきたが、天女伝説については浦島子伝承と同様に中国の説話の影響を受けながらも、一般に広がらない。

この相違は、浦島説話は中国の神仙思想の影響を受けながらも日本で成立し、日本人が好む日本的な説話として発展していったことにあるのではなかろうか。中国の影響を受けながら成立した日本の古代伝承については、このほか『日本霊異記』なども存在するので、今後説話の史的研究も重要な課題であると思われる。

【記事執筆：三舟 隆之
（東京医療保健大学医療保健学部准教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 1 “Changes in ‘Japan-consciousness’: from Ancient to Early Modern Eras”

4th Research Meeting

Formation and Development of the Urashima Tale

Speaker: MIFUNE Takayuki (Associate Professor, Tokyo Health Care University)
 Date: Friday, 9 November 2012, 18:30-20:30
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building 2nd Floor Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
 Chair: TANAKA Yuko (Professor, Faculty of Social Sciences, Hosei University)

The story of Urashima Taro, known by everyone, is based on the ancient legend of Urashima-ko. It became the story of *Otogizoshi* in the Medieval Period, and was given new elements during the Early Modern and Modern Periods

which brings us the tale we know today. However, even the ancient Urashima-ko legend is strongly influenced by the supernatural thought of Chinese Taoism, according to commentary in histories such as *Nihonshoki* and *Tanbanokuni Fudoki*. On the other hand, the Urashima legend appearing in the *Manyoshu*, that also dates back to the Nara Period, has influence from the myths of *Kojiki* and *Nihonshoki* (e.g. his going to heaven), indicating that a different legend already existed in ancient times.

Although there are myths of East Asia such as China and the Korean Peninsula whose motifs resemble the Urashima-ko legend, there are none that are direct originals of that myth. Nevertheless, the goddess myth found in the ancient *Fudoki* does have origins in a Chinese myth. The goddess myth, however, differs from the Urashima-ko legend in Japan in that it has not become generalised. This difference perhaps lies in the fact that the Urashima myth, whilst being influenced by Chinese supernatural thought, was created and developed as a Japanese myth loved by Japanese people.

Report by: MIFUNE Takayuki
 (Associate Professor, Tokyo Health Care University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法① “‘对日认识’的变迁——从古代到近代”

第4次研究会

浦岛传说的成立与展开

报告者：三舟 隆之（东京医疗保健大学医疗保健学部准教授）
 日期：2012年11月9日（星期五）18:30-20:30
 会场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室
 主持人：田中 优子（法政大学社会学部教授）

众所周知的浦岛太郎的传说，是以古代的浦岛子口传为基础演变为中世的《御伽草子》中的故事，然后在近代

加入新的要素才形成今天的传说。但是，古代的浦岛子口传和《日本书纪》、《丹后国风土记》等传说都受到了中国道教神仙思想的强烈影响。另一方面，同样是在奈良时代形成的《万叶集》的浦岛子传说则受到了《古事记》和《日本书纪》中的神话的影响，在古代已经有了不一样的传承的存在。

在中国和朝鲜半岛等东亚地区有着与浦岛子传说主题相似的故事，但没有直接的原型。然而出现在古代的《风土记》中的天女传说，在中国是有原型存在的，只不过天女传说与浦岛子不同，并没有被普遍化。这其中的不同大概就在于，浦岛传说既受到中国的神仙思想的影响，又是作为日本人所喜欢的形式而成立和发展起来的吧。

【执笔者：三舟 隆之（东京医疗保健大学医疗保健学部准教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)
 국제일본학 연구방법에 기초한<일본의식>의 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래
 연구①<일본의식>의 변천-고대에서 근세로
 제4회 연구회

우라시마 설화의 성립과 전개

보고자: 미후네 다카유키(三舟 隆之, 도쿄의료보건대학교 의료보건학부 준교수)
 일 시: 2012년 11월 9일(금) 18:30 ~ 20:30
 장 소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
 사 회: 다나카 유코(田中 優子, 호세이대학교 사회학부 교수)

누구나 알고 있는 우라시마 다로(浦島太郎) 이야기는 고대 우라시마코(浦島子) 전승을 바탕으로, 중세에는 <오토기조시(御伽草子)> 이야기가 되고, 근세와 현대에는 새로운 요소가 가미되어 오늘날의 이야기가 된다. 그러나 고대 우라시마코 전승도 <니혼쇼키(日本書紀)>와 <단고노쿠니 후도키(丹後国風土記)>의 설화에서는 중국 도교의 신선사상에 강한 영향을 받고 있다. 한편, 같은 시기인 나라(奈良)시대에 성립된 <만요슈(万葉集)>에 실린 우라시마코 전승은 도코요노쿠니(常世国, 바다 건너 영원불멸의 나라)에 가는 등 기기(記紀)신화의 영향을 받고 있으며, 고대에는 이미 다른 전승이 존재하고 있었다. 우라시마코 전승은 중국이나 한반도 등 동아시아 설화에 유사한 모티브의 설화가 존재하나 직접 설화

의 원형이 된 것은 없다. 그런데 고대 <후도키>에서 볼 수 있는 선녀 설화는 중국에 원형이 되는 설화가 존재한다. 그러나 일본에서 선녀 설화는 우라시마코 전승과는 달리 일반화되지 않았다. 이러한 차이는, 우라시마 설화가 중국 신선사상의 영향을 받으면서도 일본인이 좋아하는 일본적인 설화로 성립·발전한 것에 기인하는 것으로 생각된다.

【기사집필: 미후네 다카유키
 (도쿄의료보건대학교 의료보건학부 준교수)】



報告：三舟 隆之 氏
 (東京医療保健大学医療保健学部准教授)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立」

2012 年度第 2 回研究会

〈日本意識〉の成立ー日本民俗学・民族学の貢献Ⅱ

- 日 時：2012 年 10 月 12 日（金）～13 日（土）
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 九段校舎 5 階 第 2 会議室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼任所員、国際戦略機構特別教授）

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）採択の研究プロジェクト「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」のアプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立ー日本民俗学・民族学の貢献」では、2012 年 10 月 12 日と 13 日の二日間にわたって、第 2 回の研究会を開催した。

この研究会では、博物館とアイデンティティーの形成に関するテーマで、それぞれの専門家からご報告いただき、討論した。

北海道大学アイヌ・先住民族研究センター特任教授である佐々木利和先生には、東京国立博物館、文化庁、国立民族学博物館、そして北海道大学アイヌ・先住民族研究センターで勤務された経験から、「皇室博物館と土俗展示」というテーマで、戦前の皇室博物館（現在の東京国立博物館）における多民族国家のなかの少数民族の文化、なかんずくアイヌと沖縄の展示についてご報告いただいた。

名桜大学名誉教授で久米島博物館名誉館長の上江洲均先生には、「戦後沖縄の博物館」というテーマで、戦後間もなくの焼野原から、アメリカ海軍のハンナ少佐の手によって琉球の芸術・文化作品が集められ、最初の郷土博物館が出来上がるまでの歴史と、それがいかにアメリカの占領政策、また、沖縄の人々の自己認識に関係したのかをお話しいただいた。

北海道大学大学院教育学研究院准教授の近藤健一郎先生には、「1920～1930 年代の沖縄学の展開過程における沖縄県教育会附設郷土博物館の設立」というテーマで、郷土博物館と島袋源七の沖縄の研究と

の関連についてご報告いただいた。

また、神奈川大学経営学部准教授の泉水英計先生には、「琉球列島学術調査（SIRI）、1951-1954 ー米国人類学・歴史学と沖縄軍政」というテーマで、歴史学者であったカーと琉球政府立博物館（現在の沖縄県立博物館）の設立との関係について、今まで知られていない背景についてご報告いただいた。さらに、泉水先生にご報告いただいたアメリカの学術調査について、桜美林大学人文学系教授の中生勝美先生からコメントをいただいた。

琉球大学法文学部国際言語文化学科教授の赤嶺政信先生には、「戦後沖縄における郷土研究の動向」というテーマで、戦後の沖縄の人々の手による郷土博物館再建、琉球大学の学生による郷土研究会（民俗研究クラブ）、また、最初の講座ができるまでをお話しいただいた。その他に、沖縄文化協会、沖縄民俗学会、宮古八重山地方の郷土研究のあゆみを非常に細かく分析し、説明していただいた。

今回の研究会の成果は、アイデンティティーの形成において今まであまり注目されてこなかった博物館の役割がいかに重要であったかを認識することができたことである。

第 3 回の研究会は、隣接諸科学のなかから、20 世紀を通じての考古学、言語学のパラダイムの変化についてご報告いただく予定である。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー

（法政大学国際日本学研究所兼任所員・国際戦略機構特別教授）】



佐々木利和氏
（北海道大学アイヌ・先住民族研究センター特任教授）



上江洲均氏（名桜大学名誉教授）

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
 “Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
 Research Approach 2 “Establishment of Modern ‘Japan-consciousness’”

2nd Research Meeting of 2012

“The Contribution of Folklore Studies and Ethnology to the Development of a ‘Japan-Consciousness’”, II

Date: Friday, 12 – Saturday, 13 October 2012
 Venue: Hosei University Ichigaya Campus Kudan Schools 5th Floor Conference Room II
 Chair: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Planning and Strategy Division)

This research meeting had as its theme “Museums and the Formation of Identity”, and was held over two days. Three participants gave presentations on the first day, 12 October. Sasaki Toshikazu (Hokkaido University)

reported on the Ainu and Okinawa displays at the pre-war Imperial Museum (Present-day Tokyo National Museum). Uezu Hitoshi (Meio University/Kumejima Museum) gave a presentation entitled “Museums in Okinawa in the Post-war Period”. Kondo Kenichiro (Hokkaido University) spoke about the Folk Museum and its relationship with the Okinawan studies of Shimabukuro Genshichi. There were another three presentations on the second day, 13 October. Sensui Hidekazu (Kanagawa University) reported on the historical scholar, George Henry Kerr’s connection with the establishment of the Ryukyu Governmental Museum (present-day Okinawa Prefectural Museum). Also, Nakao Katsumi (J. F. Oberlin University) provided comments on this presentation. Akamine Masanobu (University of the Ryukyus) then gave a presentation entitled “Trend of Local Area Research in Okinawa in the Post War Period”. The role of the museum in the formation of identity has hitherto been given little attention, but the research meeting on this occasion enabled us to recognise how important it has been.

Report by: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Hosei University Planning and Strategy Division)

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法在讨论——对日认识的过去、现在和未来”

2012 年度第 2 次研究会

《日本民俗学・民族学的贡献》

日 期：2012年10月12日（星期五）～13日（星期六）
 会 场：法政大学市谷校区 九段校舍5层 第二会议室
 主 持：Josef Kreiner（法政大学国际日本学研究所兼任所员、国际战略机构特别教授）

此次研究会以博物馆和国家认同感的形成为主题，进行了为期两天的讨论。10月12日的第一天有3人作了报告，佐佐木利和（北海道大学）作了战前的帝室博物馆（现在的东京博物馆）中阿依努与冲绳的展示的报告；上江州均

（名樱大学/久米岛博物馆）作了以“战后冲绳的博物馆”为题的报告；近藤健一郎（北海道大学）作了关于乡土博物馆与岛袋源七的冲绳研究之间关系的报告。10月13日的第二天，泉水英计（神奈川大学）作了历史学者乔治·亨利·卡尔（George Henry Kerr）与琉球博物馆（现在的冲绳县立博物馆）的设立之间关系的报告，中生胜美（樱美林大学）对此报告进行了评论；赤岭政信（琉球大学）作了以“战后冲绳研究的乡土研究动向”为题的报告。通过此次研究会，在国家认同感的形成中，迄今为止没有被太多关注的博物馆的重要性得到了充分认识。

【执笔者：Josef Kreiner
 （法政大学国际日本学研究所兼任所员・国际战略机构特别教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업 (2010년 ~ 2014년)
 국제일본학 연구방법에 기초한<일본의식>의 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래

2012년도 제2회 연구회

일본 민속학·민족학의 공헌

일 시：2012년 10월 12일(금) ~ 13일(토)
 장 소：호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 구단 교사 5층 제2회의실
 사 회：요셉 클라이너(호세이대학교 국제일본학연구소 겸담 연구소원·국제전략기구 특별 교수)

이번 연구회는 박물관과 아이덴티티의 형성이라는 주제로 이틀간 열렸다.

10월 12일 첫날에는 3명의 보고가 있었다. 먼저 사사키 도시카즈(佐々木利和, 홋카이도대학교) 씨가 전쟁전의 제실(帝室)박물관(현 도쿄국립박물관)에서 열린 아이누와 오키나와(沖縄) 전시에 대해 보고했다. 다음으로 우에즈 히토시(上江洲均, 메이오(名桜)대학교, 구

메지마(久米島)박물관) 씨는 ‘전후 오키나와의 박물관’이라는 제목으로 보고했다. 마지막으로 콘도 겐이치로(近藤健一郎, 홋카이도대학교) 씨는 향토 박물관과 시마부쿠로 겐시치(島袋源七)의 오키나와 연구와의 관련성에 대해 보고했다.

10월 13일 둘째 날에도 3명이 보고했다. 켄스이 히데카즈(泉水英計, 가나가와(神奈川)대학교) 씨는 역사학자 조지 헨리 커(George Henry Kerr)와 류큐정부립(琉球政府立)박물관(현 오키나와현립박물관) 설립과의 관계에 대해 보고했으며, 나카오 가즈미(中生勝美, 오비린(櫻美林)대학교) 씨가 코멘트를 했다. 마지막으로 아카미네 마사노부(赤嶺政信, 류큐대학교) 씨는 ‘전후 오키나와의 향토연구 동향’이라는 제목으로 보고했다.

이번 연구회를 통해 아이덴티티의 형성에 있어 지금까지 그다지 주목받지 못했던 박물관의 역할이 얼마나 중요했는가를 인식할 수 있었다.

【기사집필：요셉 클라이너
 (호세이대학교 국제일본학연구소 겸담 연구소원·국제전략기구특별교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ②「近代の〈日本意識〉の成立」

2012 年度第 3 回研究会

〈日本意識〉の成立ー日本民俗学・民族学の貢献Ⅲ

- 日 時：2012 年 11 月 30 日（金）～12 月 1 日（土）
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナードタワー 25 階 B 会議室
- 司 会：ヨーゼフ・クライナー（法政大学国際日本学研究所兼担所員、国際戦略機構特別教授）

2012 年度の最後の研究会では、2012 年 3 月の国際シンポジウム「岡正雄ー日本民族学の草分け」に引き続き、岡正雄の学説を隣接諸科学、すなわち考古学と言語学の観点から再評価する試みを行った。岡正雄は、ウィーン大学に提出した 1000 頁に渡るドイツ語による博士論文 *Kulturschichten in Alt-Japan*（古日本の文化層、1933 年）の中で、柳田國男の民俗学、折口信夫の古代研究、そして鳥居龍三などの人類学の膨大な資料を分析し、日本民族文化がいくつかの異なった文化層に分けられると強調した。またその各文化層を考古学的また言語学的に定義し、旧石器時代以降、古墳時代に至るまで何度かにわたって大陸の異なった地域から日本に流れ込んできたのではないかと推定した。この学説は、1948（昭和 23）年に行われた対談「日本民族文化の源流と日本国家の形成」において、石田英一郎の司会のもとで行われた八幡一郎、江上波夫との対談の中で示され、雑誌『民族学研究』に発表した。これは、日本の学界のみならず、一般社会にも大きな反響を起した。ただ、元になる独文の論文は長い間未刊行で「謎の大著」と言われた。この論文は、2012 年の夏に三菱財団の支援を受けて出版され、初めて総合的に紹介された。3 月のシンポジウムは、岡正雄の直弟子である祖父江孝男、住谷彦、岡田淳子をはじめドイツとオーストリアの研究者を交えて 2 日間にわたって討論されたが、岡正雄の学説と非常に深く関わり合っている考古学と言語学からのアプローチが不足していた。そこで、今回の研究会ではその両分野の専門家にお願いして、発表・討論していただいた。

初日である 11 月 30 日には、明治大学文学部教授の石川日出志先生に「日本民族起源論における考古学と岡正雄の乖離」というタイトルで報告していただいた。石川先生はまず、岡は柳田の談話会に参加し、ウィーンへ留学する前に、前世代を代表する学者である鳥居龍蔵の学説が岡の学問形成の下地になったのではないかという重大な指摘をされた。そのうえで江上波夫と八幡一郎の発言に注目し、江上のいわゆる騎馬民族征服王朝説に対する考古学、なканずく小林行雄の非常に厳しい批判を紹介した。また、それと打って変わって、八幡発言に対する考古学界の無反応の背景について触れ、そういった考古学界の反対はありつつも 1970 年代に入って、岡の学説を歴史民族学の立場から引き継いだ大林太良の論文「縄文時代の社会組織」、そして、佐々木高明の『稲作以前』という照葉樹林文化論として知られている学説が、日本の考古学界に大きく影響ないし刺激を与え

たことを指摘し、報告を締めくくった。

また、2 日目となる 12 月 1 日には、言語学の分野の、獨協大学外国語学部准教授のパトリック・ハインリッヒ先生に「現在言語学の観点から見た岡正雄の先史時代の文化と言語層理論」と題してご発表いただいた。ハインリッヒ先生は、岡の学説は大きく見て、言語学の分野でもそのまま認められたことがなかったものの、考古学とは異なり、言語学の諸学説に最初から大きな刺激を与えてきたと指摘した。例えば大野晋の『日本語の起源』、あるいは 20 世紀後半を通じて日本国内外で論じられたいわゆる日本語の南方起源論対北方起源論（オーストロネシア語族対アルタイ語族）の論争はそのような例の一つである。しかし、現在の言語学ではそういった語族の研究や、言語の変化を時間軸だけで見るという方法論からは離れて、むしろ、言語接触およびそれによるクレオール語の発生などに研究が集中してきているので、岡の学説はそのような観点から見てもまだ興味深い面があるのではないかと締めくくった。

なお、両者の発表は 3 月の国際シンポジウム、また他の 2 回にわたる研究会で行われた「東京教育大学と民俗学研究」、「博物館とアイデンティティならびに沖縄研究」に関する発表とともに、『日本文化人類学の戦前・戦中・戦後ー岡正雄をめぐる一』というタイトルの報告書にまとめ、東京堂出版から出版された。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー

（法政大学国際日本学研究所兼担所員・国際戦略機構特別教授）】



石川日出志 氏（明治大学教授）

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
Research Approach 2 “Establishment of Modern ‘Japan-consciousness’”

3rd Research Meeting of 2012

“The Contribution of Folklore Studies and Ethnology to the Development of a ‘Japan-Consciousness’”, III

Date: Friday, 30 November – Saturday, 1 December 2012

Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade Tower 25th Floor Conference Room B

Chair: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Planning and Strategy Division)

This research meeting re-evaluated the theory of Oka Masao from the perspective of archaeology and linguistics. On the first day, Ishikawa Hideshi (Meiji University) gave a presentation: “Estrangement between Archaeology and Oka Masao on the Theory of the Origin of the Japanese Race”. Professor Ishikawa proposed that even before Oka had taken part in the conversation circle of Yanagita

Kunio and even before he went to Vienna, Origuchi Nobuo’s theory of “*marebito*” had already formed the basis of Oka’s scholarship. It was also shown that Oka’s successors had great influence upon the world of Japanese archaeology. On the second day, we turned to the field of linguistics, and heard a report from Patrick Heinrich (Dokkyo University) entitled “Oka Masao and His Theory on Culture in the Prehistoric Age and the Theory of the Language Layer: From the View of Contemporary Linguistics”. Dr. Heinrich suggested that, although Oka’s theory could not be accepted into the field of linguistics in its original form, it provided much stimulus for various theories on linguistics. He also indicated that Oka’s theory still provides an aspect of great interest as research in linguistics becomes focussed on linguistic contact and the appearance of creole language. These two presentations will, together with the research papers presented at the international symposium of March 2012, “Oka Masao: Pioneer of Japanese Ethnology”, and those of the two previous research meetings of 2012, be published in a volume of reports.

Report by: Josef KREINER (Staff Member, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor and Special Adviser, Hosei University Planning and Strategy Division)

战略研究基础形成支援项目“用国际日本学的方法在讨论——对日认识的过去、现在和未来”

2012 年度第 3 次研究会

《日本民俗学・民族学的贡献》

日 期：2012年11月30日(星期五)～12月1日(星期六)

会 场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议
室

主 持：Josef Kreiner (法政大学国际日本学研究所
兼任所员、国际战略机构特别教授)

此次会议从考古学和语言学的观点出发对冈正雄的学说进行了再次考察。11月30日的第一天里石川日出志(明治大学)作了题为“日本民族起源论中的考古学与冈正雄的背离”的报告。石川指出，在冈正雄参加柳田国男的谈

话会和维也纳留学之前，鸟居龙三的学说已经成为了他的学问形成的基础。此外，石川还指出了冈的后继者对日本的考古学界给予了非常大的影响。12月1日的第二天里，帕特里克·海因策(独协大学)作了题为“现代语言学观点所见的冈正雄史前时代的文化和语言层理论”的发表。海因策指出，冈的学说在虽然语言学界没有被完全的接受，但对语言学的各种学说起了很大的刺激作用。现在的语言学界正集中对语言接触和克里奥尔语的产生等进行研究，冈的学说还存在着许多值得探讨的层面。预定二位的发言，将和2012年3月的国际研讨会“冈正雄—日本民族学的开拓者”上所发表的研究论文一起，总结为报告书并出版。

【执笔者：Josef Kreiner

(法政大学国际日本学研究所兼任所员・国际战略机构特别教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업 (2010년 ~ 2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한<일본의식>의 재검토-〈일본의식>의 과거·현재·미래

2012년도 제3회 연구회

일본 민족학·민족학의 공헌

일 시：2012년 11월 30일(금)～12월 1일(토)

장 소：호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사 회：요셉 클라이너(호세이대학교 국제일본학연구소
겸담 연구소원·국제전략기구 특별교수)

이번 연구회에서는 오카 마사오(岡正雄)의 학설을 고고학과 언어학의 관점에서 재평가했다. 첫날 11월 30일에는 이시카와 히데시(石川日出志, 메이지(明治)대학교)씨가 ‘일본 민족 기원론에서의 고고학과 오카 마사오의 괴리’라는 제목으로 발표했다. 이시카와 씨는, 오카는 야나기타 구니오(柳田國男) 담화회에 참가했으며, 도리이 류조(鳥居龍三)의 학설이 오카가 오스트리아 빈에 유학가기 전부터 그의 학문 형성에 바탕이 됐을 것이라

고 지적했다. 또한 오카의 후계자들은 일본 고고학계에 큰 영향을 미쳤다고 했다.

둘째 날인 12월 1일에는 언어학 분야에서 패트릭 하인리히(Patrick HEINRICH, 독교(獨協)대학교)씨가 ‘현재 언어학의 관점에서 본 오카 마사오의 선사시대 문화와 언어계층이론’이라는 제목으로 발표했다. 하인리히 씨는, 오카의 학설은 언어학 분야에서는 그대로 받아들여지지 않았으나, 언어학의 여러 학설에 큰 자극이 됐다고 지적했다.

또한 현재 언어학에서는 언어 접촉과 크레올어의 발생 등에 관한 연구가 집중돼 있어 그의 학설에 대한 더 깊은 연구가 필요할 것이라고 지적했다.

이번 발표내용은 2012년 3월 국제심포지엄 “오카 마사오-일본 민족학의 선구자”와 2012년도에 열렸던 2번의 연구회에서 발표된 연구논문과 함께 보고서로 정리해 출판할 예정이다.

【기사집필：요셉 클라이너

(호세이대학교 국제일본학연구소 겸담 연구소원·국제전략기구특별교수)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在ー東アジアから」

第 5 回東アジア文化研究会

格差社会と「下からのナショナリズム」

ーナショナリズム論からの日中欧の比較考察ー

- 報告者：安井 裕司（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員、早稲田大学エクステンションセンター講師）
- 日 時：2012 年 8 月 1 日（水）18：30 ～ 20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

世界はグローバル化によって「フラット化」（T. フリードマン）しているとされる。現実には、先進国から途上国への直接、間接投資の増加によって資本が移動し、国家単位に考察すれば南北格差は縮小していると言える。しかし、同時に、グローバル化は大都市を中心にクリエイティブな仕事に従事するエリート層「クリエイティブクラス」（R. フロリダ）を生み出しており、大都市の成功者と非成功者、一国内の大都市と地方の「格差」が拡大している。

フロリダの試算によれば、「クリエイティブクラス」に属する人々は、全世界で 1 億から 1 億 5 千万人に限定され、約 70 億人の世界人口においては少数となっている。大多数の人々はグローバル化の中で成功を収めることができず、世界の「フラット化」の結果として、各国の国内が「格差化」しているのである。

社会がグローバル化によって「格差化」されると、グローバル化の中で「勝てない人々」がグローバル化に対峙する急進的な「下からのナショナリズム」に引き寄せられていく、もしくは彼ら自身がナショナリズムの原動力となる可能性が高まる。

上記の現象を、ナショナリズム論における T. ネアン、M. ヘクター等の学説を応用して考察すれば、産業化（グローバル化）における不均衡発展に基づく各国の「格差」は政治的には「下からのナショナリズム」を誘発する内的条件となり、国際関係上の外的要因が加わることで政治現象となり得る。

しかしながら、現実には、大きな不均衡発展に伴って「格差化」している全ての地域において「下からのナショナリズム」が生み出されておらず、「格差」の大きさは、「下からのナショナリズム」勃興の絶対条件にはなっていない。

むしろ、ここでは「格差」の大小よりも、その「可視化」に着眼する必要がある。「フラット化」をもたらすグローバリゼーションは、ヒト、モノ、カネの拡散によって共通の価値観を世界に広め、「格差」を「可視化」しているのである。そして、政治的には、「格差」が「可視化」される中、グローバル市場、もしくはグローバル市場に大きく影響される国内市場において「勝てない人々」によって、「下からのナショナリズム」が起こされていく、もしくは彼らが急進的な民族主義（＋社会主義）を掲げる政党に共鳴していく状況が生じる。

「下からのナショナリズム」発生条件を纏めると以下となる。

- (1) グローバル化の進展
- (2) 世界の「フラット化」と「クリエイティブクラス」の登場
- (3) 国内の格差化
- (4) 非「クリエイティブクラス」に格差が可視化する
- (5) 国際問題、対外問題の発生

本報告ではケーススタディとして、2012 年 4 月のフランス大統領選挙（第一回投票）、2012 年 5 月のギリシャ総選挙、2010 年 9 月の中国の尖閣諸島問題に焦点を当てた。

フランスでは「格差化」が進み、その「格差」が「可視化」される中で、大統領選挙が行われ、「格差」の外的要因として EU、グローバル化を批判する右翼「国民戦線」と左翼「左翼戦線」が、得票率にして合わせて 29%、約 1,040 万票を獲得した。両党は互いに反目しながらも、支持者の社会階層は重なり、政策は共に民族主義的であり、また社会主義的であった。極左、極右と大別されながら、そこには共通項として急進的な「下からのナショナリズム」を見出すことができる。

財政赤字解消のために、厳しい緊縮財政を強いているギリシャにおいても、5 月の総選挙ではグローバル化に対峙する極左、極右勢力が EU や IMF 等の緊縮財政政策を批判する形で「下からのナショナリズム」として民族主義と社会主義を併せ持って台頭した。

また、2010 年 9 月、尖閣諸島を巡る日中両国間の対立を理解する上でも「格差」は見逃せないファクターとなっている。中国側での反日運動は主に相対的貧困地域である内陸部で発生していたが、同時期、比較的豊かな上海や北京では上海万博やフィギュアスケート GS 中国杯が平和裏に開催されていた。内陸部の諸都市は発展著しい中国において北京や沿岸部との「格差」が著しく、またその「格差」が農村部よりも「可視化」し易い地域であったと言える。故に、尖閣諸島問題（外的要因）をきっかけに「下からのナショナリズム」が顕在化したと仮定することができる。

最後に、尖閣諸島問題を日本側から分析すれば、2010 年における相対的貧困率は過去最高の 16%（厚生労働省）、生活保護受給者も 2012 年 3 月において過去最多の 210 万 8,096 人、受給世帯数も 152 万 8,381 世帯（厚生労働省）と、日本も着実に格差社会への道を歩んでいる。しかし、2011 年 10 月ー 11 月に実施された『国民生活に関する世論調査』（内閣府）に

よれば、全体として 65.6%が現在の生活に満足しており、20 代女性の満足度は 80.7%に至る。つまり、「格差」の「可視化」は十分にはなされておらず、故に、尖閣諸島等の領土問題（外的要因）はあるが、他国と比較すれば現段階では日本において「下からのナショナリズム」が大衆レベルにおいて発生しているとは言えない。

このように「下からのナショナリズム」の発生状況

は様々であるが、グローバル化の進展によって形成される「格差」とその「可視化」が、今後とも各国において注目すべきであることは否定されないであろう。

【記事執筆：安井 裕司

（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員・
早稲田大学エクステンションセンター講師）】



安井 裕司 氏（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員、
早稲田大学エクステンションセンター講師）



講義の様子



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided)
Project for Private Universities (2010-2014)
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in
East Asia”

5th East Asian Culture Research Meeting

Unequal Income Society and “Bottom-up Nationalism”: a Comparative Study of Japan, China and Europe from the Theory of Nationalism

Speaker: YASUI Hiroshi (Visiting Academic Researcher,
Hosei University Research Center for International
Japanese Studies; Lecturer, Waseda Uni-
versity Extension Center)

Date: Wednesday, 1 August 2012, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, Boissonade
Tower 25th Floor, Conference Room B

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Re-
search Center for International Japanese Studies)

Due to globalisation, there has been a shrink in the
world's north-south divide, and with this flattening out has
emerged the “creative class”: an elite class mainly in cities
who are employed in creative work.

However, this elite class is low in numbers, and the
large majority of people caught up in globalization do not
reap its rewards. Every country is facing a trend of domes-
tic income gap to some extent. Politically, this inequality
has become an internal cause of rapid “bottom-up nation-
alism”, and, with international relations as external cause,
a political phenomenon.

On the theory of nationalism, T. Nairn and others
have linked the sudden rise of nationalism to the unequal
development in industrialisation; however, it is not the
case that rapid nationalism emerges relative to the size of
the income gap. As the world flattens out, of importance is
how an income gap is made possible, regardless of its size.

As examples, we focussed on the presidential elec-
tions in France of April 2012, the general elections in
Greece in May 2012, and the internal response of Japan
and China concerning the Senkaku Islands since Sep-
tember 2010, and conducted a comparative study of the
income gap trend and “bottom-up nationalism”.

Report by: YASUI Hiroshi (Visiting Academic Researcher,
Hosei University Research Center for International
Japanese Studies; Lecturer, Waseda University Extension
Center)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③“‘日本认识’의
현황——以东亚为中心”

第 5 次东亚文化研究会

两极分化社会和“自下而上的国家主义” ——从国家主义论出发的日中欧比较考察

报告者: 安井 裕司(法政大学国际日本学研究所客员
学术研究员、早稻田大学扩展中心讲师)

日 期: 2012년 8월 1일(星期三) 18:30-20:30

会 场: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会
议室

主 持: 王 敏(法政大学国际日本学研究所教授)

随着全球化的不断深入, 南北差距正在逐步缩小,
但以大都市为中心从事创造性工作的精英阶层只是小部
分, 大多数人并没有能够在全球化的过程中获得成功,

各国多少都面临着国内的两极分化问题。两级分化在政治
上成为激进的“自下而上的国家主义”的内因, 再加上国
际关系上的外因, 就会引起一系列的政治现象。

T. 里昂等的国家主义论将国家主义的兴起和产业化的
不均衡发展结合了起来, 但不均衡发展所引起的两极分化
的程度与激进的国家主义的产生并不成正比。在平坦化的
当今世界, 比起两极分化本身, 如何将大大小小的两极分
化进行可视化的问题更为重要

具体来说, 以2012년 4月的法国总统大选、5月的希
腊大选, 以及2010년 9月以后围绕钓鱼岛冲突中日两国国
内的反应为中心, 对两极分化和“自下而上的国家主义”
间的关系进行了比较考察。

【执笔者: 安井 裕司

(法政大学国际日本学研究所客员学术研究员、早稻田大学扩展中心讲师)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년
~ 2014년)

국제일본학 연구방법에 입각한<일본의식>의 재검토-〈일본의
식>의 과거·현재·미래

연구③<일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제5회 동아시아 문화 연구회

격차 사회와 ‘아래로부터의 내셔널리즘’ —— 내셔널리즘론에서 일본 중국 유럽의 비교 고찰 ——

보고자: 야스이 히로시(安井 裕司, 호세이대학교 국제
일본학연구소 객원학술연구원, 와세다대학교
익스텐션센터 강사)

일 시: 2012년 8월 1일(수) 18:30 ~ 20:30

장 소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나
드 타워 25층 B회의실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소
교수)

세계는 글로벌화에 의해 남북 격차가 축소되고 플랫
화되면서, 동시에 대도시를 중심으로 창의적인 업무에

종사하는 엘리트 계층 ‘크리에이티브 클래스’가 형성되
고 있다.

그러나 이러한 엘리트층은 소수에 불과하며 대다수
사람은 글로벌화 속에서 성공을 거두지 못하고 있어, 각
국은 큰 작은 자국 내의 격차 문제에 직면해 있다. 그
리고 각국의 격차는, 정치적으로는 급진적인 ‘아래로부
터의 내셔널리즘’을 유발하는 내적 요인이 되고, 국제관
계상 외부적 요인이 추가됨으로써 정치 현상이 된다.

내셔널리즘론에 있어서는 T. 네안 등이 내셔널리즘의
발흥을 산업화의 불균형 발전과 연결시켜 왔지만, 글로
벌화의 불균형 발전으로 인한 격차 크기와 비례하는 급
진적인 내셔널리즘이 발생하고 있는 것은 아니다. 플랫
화하고 있는 세계에는, 격차 그 자체보다 규모와 관계없
이 격차가 어떻게 가시화되는가가 더 중요하다.

구체적인 예로, 2012년 4월 프랑스 대통령 선거, 5월
그리스 총선, 2010년 9월 이후 센카쿠 열도를 둘러싼
일·중 양국의 반응에 초점을 맞춰, 격차화와 ‘아래로부
터의 내셔널리즘’의 관계를 비교 고찰했다.

【기사집필: 야스이 히로시

(호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원, 와세다대학교 익스텐션센터 강사)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在ー東アジアから」

第 6 回東アジア文化研究会

「日中国交正常化 40 年」を超えて ー石橋湛山の対中国交正常化への取り組みー

- 報告者：鈴木 裕輔（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）
- 日 時：2012 年 9 月 26 日（水）18:30～20:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

去る 2012 年 9 月 26 日（水）、18 時 30 分から 20 時 30 分にかけて、法政大学国際日本学研究所セミナー室において、「国際日本学の方法に基づく〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」アプローチ③「〈日本意識〉の現在ー東アジアから」の 2012 年度第 6 回東アジア文化研究会が開催された。今回、「日中国交正常化 40 年」を超えてー石橋湛山の対中国交正常化への取り組み」と題して報告を行った。報告の概要は以下の通りである。

1972 年 9 月 29 日、「日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明」、いわゆる日中共同声明が出され、日本と中国の国交が回復した。確かに、日中国交正常化は、1971 年に米国のリチャード・ニクソン大統領による「電撃的」と評された中国訪問を直接の契機とする。しかし、外交における「ニクソン・ショック」を受けてただちに日中国交正常化が実現したわけではなく、それ以前から日本と中国の関係の改善を目指す様々な取り組みがなされていた。今回の報告では、日中の国交正常化に取り組んだ一人である石橋湛山（1884-1973）の事績を確認、検討した。

日本と中国の関係は、1949 年に民間貿易が再開して以来、四次にわたる日中民間貿易協定の調印などを経て、漸進的な改善を示した。その過程の中で、1954 年 12 月に発足した鳩山一郎内閣は「日米協調関係の維持」と「中ソ国との関係改善を積極的に推進」という外交上の基本方針を打ち出した。鳩山内閣の通産相であった石橋は、日本の産業の振興のために日中貿易の活用を企図していた。そして、1956 年に自らを首班とする新内閣が発足すると、「安保条約の改定は日本が自衛態勢を確立すると言う義務を果たせるようになってから取り上げるべき」とし、「中国との国交回復はきわめて難しく、当面の課題にはならないだろう」と日米・日中の関係の改善の限界を自覚しながら、「アメリカと提携するが向米一辺倒にはならない」、「今後も中国との経済的関係を深めていく」という「自主外交の推進」を標榜した。石橋の登場は、中国側に日中関係の改善を期待させ、米国側に不安を抱かせるものであった。しかしながら、石橋の健康状態の悪化により、内閣は 1957 年 2 月に総辞職したため、石橋が掲げた外交方針が実現されることはなかった。

一方、石橋の後継として組閣した岸信介は、鳩山、石橋内閣で冷却化した日米関係の改善と日米安全保障条約の改定を外交上の最優先課題とし、対中政策と

しては「政経分離」と「中国情勢の静観」を基本とした。日中関係に進展が見られないことを懸念した石橋は、1959 年 9 月に私人として中国を訪問し、9 月 20 日には周恩来との間で「石橋・周共同声明」を調印した。共同声明は中国側の主張する政経不可分の原則が明記されていたため、日本政府や与党自民党の中で問題視された。だが、声明には、「日中の協同」、「経済、政治、文化の交流の促進」、「日中両国が他国と結んでいる従来の関係の維持」という「石橋三原則」が反映されており、日本の立場を中国に認めさせたという点で、石橋の訪中は実質的には成功であった。

1960 年 7 月に岸信介に代わって池田勇人が組閣すると、池田は岸内閣の対中政策の見直しと日中断交からの回復を志向した。実際、1962 年には元通産相の高碓達之助が訪中し、中国人民外交学会副主席の廖承志との間で「日中総合貿易に関する覚書」を調印し、1972 年の日中国交正常化まで続く半官半民の覚書に基づく貿易、いわゆる LT 貿易が始まるなど、日中関係は再び改善の兆しを見せるようになった。そして、1963 年 9 月、日本工業展覧会総裁であった石橋は、北京で行われる展覧会のために二度目の中国訪問を行った。石橋は再度周恩来と会談し、周は「中国側も国交回復に前向きである」、「当時国際問題化していた中ソの対立は両国の関係に決定的な影響を与えない」、「池田内閣の対中政策が好ましく、日中友好を促進したい」と発言した。また、周は石橋が提唱する「日中米ソ四国同盟」構想についても賛意を示すなど、日中関係の改善に向けた前向きな姿勢を示し、会談は一定の成果を挙げた。

しかし、中ソが国交断絶の状態になり、米国がベトナム戦争に介入したことで米中関係も悪化するとともに、1966 年に文化大革命が始まったことで中国国内の情勢が混乱し、1964 年に発足した佐藤栄作内閣が親米・親台路線に転換したこともあり、石橋の「日中米ソ平和同盟」構想は頓挫し、日中国交正常化も背景化することになった。

こうした石橋の取り組みは、政治的には対米自主独立路線の模索、経済的には日本の産業の振興のために日中貿易の活用、理念的にはイデオロギーという分断的な力の警戒という特徴を持っていた。また、経済関係の改善こそ政治関係の発展に役立つという意味での「政経不可分」を唱え、「政治関係の改善こそ経済関係の発展に役立つ」という中国側とは異なる「政経不可分論」を展開したこと、対中交渉が失敗した場合の責任を自ら引き受けることを明言したこと、

党派を超えた「国民運動」としての「対中国交正常化」を目指したこと、政治家主導による交渉を行ったことなども、石橋の対中交渉の特色であった。

以上のような分析と考察によって、日中国交正常化以前の時期における石橋湛山の対中国交正常化に向けた取り組みの特徴が示されるとともに、参加者との質疑応答によって、石橋の取り組みを検討するた

めの重要な視点が得られた。そして、東アジア、あるいは国際関係の中の日中関係を絶えず念頭に置いた石橋の取り組みは、日本と中国の相互補完的な関係を考える上でも顧慮に値するものと考えられた。

【記事執筆：鈴木 裕輔

（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）】



鈴木 裕輔 氏（法政大学国際日本学研究所客員学術研究員）



司会：王 敏 氏（法政大学国際日本学研究所教授）

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided)
Project for Private Universities (2010-2014)
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in
East Asia”

6th East Asian Culture Research Meeting

Ishibashi Tanzan and His Efforts toward the Normalization of Diplomatic Relations between Japan and China

Speaker: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Date: Wednesday, 26 September 2012, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2nd Floor, Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

This presentation focussed on former prime minister, Ishibashi Tanzan (1884-1973)'s efforts towards normalization of diplomatic relations between Japan and China that took place before the Japan-China joint statement of 1972, confirming and examining his achievements. We consid-

ered Ishibashi's involvement from political, economic and ideological aspects: 1) He advocated “the inseparability of politics and economics” that meant it was the improvement of economic relations that facilitated the development of political relations, and set out his “theory of political economic inseparability” in contrast to the “improvements in political relations facilitating economic relations” of the Chinese side. 2) He declared that he would take personal responsibility if negotiations with China failed. 3) He aimed for a “national movement” towards “normalization of diplomatic relations with China” that transcended political parties. 4) He held politician-led talks. Thus, Ishibashi Tanzan made efforts to normalise diplomatic relations with China, and the question and answer session with participants provided important viewpoints from which to explore Ishibashi's involvement. Ishibashi's efforts regarding Japan-China relations were viewed as a part of East Asian and international relations. It was also felt that his efforts were worthy of attention in considering the mutually complementary relationship of Japan and China.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘日本认识’的现状——以东亚为中心”

第6次东亚文化研究会

超越“中日邦交正常化 40 周年” —石桥湛山对华邦交正常化的致力解决—

报告者: 铃村 裕辅 (法政大学国际日本学研究所客座
学术研究员)

日 期: 2012年9月26日 (星期三) 18:30-20:30

会 场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研
究所讲习室

主 持: 王 敏 (法政大学国际日本学研究所教授)

此次发表以1972年中日共同声明出台之前, 致力于中日关系正常化的石桥湛山 (1884-1973) 为对象, 对他的

事迹进行确认和检讨, 其特点可以从政治、经济、理念的侧面来进行考察。(1) 提倡经济关系改善有助于政治关系改善的“政经不可分”, 开创了与中国方面“政治关系改善有助于经济关系改善”不同的“政经不可分论”。(2) 明确表明如果对华交涉失败的话责任由自己来承担。(3) 以作为超党派“国民运动”的“对中国交正常化”为目标。(4) 实行政治家主导的交涉。综上所述, 此次报告揭示了1950年到1960年之间石桥湛山致力解决对华邦交正常化的特点, 通过和与会者的提问答疑找到了检讨其过程的重要视点。此外, 将中日关系作为东亚或者国际关系的一部分来思考的石桥的做法, 于中日相互补充的关系层面上也是值得考虑的。

【执笔者: 铃村 裕辅

(法政大学国际日本学研究所客员学术研究员)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)

국제일본학 연구방법에 입각한<일본의식>의 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래

연구③ <일본의식>의 현재—동아시아를 기점으로

제6회 동아시아 문화 연구회

‘일·중 국교 정상화 40년’을 넘어서 —이시바시 단잔의 對중국 국교정상화 노력—

보고자: 스즈무라 유스케(鈴村 裕輔, 호세이대학교 국
제일본학연구소 객원학술연구원)

일 시: 2012년 9월 26일(수) 18:30 ~ 20:30

회 장: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 58년관
2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소
교수)

이번 발표에서는 1972년 일·중 공동성명이 발표되기 전, 일본과 중국의 국교정상화를 위해 노력한 이시바시 단잔(石橋湛山, 1884-1973) 전 총리의 업적을 확인하고 검토했다.

이시바시가 추진한 일들의 특징을 정치적, 경제적, 이념적 측면에서 고찰한 결과, (1) 경제관계 개선이야말로 정치관계 발전에 도움이 된다는 의미에서 ‘정경불가분’을 주장해, ‘정치관계 개선이야말로 경제관계 발전에 도움이 된다’고 한 중국 측과는 다른 ‘정경불가분론’을 전개한 점 (2) 중국과의 교섭이 실패할 경우 스스로 책임을 지겠다고 표명한 점 (3) 당파를 초월한 ‘국민운동’으로서 ‘對중국 국교정상화’를 목표로 한 점 (4) 정치인 주도로 교섭을 벌였다는 점 등이 나타났다.

위와 같이, 이번 보고를 통해 1950년대부터 1960년대에 이시바시 단잔의 對중국 국교정상화를 향한 노력에 어떤 특징이 있는지 알 수 있었으며, 참가자와의 질의응답을 통해 이러한 이시바시의 노력을 검토하는 데 있어 중요한 시점을 얻어낼 수 있었다. 그리고 일·중관계를 동아시아 또는 국제관계의 일부로 생각한 이시바시의 노력은, 일본과 중국이 상호보완적인 관계에 있다는 점을 보더라도 고려해볼 만한 가치가 있는 것으로 생각된다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

第 7 回東アジア文化研究会

日本最大の経済パートナー・中国経済をどう見る

- 報告者：西園寺 一晃（工学院大学孔子学院学院長）
- 日 時：2012 年 10 月 31 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

現在の中国経済を考える場合のキーワードは「転型」だ。転型とは、経済構造の転換、構造改革のことで、中国経済が今後安定的、持続的発展をする場合不可欠のものとなる。

中国経済はこのところ失速気味だ。この「失速」について見方の違いはある。正に失速後退しているとするのか、それとも高度成長期は過ぎ、安定成長期に入ったと見るかだ。

確かに数字で見ると、中国経済は下降線をたどっている。2011 年第 1 四半期から今年の第 3 四半期までの成長率を見ると 9.7%→9.5%→9.1%→8.9%→8.2%→7.6%→7.4%となっている。原因は二つ。(1) 主要な貿易（特に輸出）相手国である EU 経済の深刻化、米日経済の低迷。(2) 中国経済（成長）の構造的欠陥ー外需型成長。

中国経済の成長過程を見ると、明らかに 2 つの段階がある。1979 年の改革・開放のスタートから 1990 年末まで、成長をけん引したのは (1) 爆発した購買力（内需）。(2) 積極的な固定資産投資（特に沿海ベルト地帯に対する）。(3) 成功した輸出振興。(4) 外資導入の四つだ。この内最大の要素は内需で、この段階の成長は基本的に「内需型成長」だった。ところが 2000 年以降は状況が変わった。内需が相対的に落ち込み、輸出、外資、固定資産投資が成長をけん引した。つまり成長構造が「外需型成長」に変化した。特に輸出は大健闘し、成長けん引の最大の要素となった。その結果、貿易黒字は雪だるまのように増え、今や外貨準備高 3 兆 2000 万ドルで、第 2 位の日本の 1 兆 4000 万ドルを大きく上回っている。因みに GDP の中に占める内需の割合は、米国 70%、日本 60%、中国は 40%だ。

外需型成長は当然世界経済の浮き沈みの影響を受ける。特に成長をけん引する輸出は、主たる輸出相手国・地域の経済情勢の影響をもろに受ける。中国の主な輸出相手国・地域は EU、米国、アセアン、日本だ。この内 EU、米国、日本の経済が落ち込んでいる状況の中で、中国の輸出が落ち込み、それが成長にマイナス影響を与えるのは当然だ。

中国経済の構造的欠陥、アキレス腱も見えてきた。(1) 格差（個人、企業、地域）は拡大し、現在都市住民の可処分所得と農村住民の純収入は約 3.3 対 1.0、上海と貴州の 1 人当たりの GDP 格差は十数倍になる。(2) 成長は環境破壊を招き、それは限界に達している。

(3) エネルギー問題（前近代的な一次エネルギー構造、エネルギー不足、エネルギー効率の悪さ）。(4) 少子高齢化に伴う諸問題の顕在化。(5) 社会主義市場経済の中で深刻化する権力者の腐敗問題。

胡錦濤指導部は「調和のとれた社会」の建設を打ち出した。この中心は格差問題の緩和、解決であり、成長第一主義からの脱却である。具体的には、産業構造を労働集約型からハイテクなどの高付加価値産業・サービス業への転換、輸出入構造の転換、輸出先の分散化であり、内陸部農村地帯の都市化である。グリーン革命（脱環境破壊）も進めなければならない。省エネも不可欠だ。さらにすでに少子高齢化社会に突入した中国は、今後経験したことのない様々な問題に直面するだろう。中国の優位性もある。それは豊富な外貨準備であり、豊富な労働力（農村の過剰人口は 2 億人とも言われる）の存在であり、まだ十分掘り起こされていない内陸部の潜在的内需だ。そして、13 億人のマーケットは、「チャイナ・リスク」が問題になろうが、やはり各国にとって大きな魅力には違いない。

今年前半に発表された HSBC のレポートによると、21 世紀半ば頃の世界各国の GDP を、中国 25 兆ドル、米国 22 兆ドル、インド 8 兆ドル、日本 6 兆ドルと予測している。これは明らかに「二強時代」だ。

紆余曲折はあるだろうが、中国が比較的順調に発展を続けるには、幾つかの問題をクリアしなければならない。一つには、産業構造転換の実現。二つ目は、新たな消費分野の創出。環境ビジネスと共に最近脚光を浴びているのは「高齢者ビジネス」である。3 つ目は内陸部農村の都市化のスピードアップ。実際にはかなり進展していて、1970 年代末の都市住民と農村住民の人口比は 20%対 80%だったが、2011 年末には 51%対 49%と逆転している。しかし、これは危険な要素を含んでいる。それは、農村の都市化→耕地面積の縮小は、食糧問題を引き起こす可能性があるからだ。

日中両国は領土問題で冷戦状態にあるが、両国経済はすでに切っても切れない相互依存関係にある。また世界第二と第三の経済大国が相争い、経済関係が崩れれば、アジア経済と世界経済に及ぼす悪影響は計り知れない。日中は経済分野でも、アジアと世界の平和と繁栄に貢献しなければならない。

【記事執筆：西園寺 一晃（工学院大学孔子学院学院長）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

7th East Asian Culture Research Meeting

How to Understand the Chinese Economy: China as Japan's Leading Economic Partner

Speaker: SAIONJI Kazuteru (Director, Confucius Institute at Kogakuin University)

Date: Wednesday, 31 October 2012, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, Boissonnade Tower 25th Floor, Conference Room B

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The period of high-speed growth of the Chinese economy is over. It is said that “transformation” (change in

economic structure, structural reform) is necessary in order to continue with steady growth from now on. The cause of economic slowdown is the economic crisis and sluggishness in the EU, Japan and America, but there is also a problem in the structure of the Chinese economy based on growth from foreign demand. It needs to return its growth from foreign demand to domestic demand, but in order to do this it is essential to switch the mainly labour-intensive industry and export structure to a high-tech and high value-added type. Furthermore, to uncover domestic demand, there must be plans for urbanisation of inland villages to raise the income of farmers. In cities we need to see the creation of new consumer fields: gathering much attention is “elderly business”. Other problems proving an Achilles heel to Chinese economic development are that of income gap, energy, and the environment. Hu Jintao's leadership changed direction from the growth-first policy of the Jiang Zemin era to “harmonious and steady growth”. It is the duty of the new “Xi Jinping regime” to see it through.

Report by: SAIONJI Kazuteru (Director, Confucius Institute at Kogakuin University)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——以东亚地区为中心”

第7次东亚文化研究会

如何看待日本最大的经济伙伴・中国经济

报告者：西园寺 一晃（工学院大学孔子学院院长）

日期：2012年10月31日（星期三）18:30-20:30

会场：法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室

主持：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

中国经济的高速成长期已经结束。为了接下来的安定成长的持续，转型（经济构造的转换、构造改革）被认为是必要的。经济退后的原因跟欧盟、日美的经济危机

和低迷有关，外需型成长的中国经济构造也是有问题的。将这种外需型成长必须还原为内需型成长，因而将劳动密集型产业和出口构造转换为高科技的高附加值型是必不可缺的。而且，为了发掘内需，内陆地区农村的都市化以及农民收入的增加都是当务之急。在都市地区，开辟新的消费领域是很有必要的，其中值得关注的是“高龄者产业”。两级分化问题、能源问题、环境问题等正在成为中国经济发展的关键所在。以胡锦涛为首的领导班子将江泽民时代的成长第一主义转化为了“调和性安定成长”，而将此进行更深一步的推进就是新的“习近平体制”的任务了。

【执笔者：西园寺 一晃（工学院大学孔子学院院长）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한<일본의식>의 재검토-〈일본의식〉의 과거·현재·미래

연구③<일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제7회 동아시아 문화 연구회

일본 최대의 경제 파트너, 중국경제를 어떻게 볼 것인가

보고자: 사이온지 가즈테루(西園寺 一晃, 고가쿠인(工学院)대학교 공자(孔子)학원 학원장)

일 시: 2012년 10월 31일(수) 18:30 ~ 20:30

장 소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B회의실

사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 교수)

중국경제의 고도성장기는 끝났다. 앞으로 안정적인 성장을 지속하기 위해서는 ‘전형’(경제구조의 전환, 구조개혁)이 필요하다고 한다. 경제침체의 원인은 EU, 일본과 미국의 경제위기와 침체이지만, 외수형 성장인 중국경제 구조에도 문제가 있다. 이 외수형 성장을 내수형 성장으로 되돌릴 필요가 있는데, 그러기 위해서는 노동집약적 산업 중심 및 수출구조를 첨단기술 등 고부가가치형으로 전환하는 것이 필수적이다.

또한, 내수를 활성화하기 위해서는 내륙지역에 있는 농촌의 도시화를 도모하고 농민의 소득을 향상시켜야 한다. 도시에서는 새로운 소비 분야의 창출이 필요한데,

주목받고 있는 것은 ‘실버 비즈니스’다. 그 외, 중국경제 발전의 아킬레스건인 격차 문제, 에너지 문제, 환경 문제 등이 있다.

후진타오 지도부는 장쩌민 시대의 성장 제일주의에서 ‘조화로운 안정성장’으로 방향을 전환했다. 이를 추진하는 것은 새로운 ‘시진핑 체제’의 임무다.

【기사집필: 사이온지 가즈테루

(고가쿠인대학교 공자학원 학원장)】



西園寺 一晃氏 (工学院大学孔子学院院长)

第 8 回東アジア文化研究会

言語接触と文化交渉学

ー中国言語学および翻訳論の立場から

- 報告者：内田 慶市（関西大学外国語学部教授）
- 日 時：2012 年 11 月 7 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

平成 19 年度の GCOE プログラムに採択された「東アジア文化交渉学」は、これまでの 1 対 1 という文化交流研究の方法に対して新しく、国家や民族という分析単位を超えて、東アジアという一定のまとまりを持つ文化複合体を想定し、その内部での文化生成、伝播、接触、変容に注目しつつ、トータルな文化交渉のあり方を複眼的で総合的な見地から解明しようとしたものである。

別の言い方をすれば、研究分野としては、言語、思想、歴史、哲学等々の既成の分野を超えた、むしろ脱領域、跨領域を目指すものであり、研究対象となる地域も中国、朝鮮、日本、ベトナム、さらには欧米までも視座に据えた脱地域的なものとなっている。

また、こうした新しい学問体系を確立するに際して、私たちが採用した方法論の一つは「周縁からのアプローチ」という方法である。日本語では「灯台もと暗し」、中国語では「当局者迷、傍観者清」と言われるが、たとえば、これまで中国言語学の研究分野においては、中国の資料、中国語そのものを研究対象とするのが一般的であったのに対し、わたしたちは、外国人の目から見て初めて明らかになる中国語の本質というものもあるという考え方から、中国以外、つまり域外資料に基づく中国語研究に着目してきた。その結果、特に欧米の宣教師たちによる中国語研究の質の高さ、科学性、体系性が認められ、それは中国言語学研究に極めて有効であるということが明らかにされつつある。

筆者はこうした立場に立って、この 10 数年来、中国語の本質を解明することを最終目的としながら、その過程で、文化交渉と言語接触のあり方、言語観、翻訳観の問題を取り上げて研究してきている。今回の講演は、特に、「イソップの東漸（東アジアへの伝播）」を中心に、こうした文化交渉と言語接触における「ことば」の翻訳の問題を論じたものである。

文化交渉の具体的な表れとしては、東西においては大きく 3 つの現象がある。一つは「西域からの伝来」、一つは「仏教伝来に関わるもの」。そして、もう一つが 16 世紀後半からの「西学東漸」という現象である。ところで、こうした文化交渉においては、その媒体としては「もの」「ことば」「ひと」が大きな要素となるが、とりわけ「ことば」は最も重要なものである。なぜなら、「新しい事物」がもたらされれば必ずその「名称」つまり「ことば」が必要になってくるからである。ここに、実は「翻訳」という問題が生じてくる。

では「翻訳」とは何かということであるが、キリ

スト伝来により「God」という概念がもたらされた時、それを如何に名付けるかである。たとえば、中国ではこれを「神」と訳し、あるいは「上帝」と訳した。こうした現象を見ると、翻訳とは簡単に言えば「彼の国のことば」を「此の国のことば」に置き換えることということになる。「Dog」＝「犬」＝「狗」も同様である。

しかしながら、ことはそう簡単ではない。まず、「Dog」＝「犬」＝「狗」に「等しい」ものは何かということが問題になる。形や音が同じでないことは明らかである。「翻訳における等価とは何か」ということは実はそう簡単な問題ではないのである。

日本の鉄道では「黄色い線の内側でお待ち下さい」というアナウンスがよく聞かれるが、これを中国語に「直訳」つまり「内側」と訳したら、実は極めて危険な状況となる。「昨日は何時まで起きていましたか」は中国語では決してそのままでは表現できずに「何時に寝ましたか」としか言えないのだ。新幹線の車内放送でも「無線 LAN によるインターネット接続サービスのご利用は新大阪までとなっております」と日本語では表現されるが、英語だと「Wireless internet connection service will not be available after leaving Shin-Osaka.」となるのだ。

このような例は沢山あり、「右と左」でも中国と他の国とは異なる場合があったりするのである。

つまり、これは結論的に言えば、「言葉の背景にあるもの」つまり「文化」の問題に帰着するのである。すなわち、「ことばの翻訳」とは「文化の翻訳」に他ならないということである。

ところで、西学東漸によりヨーロッパから伝来したものには色んなものがある。キリスト教関係のバイブルやイエス像、世界地図、ピアノ等、様々であるが、その中に、「イソップ物語」も含まれていた。

このイソップ物語は、明末から宣教師によって中国語に訳されているが、このイソップ漢訳の中で量的にも質的にも他を凌駕するのがロバート・トームによるイソップ『意拾喻言』（1840）であった。これはその後、吉田松陰によっても紹介されたり、日本でも翻刻がされているが、このイソップの最大の特徴はそれが全く中国文化に同化したイソップであるということである。話の枕は全く中国風にアレンジされ、モラルも中国の格言、故事成語を用いるのだ。当時のヨーロッパ人の言葉を借りれば「中国の衣裳を身に纏ったイソップ」である。これは何に起因するのか。おそらくは彼の翻訳観であり、それは「相

手方に身を置く」という考え方、「相手の文化を尊重する」という立場である。そして、それはそれ以前のイエズス会の布教方法である適応主義（その典型としてはその聖像画の中国化が挙げられる）やロバート・モリソンの翻訳観（『英華字典』の序参照）と相通じるものであるというのが私の考えである。

「言は意を尽くさず」と言うように、ことばの交流には自ずと限界があるものである。では、人は結局

は分かり合えないものなのか。答えは「ノー」である。「言は意を尽くさず」を認めることから始めるべきであり、それは「みんなちがって、みんないい」（金子みすず）ということに他ならないというのが私の考えである。

【記事執筆：内田 慶市（関西大学外国語学部教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

8th East Asian Culture Research Meeting

Linguistic Contact and Cultural Interaction Studies: From the Viewpoint of Chinese Linguistics and Translation Studies

Speaker: UCHIDA Keiichi (Professor, Kansai University Faculty of Foreign Languages)

Date: Wednesday, 7 November 2012, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus '58 Building
2F Hosei University Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Our present aim is to establish a new academic framework called “cultural interaction studies”, based on the success of the 2007 MEXT Global COE project, “East Asian cultural interaction studies: forming a position in education and research”. I focus on linguistic contact from the perspective of Chinese linguistics, researching East-West linguistic/cultural contact and view of translation

etc. determined by missionaries in the modern period, as well as researching Chinese using a “peripheral approach”. This is a methodology based on cultural interaction studies that allows the essence of Chinese to be revealed through observation from the outside (=periphery) rather than from a China (=central) standpoint. On this occasion we centred on the problems of translating culture in East-West interaction: the “orientalization of Aesop’s Fables”. Linguistic translation amounts to cultural translation: the Jesuit missionary method seen in Robert Thom’s Chinese-translation Aesop, and the fundamental standpoint expressed in Robert Morrison’s English-Chinese dictionary, Bible translation etc. Accordingly, we asked, what is the learning of a language?, and addressed the issue of the relationship between the cultural differences behind language and linguistic expression. We then asked, what is language?: I believe language is one means of human expression, along with paintings, photographs, film etc., and that it has a progressive structure: object-acknowledgement-expression. Language also possesses two differing types of expression: subjective and objective, and we also mentioned how this corresponds with the Chinese theory of truth and falsehood, and furthermore, with the thinking behind the European “Grammaire de Port-Royal”.

Report by: UCHIDA Keiichi (Professor, Kansai University Faculty of Foreign Languages)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘対日認識’の現状——以东亚地区为中心”

第8次东亚文化研究会

语言接触和文化交涉学

—以中国语言学及翻译论为立场—

报告者：内田 庆市（関西大学外国語学部教授）

日 期：2012年11月7日（星期三）18:30-20:30

会 場：法政大学市谷校区 58年館2层 国際日本学研究所讲习室

主 持：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

当前，我们正以平成19年被文部科学省GCOE所采用的“东亚文化交涉学教育研究据点形成”的成果为基础，致力于确立新的“文化交涉学”的体系。笔者以中国语言学为立场、语言接触为焦点、近代传教士为轴心，对东西语言文化的接触情况、翻译观进行了研究，并明确了中文

研究不以中国（＝中心）而以域外（＝周围）为视点的方法论的本质。此次，围绕“伊索寓言东渐”的东西交涉中的文化翻译，诠释了语言的翻译正是文化的翻译这一命题。作为其典型事例，分析了罗伯特・汤姆的汉译伊索寓言、圣像中看到的耶稣会的传教方法、罗伯特・莫里森的英华字典和圣经翻译中的基本态度等问题。对学习语言是何事、语言的文化背景和语言表现的关系也进行了论述，具体的说，如“左和右”、“内和外”的方向观念的不同在语言上的反映等。这些归根结底都在于“语言是什么”这一语言观问题上。我的基本立场是，语言和画像、照片、电影一样是人的一种表现，有着对象—认识—表现这一过程构造，也有着主体表现和客体表现这两种不同的表现方式。这其实和中国的虚实论、欧洲的波特・罗亚文法的思维方式是一样的。

【执笔者：内田 庆市（関西大学外国語学部教授）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년~2014년)
국제일본학 연구방법에 기초한<일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래
연구③<일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로
제8회 동아시아문화연구회

언어접촉과 문화교섭학 -중국 언어학 및 번역론의 입장에서-

보고자: 우치다 게이이치(内田 慶市, 간사이(関西)대학교 외국어학부 교수)

일 시: 2012년 11월 7일(수) 18:30 ~ 20:30

장 소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 왕 민(王敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 교수)

현재 우리는 2007년 문부과학성 GCOE에 채택된 '동아시아 문화교섭학 교육 연구거점 형성'의 연구성과를 바탕으로, 새로이 '문화교섭학'이라는 학문 체계의 확립을 목표로 하고 있다. 필자는 특히 중국 언어학의 입장에서 언어접촉에 초점을 맞춰, 근대 선교사를 축으로 한 동서 언어문화 접촉의 실태, 번역관(觀) 등을 연구해왔다. 또한 문화교섭학에 근거한 방법론 중의 하나인 '주변

접근'(周縁アプローチ)을 바탕으로, 중국(=중심)에서가 아니라 중국 밖(주변지역)에서의 중국어 연구를 살펴보는 방법으로 그 본질을 밝히는 연구를 해왔다.

특히 이번에는 '이습의 동점(東漸)'을 둘러싼 동서 교섭에서의 문화 번역 문제를 중심으로, 언어 번역이란 문화 번역과 다름없으며 그 전형적인 예로서 로버트 톰의 한역(漢譯) 이습과 이콘(聖像圖)에서 볼 수 있는 예수회의 선교 방법, 로버트 모리슨의 <에이카지텐(英華字典)>과 성경 번역의 기본자세를 제시했다. 아울러, 언어를 배운다는 것의 의미 및 언어의 배경에 있는 문화 차이와 언어 표현의 관계, 구체적으로는 '왼쪽과 오른쪽', '안과 밖' 등 방향 관념의 차이가 언어에 미치는 영향 등에 대해서도 살펴봤다. 이러한 것들은 결국 '언어란 무엇인가'라는 문제와 직결되는 것이며, 바로 언어관을 문제시하는 것이기도 하다.

그러나 필자의 기본적인 입장은, 언어란 그림이나 사진, 영화 등과 같이 사람의 표현방법 중의 하나이고, '대상-인식-표현'이라는 과정 구조를 가지며, 또한 주체적 표현과 객체적 표현이라는 다른 두 가지 표현을 갖는다는 것이다. 이것은 실제로 중국 허 실론, 나아가 유럽의 포르트 로얄(Port-Royal)문법의 사고방식과 일치한다는 것에 대해서도 언급했다.

【기사집필: 우치다 게이이치 (간사이대학교 외국어학부 교수)】



内田 慶市 氏 (関西大学外国語学部教授)



発表の様子



会場の様子

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在ー東アジアから」

第 9 回東アジア文化研究会 東アジアの宗教と社会

- 報告者：橋爪 大三郎（東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻・教授）
- 日 時：2012 年 12 月 5 日（水）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

1. グローバル化時代と宗教

21 世紀のグローバル世界は、人類社会がつぎの 4 つの大きなまとまりを形成していることが明らかになった時代である。その 4 つとはすなわち、西欧キリスト教文明圏、イララム文明圏、インド文明圏、中国文明圏。それぞれ 10～20 億の人口を擁し、それぞれが固有の宗教をベースとして、特色ある人びとの集団をつくっている。こうした集団は、数千年の歴史をへて形成されたもので、人びとの思考と行動を一定のパターンにあてはめて予測可能にしている。そのパターンは文明の深い部分に根ざしており、ごく近い将来のうちに変化するとは考えられない。

グローバル世界が多面的であることは、19～20 世紀には西欧文明中心主義のせいで覆い隠されてきた。しかしその実それは、複数の異なった宗教をベースにした文明圏からなる多面的な世界である。宗教を手がかりに、それぞれの文明圏を理解すべきである。

2. 宗教と社会：東アジア以外の場合

キリスト教文明は、政教分離を特徴とする。政府と別に、信徒の集まりである教会があり、教会が政府を正当化する。宗教法がなく、政府が世俗の法律を制定する。また、市場は政府や教会と無関係に自立的にはたらき、そこに神の意志が反映するという理解（政経分離）が根付いた。この、世俗法と市場の組み合わせから、資本主義がうまれた。

イスラム教文明は、政教一致にもとづく唯一性（タウヒード）を強調する。聖典コーランにもとづくイスラム法のもと、信徒は人類大の共同体（ウンマ）を形成する。イスラム法が不変で、新たな法律を制定できないこと、主権をもつ政府を構成しにくいことが、近代化の障害となっている。

ヒンドゥー教文明は、カースト（ヴァルナ）を基軸とする超安定システム。宗教的権威は政治や経済に優位する。仏教はカーストと無関係に、誰もが最高の境地に至れるとし、仏（覚者）は神より優れているとしたが、ヒンドゥー教は仏は神の化身のひとつであるとし、仏教をヒンドゥー教に吸収した。

3. 宗教と社会：東アジアの場合

中国社会の特徴は、政治を経済や宗教よりも最優先し、有能な行政官僚を養成し政府を構成すること

を第一義とする点である。中国ではそれだけ、安全保障の優先順位が高い。

伝統的な中国社会では、皇帝をトップとする政府組織、底辺の親族組織（宗族）、の二段階となっていて、政治的リーダーへの服従（忠）、親族の年長者への服従（孝）、の二つの価値がそれぞれ中核となる。こうした儒教の価値と行動様式は、キリスト教文明のそれらと相いれないところがある。

日本社会の特徴は、集権的官僚制を好まず明確な血縁集団もないなど、中国社会と異なる。そのため、中国文明を不完全なかたちで輸入し、儒教の原則を「忠孝一如」と読み替えるなど、特異な特徴を発展させた。

4. 東アジアの近代化

西欧キリスト教文明と接触したあと、中国は近代化が遅れ、日本は近代化がすみやかだった。中国は、自身が完結した世界の中心であるという儒教的世界観に立っており、政治が優位し、経済や宗教や社会制度が自立したルールで動いていなかった。日本は、儒教的世界観から自由で、経済や宗教や社会制度がそれぞれ自立したルールで動いていた。この差異が、中国と日本の歴史を分けたと思われる。毛沢東の中国共産党は、伝統中国をつくりかえ近代化を準備する大きな役割を果たした。

5. 中国の改革開放は、東アジアをどう変えるか

鄧小平の改革開放は、社会主義＋市場経済という独創的な実験を推進した。この結果中国は、巨大な経済力をそなえたプレーヤーとして国際社会に登場した。

21 世紀の国際社会は、米中関係をひとつの基軸として動く。中国は、社会体制の違いや儒教文明の影響、国際社会での経験不足などから、アメリカに代わる覇権国として国際社会の支持を集めることはできない。中国は、国際社会への適応を進めること、日本は、国際社会と中国とのインターフェースの役割を果たすことが、課題となろう。

【記事執筆：橋爪 大三郎

（東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻・教授）】

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in East Asia”

9th East Asian Culture Research Meeting

Religion and Society in East Asia

Speaker: HASHIZUME Daisaburo (Professor, Tokyo Institute of Technology, Graduate School of Decision Science and Technology; Sociologist)
Date: Wednesday, 5 December 2012, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2nd Floor, Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The global world of the 21st century is a world of four co-existing groups: the spheres of Western European Christian civilisation, Islamic civilisation, Indian civilisation

and Chinese civilisation. Each sphere of civilisation is best understood today with religion as the key.

The characteristic of Christian civilisation is its separation of politics and religion. Islamic civilisation emphasises the union of politics and religion. Hindu civilisation is a rock-steady system based on caste (varna). In contrast to the above, Chinese society prioritises politics over economics and religion, and forms its government by nurturing capable administrative bureaucrats. These Confucian values and behavioural style differ in many respects from those of Christian civilisation. Japanese society, on the other hand, is free from the Confucian world view, and its economics, religions and social system work under rules specific to each.

In this international society of the 21st century, the theme confronting China is its progress towards compatibility in international society, and Japan, its performance in the role as interface between international society and China.

Report by: HASHIZUME Daisaburo (Professor, Tokyo Institute of Technology, Graduate School of Decision Science and Technology; Sociologist)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——东亚地区为中心”

第9次东亚文化研究会

东亚的宗教与社会

报告者: 桥爪 大三郎 (东京工业大学大学院社会理工学研究科价值系统系・教授)
日期: 2012年12月5日 (星期三) 18:30-20:30
会场: 法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室
主持: 王 敏 (法政大学国际日本学研究所教授)

21世纪的全球化世界是, 西欧的基督教文明圈、伊斯兰文明圈、印度文明圈、中国文明圈4个集团并存的世界。

目前, 应当以宗教为手段对各自的文明圈进行理解。

基督教文明的特点是政教分离, 伊斯兰教文明强调政教合一, 印度教文明是以种姓制度为轴心的超安定系统。与此相对, 中国社会的特点则是政治优先于经济和宗教, 培养有能力的行政官僚并构成政府。这种儒教的价值和行动样式, 与基督教文明在此方面有着互不相容的地方。另一方面, 日本社会则是从儒教的世界观出发, 自由地按照经济、宗教、社会等各自独立的规则在活动。

在21世纪的国际社会, 中国适应国际社会的进程、日本在中国和国际社会之间的衔接作用, 都将成为今后的课题。

【执笔者: 桥爪 大三郎

(东京工业大学大学院社会理工学研究科价值系统系・教授)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)
국제일본학 연구방법에 기초한<일본의식>의 재검토-〈일본의식>의 과거·현재·미래
연구③<일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제9회 동아시아 문화 연구회

동아시아의 종교와 사회

보고자: 하시즈메 다이사부로(橋爪 大三郎, 도쿄공업대학교 대학원 사회이공학연구과 가치 시스템 전공·교수)
일시: 2012년 12월 5일(수) 18:30 ~ 20:30
장소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실
사회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 교수)

20세기 글로벌 세계는 서구의 기독교 문명권, 이슬람 문명권, 인도 문명권, 중국 문명권 등 4개의 그룹이 병존하는 세계이다. 그 각각의 문명권은 종교를 단서로 삼아 이해해야 할 것이다.

기독교 문명은 정교분리가 특징이며, 이슬람교 문명은 정교일치를 강조한다. 힌두교 문명은 카스트를 기초로 하는 대단히 안정된 시스템이다. 이에 반해, 중국 사회는 정치를 경제와 종교보다도 우선시하고 유능한 행정관료를 양성해 이들로 정부를 구성한다. 이러한 유교적 가치관과 행동양식은 기독교 문명의 그것과는 서로 맞지 않는 부분이 있다. 한편, 일본사회는 유교적 세

계에 얽매이지 않고 경제와 종교, 사회제도가 각각 독립된 룰에 따라 움직이고 있다.

21세기의 국제사회에서, 중국은 국제사회에 적응해 나아가는 것, 일본은 국제사회와 중국과의 인터페이스적인 역할을 수행하는 것이 과제가 될 것이다.

【기사집필: 하시즈메 다이사부로

(도쿄공업대학교 대학원 사회이공학연구과 가치 시스템 전공·교수)】



橋爪 大三郎 氏 (東京工業大学大学院
社会理工学研究科価値システム専攻・教授)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ③「〈日本意識〉の現在ー東アジアから」

第 10 回東アジア文化研究会

日本対立の心理

- 報告者：石川 好（作家）
- 日 時：2013 年 1 月 23 日（水）18:30～20:30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

中国の歴史は古代、「中原」と呼ばれる地域が文明の中心（中華）にあり、その中原の東西南北の四方を、それぞれ「東夷」・「西戎」・「南蛮」・「北狄」と侮蔑的な名称を付けていた。

この区別から見れば、日本は朝鮮と並び「東夷」に位置している。

中原（中華）は、古代以来、この東西南北の異民族から、しばしば侵入を受け、仮に中国三千年の歴史というものがあるとすれば、その半分近い歳月で、この東西南北からの異民族が支配する王朝を建てていた。

その史実は、近代になっても続き、イギリスによるアヘン戦争によって大陸の南部の海岸都市を奪われ、後にポルトガルやドイツそしてフランス・日本・アメリカなどが租借地を作り出す。これは西洋近代文明が、「南蛮」として、中国史に立ち現われたと見なすことができるであろう。

では、「東夷」たる日本は、中国史にどのように立ち現われているのか。近代以前には豊臣秀吉の明への出兵と倭寇による中国大陆の南部海岸諸地域への侵略として、記憶されている。すなわち、まず「南蛮」の一勢力としても立ち現われたわけである。

そして近代になり朝鮮半島を支配下に治めた日本は、満州に侵攻し、そこに満州国を建てる。すなわち今度は「東夷」として中国に立ち現われたのである。さらに満州から兵を南下させ、中国全土に攻め入る。いわゆる「十五年戦争」である。ということは日本（東夷）近代はまず海を渡り「北狄」として中国の東北部を支配下に置き、その上で万里の長城を越え、中原に攻め込み、十五年近く、中国全土を修羅場化したのであった。比喩的に言えば「日の丸」をかざし、あたかも古代の匈奴のように「日本鬼子」として立ち現われたのである。

以上述べたように中国史を貫く恐怖感とは、文明の中心地たる中原（中華）に対し、東夷・西戎・南蛮・北狄が攻め込み、中原にこれら異民族による王朝を作られるその過程で受けた被害の大きさに由来している。

問題なのは、近代日本が中国大陆で犯したことが、歴史から見れば直近のことであるがゆえに、その被害は、何かのきっかけで昨日のこととしてよみがえる記憶に直結するということなのである。

そのことに関する認識が、残念ながら日本の側には、極めて希薄なのである。日本人は忘れることに關しては特別な才能を持つ民族なのかもしれない。

日本人が考える歴史あるいは歴史の見方と、中国人のそれは大きく異なっている。その点についても双方のギャップは余りに大きいのだ。

今日、日本と中国は尖閣諸島の領土と主権を巡って、厳しい対立状況になっている。日本からすれば、これは「問題」ですらない。中国が一方的に領土・主権を主張しているに過ぎない、と不快感を現わすのみである。

他方の中国は、日本側の主張に対し、これは「問題あり」であるから、この島々を巡って交渉のテーブルに着くべし、と強く迫る。その結果きびしい対立になってしまったのだ。

私が心配するのは、国家と国家が自らの意志で衝突しなくても、すでにその島々を巡って、連日のように公船どうしが接近し、ときには飛行機までもが接近する事態が起きている限り、不測の事故は起こり得るからである。

すなわち「一声の銃声」が大きな戦争を引き起こすように、尖閣を巡っての危険性は、極めて高くなっているのである。「日中公船どうしの衝突」。そうなった瞬間、中国民衆の間に、かつて「北狄」として中原に攻め入り、多大な被害を与えた日本軍鬼子の子の記憶がよみがえることになるであろう。そして、その後何が起こるのか…。十五年戦争のことを想い出してもらいたい。答えはそこにあるからだ。

これこそが、日中関係に前景化している「悪夢」なのである。

【記事執筆：石川 好（作家）】



石川好氏（作家）

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided)
Project for Private Universities (2010-2014)
Research Approach 3 “Present-day ‘Japan-consciousness’: in
East Asia”

10th East Asian Culture Research Meeting

The Sense of Fear Penetrating Chinese History

Speaker: ISHIKAWA Yoshimi (Author)
Date: Wednesday, 23 January 2013, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus Boissonade
Tower 25th Floor Conference Room B
Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Re-
search Center for International Japanese Studies)

Throughout its history, from ancient times, China has had as its nucleus a region called Zhongyuan that is at the centre of the Luoyang basin. Anywhere north, south, east or west of here where living customs differed was despised as the land of the “four barbaric tribes”: the “eastern barbarians”, the “western warriors”, the “southern savages” and the “northern aliens”.

Zhongyuan is the birthplace of civilisation, and it

was firmly believed that as the source of light, this civilisation released light in all directions. No doubt even today there is an underflow of such way of thinking in the minds of China's statesmen.

The set-up of Zhongyuan versus the “four barbaric tribes” is indeed the master-and-servant relationship of civilisation versus barbarism, but it also suggests Zhongyuan (civilisation)'s fear of the “four barbaric tribes” (barbarism)'s military might. Doubtless so, as Zhongyuan was invaded by the “four barbaric tribes” on many occasions, and rival dynasties were established.

In the modern period, Japan built a new kingdom in Manchuria. Seen from the point of view of Chinese history, this meant that the “eastern barbarians”, Japan, firstly invaded the north-east region of China as “northern aliens”, and later headed south to enter Zhongyuan to show their presence as barbarians.

Even today, Japanese militarism continues to be talked of in China in terms of the “invasion of the barbarians”, and the direct hit of fear that penetrated Chinese history.

Report by: ISHIKAWA Yoshimi (Author)

战略研究基础形成支援项目 研究方法③ “‘对日认识’的现状——东亚地区为中心”

第10次东亚文化研究会

关于贯穿中国历史的恐怖心理

报告者: 石川 好 (作家)
日 期: 2013年1月23日 (星期三) 18:30-20:30
会 场: 法政大学市谷校区 布瓦索纳德大厦25层 B会议室
主 持: 王 敏 (法政大学国际日本学研究所教授)

中国历史上自古以来, 将以洛阳盆地为中心的地域作为核心, 将生活习惯不同的东西南北分别蔑称为“四夷”, 也就是东夷、西戎、南蛮、北狄, “四夷”的别名为“蛮族”。中原是文明的发祥地, 如果将其比作光源的话, 其

文明之心照耀着四方。恐怕就算是在今天, 中国的执政者的心里还潜伏着这种想法。

中原对“四夷”的构造, 一方面确实是文明对野蛮的主从关系, 同时也有中原(文明)惧怕四夷“野蛮”的武力的这一侧面。这也本该如此, 因为中原曾经几次遭受四夷的侵略, 并被建立起了异民族的王朝。

日本到了近代, 在满洲建立起了新的国家。这从中国历史的角度来看的话, 曾为“东夷”的日本, 作为“北狄”首先侵入中国的东北地区, 然后南下攻入中原, 作为蛮族出现在了中原地区。

在当今中国, 日本军国主义依然被继续传述, 其原因正在于贯穿中国历史的“蛮族入侵”的这一恐怖心理。

【执笔者: 石川 好 (作家)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기관 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)
국제일본학 연구방법에 기초한<일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래
연구③<일본의식>의 현재-동아시아를 기점으로

제10회 동아시아 문화 연구회

중국 역사에 일관되게 이어져온 공포심에 대해

보고자: 이시카와 요시미(石川 好, 작가)
일 시: 2013년 1월 23일(수) 18:30 ~ 20:30
장 소: 호세이(法政)대학교 이치가야 보아소나드 타워 25층 B회의실
사 회: 왕 민(王 敏, 호세이대학교 국제일본학연구소 교수)

중국의 역사는 고대부터 낙양(洛陽)분지를 중심으로 한 중원(中原)이라 불리는 지역을 중핵으로 생활습관이 다른 동서남북의 이민족을 각각 ‘사이(四夷)’ 즉, 동이(東夷), 서융(西戎), 남만(南蠻), 북적(北狄)이라 부르며

멸시했다. ‘사이’의 다른 명칭은 ‘변족(蠻族)’이다.

중원은 문명의 발상지이며, 이곳을 광원(光源)으로 그 문명의 빛이 사방으로 퍼져 나간다고 확신해 왔다. 그 생각은 어쩌면 지금도 중국 위정자의 심리에 복류(伏流)하고 있을 것이다.

중원 대 ‘사이’의 구도는 확실히 문명 대 야만이라는 주종 관계이나, 다른 한편으로는 중원(문명)이 ‘사이’ 즉 ‘야만’의 무력을 두려워했다는 측면도 있다. 그렇게 될 수 밖에 없었던 것은, 중원은 몇 번이나 ‘사이’에 침략당해 이민족 왕조가 세워졌기 때문이다.

일본은 근대에 들어 만주에 새로운 나라를 세웠다. 이는 중국 역사에서 보면 ‘동이’였던 일본이 ‘북적’으로 나타나 먼저 중국 동북부를 침입하고, 그 후 남하하여 중원을 공격해 야만족으로서 중원에 입성했다는 것이 된다.

지금도 중국에서 일본 군국주의가 계속해서 언급되고 있는 것은, 중국 역사에 일관되게 이어져 온 ‘야만족의 침입’이라는 공포심을 직격했기 때문이다.

【기사집필: 이시카와 요시미 (작가)】

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 22 年～平成 26 年）
国際日本学の方法に基づく「〈日本意識〉の再検討ー〈日本意識〉の過去・現在・未来」
研究アプローチ④「〈日本意識〉の三角測量ー未来へ」

2012 年度第 3 回勉強会

現代マンガに登場する、ロボットやサイボーグ、 ミュータント、ハイブリッドたちを哲学する ーポストヒューマンとはなにか？ー

- 報告者：チエリー・オケ氏（フランス、リヨン第 3 大学教授）
- 日 時：2013 年 1 月 22 日（火）18：30～20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

今回は、フランスのジャン・ムーラン・リヨン第 3 大学のチエリー・オケ氏を迎え、「サイボーグ：現代マンガにおけるポストヒューマンのタイポロジー」と題して行われた。報告と質疑応答はフランス語で行われ、司会は HIJAS 所長で法政大学文学部の安孫子信教授、通訳は法政大学文学部哲学科の石渡崇文氏と安孫子所長が務めた。

オケ氏は自然哲学、啓蒙思想の専門家で、これまでに *Buffon/Linné: éternels rivaux de la biologie?* (2007) や *Darwin contre Darwin : comment lire l'origine des espèces?* (2009) を上梓したほか、2011 年には心身二元論を考察した *Cyborg philosophie : Penser contre les dualismes* を刊行するなど、学問の枠組みを超えた横断的な活動を行う、気鋭の学者である。

報告の概要は以下の通りである。

ダルコ・スーヴィンは、*Metamorphoses of Science Fiction: On the Poetics and History of a Literary Genre* (1979) において「おとぎ話の論理」と「SF の論理」を提唱した。すなわち、「おとぎ話の論理」とは「空飛ぶじゅうたんの論理」であり、重力の法則といった世界の法則が一時的に中断することが認められているが、主人公はすべての願いをかなえることはできず、運命に打ちひしがれて終わることが一般的である。一方、「SF の論理」とは、認知疎外を生み出すものであり、しかも現実の中に隠れている潜在的な事柄を調べ、架空の設定を利用し、具体的な現実の中に埋もれている物事のあり方を明らかにする、世界に対する批判的な眼差しのことである。このようなスーヴィンの区別は有益だが、今回われわれが取り上げる「ポストヒューマンのフィクション」には適合しない場合がある。そこで、この発表では、「おとぎ話の論理」を「すべてが可能で、原因や結果、理由を考える必要のない世界」とし、「SF の論理」を「現実の世界とフィクションの世界が連続している世界」と考えることにする。そして、この発表でわれわれが具体的に検討するのは、ロボット、ミュータント、オルガノグ、サイボーグである。

人格を与えられた固体であり、人間の仲間であるとともに人間に仕える者、人間の奴隷がロボットである。ロボットを代表するマンガは手塚治虫『鉄腕アトム』で、この作品は一見するとおとぎ話に属するように思われる。しかし、実際には、経済的有用

性の観点から導入されたロボットが感情的な次元へと移行する様を象徴的に描くのが『鉄腕アトム』であり、哲学的あるいは SF 的な反省の立場から人間とロボットの関係が捉えられている。

ミュータントは、人間がどのように介入しても意図的に生み出すことができず、「自然のみが生み出さう」という意味で自然主義的性格をも備えている。アメリカン・コミックには『スパイダーマン』や『ファンタスティック・フォー』、『X-メン』のように遺伝子の突然変異によって誕生するミュータントを主人公とする作品が数多く存在する。これに対して、日本のマンガでは、突然変異という厳密な意味でのミュータントが登場する作品は少なく、多くの場合において変形や変身がミュータントの属性として描かれている。ミュータントは SF ではなく、尾田栄一郎のマンガ『ONE PIECE』の主人公ルフィが象徴するように、「現代のおとぎ話」に属している。しかし、『X-メン』はミュータントを SF 的に扱っており、「われわれはどれだけ違えば「異常」になるのか？」あるいは「われわれはどれほどの違いによって「人間」という種から排除されるのか？」といった、「ミュータントの認知疎外」の問題が扱われている。また、大友克洋の『AKIRA』は、変形という突然変異の一般的なあり方を通して、ミュータントを SF 的な観点で描いた作品である。

生身の肉体と機械とが融合し、しかも機械の部品を交換できるサイボーグは、アメリカン・コミックでは『アイアンマン』が代表例であり、日本のマンガでも『サイボーグ 009』を筆頭に、人気の高い登場人物である。しかし、石ノ森章太郎『サイボーグ 009』の場合、登場人物が常に特異な存在であり、代替不可能であるという点で、個人の才能を賞賛する古典的な英雄主義に陥り、サイボーグの話としては成功を収めていないといえるだろう。それでも、『サイボーグ 009』はブラックゴーストという冷戦時代の東西両陣営の産物ともいえる敵役の存在によって、SF という政治的な側面を帯びやすい分野の特徴を明瞭に備えている。マンガからフィクションへと視野を広げると、アメリカの映画『ロボコップ』は、サイボーグの身体についてわれわれが考察するための最良の事例となる。マンガでは大友克洋の『老人 Z』や士郎正宗の『攻殻機動隊』が『ロボコップ』の取り上げた問題を扱っている。とりわけ、『攻殻機動隊』は、「サ

イボーグは古くなる危険があるため、常にメンテナンスを受けなければならない」という形で、サイボーグの身体が交換可能であることの説明を行っている点は、注意が必要であろう。

何らかの道具や機械を身に着けたオルガノグは、道具を使うというオルガノグの特徴に由来する問題、すなわち熟練の問題を本質的にはらむ。「おとぎ話の論理」を代表するのは『ONE PIECE』に登場する、一度に三つの刀を操るゾロであろう。また、寺沢武一の『ゴクウ』は、「巧妙な技術」という古典的なオルガノグの問題を扱っている。また、木城ゆきとの『銃夢』は、「装備と力がすべてではなく、正しく使用することも問題となる」という、個人の才能と技術的な装備のあり方についての反省がなされている。

以上のような検討からわれわれが導き出せるのは、マンガは「人間とは誰か?」、「人間を名乗る資格とは何か?」、あるいは「人間とポストヒューマンとの境界は何か?」という問題を横断的に捉えようとしていることである。また、アメリカン・コミックがミュータントを好み、日本のマンガがサイボーグを好むのは、ある意味でそれぞれの作品の主たる読者である両国の青年層の気質や性向を少なからず反映

しているといえるかもしれない。さらに、手塚治虫の『ブラックジャック』におけるピノコや北条司の『エンジェル・ハート』のグラス・ハートの事例などは、ポスト・ヒューマンにおけるハイブリッドの存在の重要性を示唆する。このように、ある事柄が生み出す現象の背後に存在する、本質的、哲学的、形而上学的、あるいは普遍的な価値の追求が、マンガという媒体を通して行われているといえるのであり、このような追求を行うわれわれが、実はすでにポストヒューマンなのである、ということができよう。

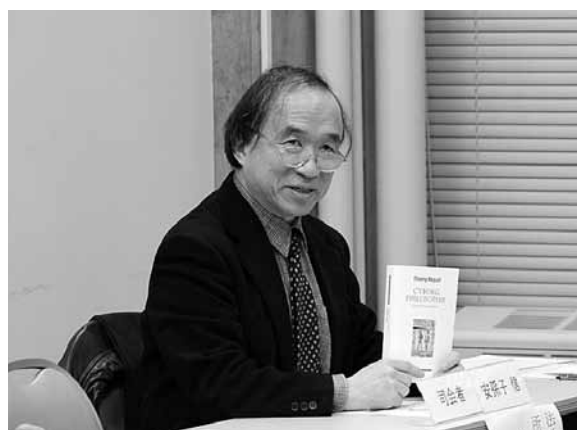
今回の報告では、現代のマンガをサイボーグやミュータントといった存在を通して分析し、娯楽の対象であるマンガに含まれる哲学的、自然科学的な要素の持つ意味が検討された。これは、いわゆるサブカルチャーとハイカルチャーの融合、あるいは相互補完のあり方を明らかにしようとする、意義深い取り組みであると考えられた。

【記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】



チエリー・オケ氏 (フランス, リヨン第3大学教授)



司会：安孫子 信氏
(法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授)



(左) 通訳：石渡 崇文氏 (右) 講師：チエリー・オケ氏



会場の様子

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)

“Re-examining ‘Japan-consciousness’ based on Methods of International Japanese Studies: ‘Japan-consciousness’ in the Past, Present and Future”

Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”

3rd Study Meeting of 2012

Philosophy on the Robots, Cyborgs, Mutants and Hybrids of Contemporary Manga: What is Post-human?

Speaker: Thierry Hoquet (Professor, Jean Moulin University of Lyon III)

Date: Tuesday, 22 January 2013, 18:30-20:30

Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room

Chair: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Literature)

On this occasion we welcomed Professor Thierry Hoquet of the Jean Moulin University of Lyon III, France,

who spoke on “Cyborgs, etc.: Typology of Post-humans in Some Contemporary Manga”. The presentation and question-and-answer session were conducted in French. Acting as Chair was Professor Shin Abiko, Director of HIJAS and Professor at the Faculty of Literature, Hosei University, and interpretation was provided by Mr. Takafumi Ishiwatari of the Department of Philosophy, Faculty of Literature, Hosei University as well as Professor Abiko. The presentation used an analysis of cyborgs, mutants etc. that appear in contemporary Manga to explore the significance of philosophical elements and those from natural science found in the entertainment genre of Manga. Results indicated that Manga adopt a lateral approach to the questions, “Who are humans?”, “What qualifies as human?” and “What is the boundary between human and post-human?”. This lateral handling showed how a cross-examination of essential, philosophical, metaphysical and universal values is carried out through the medium of Manga. In the sense of our conducting such investigations, we might say that we are in fact already post-humans.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

战略研究基础形成支援项目 研究方法④ “对日认识”的三角测量——面向未来

2012 年度第 3 次学习会

在现代漫画中登场的机器人、电子人、突变体、混合体的哲学化——未来人类是什么？——

报告者：蒂耶利·奥盖（法国，里昂第三大学教授）

日期：2013年1月22日（星期二）18:30-20:30

会场：法政大学市谷校区 58年馆2层 国际日本学研究所讲习室

主持：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所长，文学部教授）

此次研究会迎来了里昂第三大学（Jean Moulin - Lyon 3 University）的蒂耶利·奥盖（Thierry Hoquet）教授，为我们作了题为〈电子人：现代漫画中未来人类

的类型论〉（Cyborgs, etc.: Typology of Posthumans in Some Contemporary Manga）的报告。报告和答疑都使用法语，主持是HIJAS所长、法政大学文学部的安孙子教授，翻译由法政大学文学部哲学系的石渡崇文与安孙子所长共同担当。

报告中，以现代漫画中的电子人和突变体为线索进行分析，对作为娱乐对象的漫画所包含的哲学性、自然科学性要素进行了检讨。其结果是，漫画对“人类是谁？”、“自称人类的资格是什么？”、或者是“人类和未来人类的界限是什么？”等问题有着一种横向的捕捉。这种横向的捕捉是以漫画为媒体对现象背后存在的本质的、哲学的、形而上学的、普遍的价值的一种追求。在此意义上，可以说实施这种追求的我们，实际上已经成为了未来人类。

【执笔者：铃村 裕辅

（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员）】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래

연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래를 향해

2012년도 제3회 연구회

현대 만화에 등장하는 로봇과 사이보그, 뮤탕트, 하이브리드들을 철학하다—포스트 휴먼이란 무엇인가—

보고자: 티에리 오케(Thierry Hoquet, 프랑스 리옹 제3대학 교수)

일 시: 2013년 1월 22일(화) 18:30 ~ 20:30

장 소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제일본학연구소 세미나실

사 회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학교 국제일본학연구소 소장, 문학부 교수)

이번 연구회는 프랑스 장 물랭 리옹 제3대학(Jean Moulin-Lyon 3 University)의 티에리 오케(Thierry Hoquet) 씨를 맞이해, “사이보그:현대 만화의 포스트 휴먼 타이팔러지”(Cyborgs, etc.: Typology of

Posthumans in Some Contemporary Manga)라는 제목으로 열렸다. 보고와 질의응답은 프랑스어로 진행됐으며, 사회는 HIJAS 소장인 호세이대학교 문학부 아비코 신 교수가, 통역은 호세이대학교 문학부 철학과 이시와타리 다카후미(石渡崇文) 씨와 아비코 소장인 담당했다.

이번 보고에서는 현대 만화를 사이보그 및 뮤탕트라는 단서를 통해 분석했으며, 오락의 대상인 만화에 내포된 철학적, 자연과학적인 요소가 가지는 의미를 검토했다.

그 결과, 만화는 ‘인간은 누구인가?’, ‘인간이라 말할 수 있는 자격은 무엇인가?’ 또는 ‘인간과 포스트 휴먼과의 경계는 무엇인가?’라는 문제를 횡단적으로 파악하려고 한다는 것이 밝혀졌다. 그리고 이러한 횡단적인 파악은, 현상의 배후에 존재하는 본질적, 철학적, 형이상학적, 혹은 보편적인 가치주제가 만화라는 매체를 통해 이루어지고 있음 보여주고 있다. 그런 의미에서 이러한 것들을 추구하고 있는 우리는 이미 포스트 휴먼이라고 말할 수 있을 것이다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(鈴村 裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】

2012 年度第 4 回勉強会 九鬼周造の実存的美学

- 報告者：ヴァンサン・ジロー氏（京都大学研究員）
- 日 時：2013 年 2 月 22 日（金）18：30 ～ 20：30
- 会 場：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階 国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）

今回は、京都大学研究員のヴァンサン・ジロー氏を迎え、「九鬼周造の実存的美学」と題して行われた。報告と質疑応答はフランス語で行われ、司会は HIJAS 所長で法政大学文学部の安孫子信教授、通訳は法政大学文学部哲学科の石渡崇文氏と安孫子所長が務めた。

ジロー氏は中世哲学、とりわけアウグスティヌスの哲学が専門で、ボルドー第 3 大学ミシェル・ド・モンテーニュで哲学博士の学位を取得しており、現在は京都大学において西谷啓治の哲学を中心に研究を行っている。

報告の概要は以下の通りである。

九鬼周造の『「いき」の構造』は、日本文化の洗練された要素が全て集約された、日本文化の真髄を表現する書物といえる。しかし、九鬼は「大和民族の特殊の存在様態の顕著な自己表現の一つ」として「いき」を分析しているため、読者は、九鬼の筆致のきらびやかさではなく、九鬼が描こうとした「いき」の実存的なあり方に遡る必要がある。

『「いき」の構造』は美学に関する書ではあるものの、美しいものを表現するための形式的な諸規則の体系に属する西洋哲学における美学のあり方に照らし合わせると、「美」のカテゴリーを欠いていることが分かる。九鬼にとって「いき」とは主観的な要素としての形式の評価と客観的な要素としての形式の起源の提示によって成り立っており、意識現象としての「いき」は「媚態」、「意気地」、「諦め」からなっている。そして、『「いき」の構造』は、カントが『判断力批判』で行ったような趣味判断の問題を取り扱うのではなく、美的な諸性質が考察、評価されており、「美しさ」の概念の不在は、「いき」の把握そのものによって満たされるのである。

さて、美学の実存的理解という点において、九鬼はキルケゴールに接近しており、実在性の解釈学事実性の解釈学を確立することに努めたハイデガー哲学を方法論的な基礎に置いている。九鬼は、「いき」の自然的表現と芸術的表現の分析のために「上品と下品」、「派手と地味」、「いきと野暮」、「渋味と甘味」という要素を用いる。ただし「いき」の実存的な構成要素の構造を理解することと「いき」を経験することとは別種のものであり、「いき」がどれほど概念的に分析されとしても、分析された要素によって「いき」を経験することはできない。そして、九鬼は、「いき」を理論的に記述し、読者に理解させるのではなく、「いき」の現象を可能な限り感じさせ、体験させることを真の目的としたのである。その意味で、九鬼は「いき」の説明ではなく、「いき」を通して、実存への誘いかけ

を行なったのである。

それでは、日本民族の特殊性としての「いき」、あるいは「特殊の文化存在」としての「いき」は、外国人の参画を許すのであろうか。ここで問題となるのが、事柄の現象学的探求に固有の要素、言語を絶する要素としての「日本性」である。言語を絶する要素とは共同体的な要素によって感得されるべきものであり、その意味で、九鬼は文化的、民族的な明証性を前提とした経験の実体化を試みたといえる。しかし、九鬼の独自性は、実存の厳格な分析と特殊な文化の分析のいずれをも拒否したことであり、日本的経験の実体化は、人間存在に対する九鬼の自覚により回避されたのである。

九鬼は、「民族存在」の根底に民族に固有な「我々」によって実現される実現性としての文化の概念を措定する。そして、「いき」の経験は、「特殊な民族存在」が人間存在に属することに同意することによって成り立つのである。ここにおいて、民族の概念は文化の中で体现されることになり、抽象的な普遍性でも、民族的具體性でもない、人間存在が持つ潜在性の現実化が図られる。その意味で、文化は実存的な態度として内在的に規定されるとともに、経験は民族の中で深められ、あらゆる個的な存在が独自の可能性によってその経験を拡張することになり、これは、実存に対して与えられるべき適切な形であるといえるだろう。

ここで、『「いき」の構造』が何を目的として書かれたかを考えると、答えはどのようなものになるだろうか。九鬼は、「「いき」は現代においては生き残れない」と主張するのでも、「日本文化の精髓を保持せよ」と主張するのでもなく、「実存によって開かれた時限を生きること」を目的としたのであって、一般化されることによって卑俗（vulgaire）になることが脅威である、と訴えようとしたのである。ラシーヌの作品が忘却されることを恐れたスタンダールに似て、九鬼は「いき」が忘却されつつあったからこそ、あえて「いき」を主題として取り上げたのであろう。そして、もし美学が現実存在する人間のあり方を離れて単なる思考実験に陥るのなら、卑俗化という姿を借りた危機が忍び寄り、人間が存在する固有のあり方にまでその影響が達していることになるのである。

「日本文化を解説した本」と思われがちな『「いき」の構造』が、「いき」という要素を通して人間のあり方の本質に迫ろうとした論考であるとともに、人間の実在を考える手がかりとなる「いき」が忘却の危機に瀕しているからこそ九鬼があえて「いき」を主題とした、という指摘は、日本の文化的な特徴と人間の本質

のあり方を考えるために、われわれに示唆に富む観点を提供したと考えられた。

MEXT Strategic Research Base Development (Grant-aided) Project for Private Universities (2010-2014)
Research Approach 4 “Triangulation of ‘Japan-consciousness’: into the Future”.

4th Study Meeting of 2012

The Existential Aesthetics of Kuki Shūzō

Speaker: Vincent Giraud (Researcher, Kyoto University)
Date: Friday, 22 February 2013, 18:30-20:30
Venue: Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building
2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair: ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Literature)

This occasion welcomed Professor Vincent Giraud, researcher of Kyoto University, who spoke on the theme of “The Existential Aesthetics of Kuki Shūzō”. The presentation as well as questions and answers were carried out in French; Director of HIJAS, Professor Shin Abiko took the chair, and interpretation was provided by Takafumi

【記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

Ishiwatari of the Department of Philosophy, and Professor Abiko.

Kuki's *The Structure of “Iki”* can be described as bringing together the refined elements of Japanese culture to express the true image of Japanese culture. Kuki does not insist, however, that “iki” cannot survive in the modern world”, or that the “Japanese cultural spirit should be protected”. On the contrary, Kuki saw it as “occupying the space-time opened by existentialism”, but warned that the popularisation of “iki” would lead to its vulgarity.

The Structure of “Iki”, often classed as a “hermeneutics of Japanese culture”, is in fact a study using the elements of “iki” to trace the essence of human ways. Furthermore, Giraud indicated, Kuki took “iki”- the key to considering human reality - as his main theme precisely because “iki” is on the verge of oblivion. This offered us a viewpoint with many suggestions for considering the ways of human nature and the characteristics of Japanese culture.

Report by: SUZUMURA Yusuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

戦略研究基礎形成支援項目 研究方法④ “対日認識” の三角測量——面向未来

2012 年度第 4 次学習会

九鬼周造の存在美学

報告者：文森特・ギラウド（京都大学研究員）
日 期：2013年2月22日（星期五）18:30-20:30
会 場：法政大学市谷校区 58年館2層 国際日本学研究所講義室
主 持：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所長・文学部教授）

此次研究会迎来了京都大学の研究員文森特・ギラウド (Vincent Giraud)，为我们作了题为〈九鬼周造の存在美学〉(The Existential Aesthetics of Kuki Shūzō) の報告。報告と答題都使用法語，主持是HIJAS所長、法政大学文学部の安孫子教授，翻譯由法政大学文学部哲学

科の石渡崇文と安孫子所長共同担当。

九鬼周造の『“粋”の構造』可以说是，集成了精炼过的日本文化要素的全部、表现了日本文化精髓的一本书。不过，九鬼既不主张“‘粋’不能在现代残存”，也不主张“保持日本文化的精髓”，而是主张应当以“生存在存在所开启的时限”为目的，由“粋”的一般化所引起的低俗倾向是一种威胁。

被认为是“解说了日本文化”的这本『“粋”の構造』，一方面通过“粋”这一要素讨论了人类本质的所在，另一方面，作为思考人类存在的线索，“粋”正面临着被忘却的危机，正因如此九鬼才要将“粋”作为主题。吉ラウドの所指出的这些，为思考日本的文化性特点和人类本质的所在提供了非常丰富的观点。

【执笔者：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

문부과학성 사립대학 전략적 연구기반 형성 지원사업(2010년 ~ 2014년)

국제일본학 연구방법에 기초한 <일본의식>의 재검토-<일본의식>의 과거·현재·미래
연구④ <일본의식>의 삼각측량-미래를 향해

2012년도 제4회 연구회

구키 슈조의 실존적 미학

보고자: 뱅상 지로(교토(京都)대학교 연구원)
일 시: 2013년 2월 22일(금) 18:30 ~ 20:30
장 소: 호세이(法政)대학교 이치가야 캠퍼스 58년관
2층 국제일본학연구소 세미나
사 회: 아비코 신(安孫子 信, 호세이대학교 국제일본학연구소 소장·문학부 교수)

이번 연구회는 교토대학교 연구원 뱅상 지로 (Vincent Giraud) 씨를 맞이해, 구키 슈조(九鬼周造)의 실존적 미학(The Existential Aesthetics of Kuki Shūzō)이라는 제목으로 열렸다. 보고와 질의응답은 프랑스어로 진행됐으며, 사회는 HIJAS 소장인 호세이대학교 아비코 신 교수가, 통역은 문학부 이시와타리 다카

후미(石渡崇文) 씨와 아비코 소장이 맡았다.

구키 슈조의『“이키”(い奇)의 구조』는 일본문화의 세련된 요소가 모두 집약된, 일본문화의 진수를 표현한 책이라고 할 수 있다. 그러나 구키는, “‘이키’는 현대에서는 사라질 것”이라고 주장하는 것도, “일본문화의 정수를 유지하라”고 주장하는 것도 아닌, “실존함으로써 열려진 시한 속에서 살아가는 것”을 목적으로 하고 있으며, ‘이키’가 일반화됨에 따라 비속(vulgaire)화 되는 것이 위협적이라고 호소하려고 한 것이다.

지로 씨는, 보통 ‘일본문화를 해설한 책’이라고 일컬어지는『“이키”의 구조』는 ‘이키’라는 요소를 통해 인간의 본질에 접근하려 한 논고이며, 구키가 굳이 ‘이키’를 주제로 삼은 것은 인간 실존 고찰의 실마리가 되는 ‘이키’가 망각될 위기에 처해 있기 때문이라고 지적했다. 이러한 해석은 일본의 문화적 특징과 인간 본연의 자세를 생각하는데 있어 많은 시사점을 제공했다고 생각된다.

【기사집필: 스즈무라 유스케

(鈴木 裕輔, 호세이대학교 국제일본학연구소 객원학술연구원)】



ヴァンサン・ジロー氏（京都大学研究員）



（左から） 司会：安孫子 信 氏
通訳：石渡 崇文 氏
講師：ヴァンサン・ジロー 氏



会場の様子

ニュースレター NO.18 翻訳者紹介

（英語翻訳）

バーバラ・クロス（ロンドン大学 SOAS）

（中国語翻訳）

周 曙光（法政大学国際日本学研究所学術研究員）

（韓国語翻訳）

金 英美（法政大学国際日本学研究所学術研究員）

朴 庾卿（法政大学国際日本学研究所学術研究員）

法政大学国際日本学研究所

研究成果報告集『国際日本学』第10号

法政大学国際日本学研究所の研究成果報告集である『国際日本学』第10号には、研究論文が5編、小特集「大連シンポジウム2011」の成果報告論文が6編、若手研究者論文が3編、研究アプローチ活動報告が5編、彙報が収録されている。



国際日本学研究叢書 17

『日本のアイデンティティを＜象徴＞するもの』（2011年アルザス・シンポジウム報告）

本叢書は2011年11月4－6日に行われた国際シンポジウム「日本のアイデンティティを＜象徴＞するもの」（2011年アルザス・シンポジウム）の成果報告書である。本叢書には、国際シンポジウムの成果をまとめた研究論文11編が収録されている。

国際日本学研究叢書 18

『相互探求としての国際日本学研究－日中韓文化関係の諸相－』

本叢書は法政大学国際日本学研究所の研究アプローチ（3）「＜日本意識＞の現在－東アジアから」の2012年度の活動をまとめたものである。本叢書は第1部「中国における日本研究の現在」、第2部「東アジアの中の日本文化」、第3部「日中韓における「共通性」への探求」、第4部「日中韓関係の原点」からなり、研究論文24編が収録されている。



Buddhist Art : Reports from the International Symposium "Japanese Buddhist Objects in European Collections and Their Impact on the European Image of Japan"

本書は2012年6月4－6日に行われた国際シンポジウム "Japanese Buddhist Objects in European Collections and Their Impact on the European Image of Japan" の成果報告書である。本書は 'Introductory Remarks and Conclusion'、'Remarks on Japanese Buddhist Art'、'Examples of Collections and their Impact' の3部からなり、研究論文など34編が収録されている。



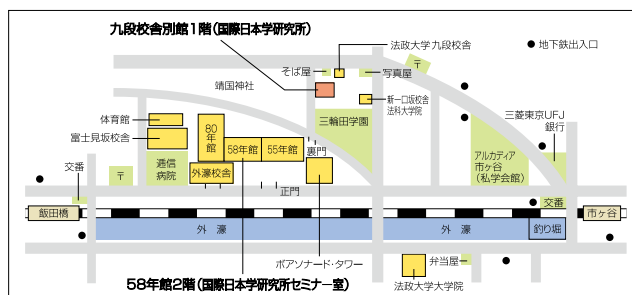
〒102-0073

東京都千代田区九段北3-2-3 九段校舎別館1階

TEL : 03-3264-9682 FAX : 03-3264-9884

E-mail: nihon@hosei.ac.jp

URL: <http://hijas.hosei.ac.jp>



この冊子は再生紙を使用しています。